

音は卷數を略し、蜀の母昭裔が音となし、其圖は宋元の人繪する所とせり、甚だ精明にして、疑らくは必ず本づく所あらん、すなはち郭氏の舊に非ず、然れども舊音及び圖は、宋本あるによりて其梗概を存せり、良に寶と爲すにたれりと云、

○說文解字三十卷

十冊

漢の許慎撰す、慎字は叔重、汝南の人なり、官太尉、南閣の祭酒に至る、是の書は帝の永元十二年に成る、凡そ十四篇、目錄一篇、五百四十部に分つ、文九千三百五十三、重文一千一百六十三、註文十三萬三千四百四十字、六書の義を推究し、部を分て類從し、精密に至る、然ども訓詁簡質にして通じやすからず、又音韻改め移り、古今讀を異にし、諧聲の諸字また明めがたし、故に傳本往々異なり、此本毛晉が汲古閣に翻刻せる宋本の初印本を以て、今官刻を命せらるゝ所のものなり、

○字學七種二卷

二冊

是の書題して江都の李祕園先生撰すと云り、其人を詳にせず、凡そ點畫の訛る、音義の異なる、みな辨別し、又經文に考へ、旁ら子書釋典に及び、區分類聚し、一に分毫字辨、二に同音異用、三に誤讀諸字、四に異音駢字、五に誤寫諸字、六に通用諸字、七に一字數音、分て七類となし、冠するに小序を以てせり、卷帙の簡にして尋やすし、藝林に功あるの書なり、

○通叶集覽二卷

二冊

清の王鳴玉編す、鳴玉字は心壺、肝江の人なり、古韻の通轉ある、由り來る事久し、宋の吳棫韻補あり、明の楊慎轉註古音略あり、潘恩詩韻輯略ありて、皆以て古韻を發明し、最も核備なりとす、是に嗣で譌を訂し、闕を補ひ、諸家を集成する者は、尤も清の邵長蘅が古今韻略の一書は、古韻の通轉叶音すこぶる詳かなり、然ども一字にして音の異なる、義の同じき事ありて、諸家の通變の用に供するものあらず、鳴

玉が此の編は、字典の分部によりて採用をなし、通叶の韻、平仄あひ通するの字、共に詩家の廢すべからざるが爲にして作れり、此の編、韻補の舊により、諸韻のあひ通するものは、別に總目を爲りて披覽に便りならしめ、又平仄のあひ通するものは、廣韻集韻を採り、切響のあひ叶ふものは、補韻略おのゝ根據あるを採ると云、文約にして義備り、洵に吟咏の一助となすべきものなり、

史部

○稽古錄二十卷

四冊

宋の司馬光撰す、光の通鑑及び目錄考異また舉要歴あり、歷年圖あり、百官表あり、是の書は、上は伏羲より英宗の治平の末に訖る、然ども書を成す事二十卷に過ぎず、蓋しおのゝ書の卷帙繁重なるを以ての故に、繁亂を刪り、約して此編を爲れり、元祐の初め表上せり、朱子語錄に云、稽古錄の一書は、講筵の官僚の進讀に備ふべく、小兒六經を讀み終り、

これを讀しむべし、亦末後の一表、その言の耆龜の如し、一々みな驗しあり、又國をたもち家をたもつもの、炯鑒にして治道に裨けあるもの甚だ深しとあり、

○通鑑綱目五十九卷

六十冊

○續編二十七卷

二十七冊

宋の朱子撰す、朱子司馬光の通鑑によりて、綱目を作れり、たゞに凡例一卷は、その手定に出たり、其綱はみな門人、凡例によりて其目を修せり、ひとり趙師淵史學に長せるを以て、全く其事に任せりと云り其續編は明の商輅、成化中文淵閣の學士を以て其事を纂修せり、これに與づかるの學士萬安等十五人、輅總裁たり、成化十二年書成て上つれり、成化帝序して天下に頒てり、此の二書ともに註釋を刪れるなり、

○通鑑答問五卷

五冊

宋の王應麟撰す、應麟字は伯厚、慶元の人なり、淳祐元年の進士にして、寶祐四年に復た博學鴻詞の科

に中り、官は禮部尙書兼給事中に至る、此の書は玉海の末に附刊せるの一種なり、周の威王より始り、漢の元帝に終る、蓋し未成の本なり、通鑑答問を以て名とすと雖ども、然ども多く朱子の綱目に涉れり、蓋し綱目もと通鑑によりて作る、故に應麟の論ずる所、二書の間に入せりと云へり、

○讀通鑑綱目條記二十卷

十冊

清の李述來撰す、述來字は紹仔、武進の人なり、是の書は、卷首に朱子の綱目の序例、凡例及び朱子の趙師淵に答るの書、尹起莘が發明の序、劉友益が書法凡例、汪克寬が考異凡例の序、王幼學が集覽の序、徐昭文が考證の序、陳濟が集覽正誤の序、馮智舒が質實の序例等を擧て、その例法を置き、その異例あるを訂正し、又綱目發明集覽等の諸書に引く所の違ひを擧げ、又本篇の行簡節文に過ぎ文義の通せざるを、一々條記せるなり、此の書綱目を讀に功あるの書なり、

○東華錄十六卷

十六冊

清の蔣良騏撰す、良騏字は千之、蕪州の人なり、一に全州に作る、陳景雲の門に出づ、此の書は、清の始祖長白山に朱果の靈彰ありしより、十五主終に基を開き、太祖、太宗、聖祖、世祖の事實を録し、明の萬曆十一年に起り、雍正の十三年に終る、騏が言に云、實錄紅本各種の官修の本を以て主とし、列傳事蹟及び朝章國典兵禮の大政、闕し分て片紙を以て記し、積年にして是の編を成と云、乾隆三十年に國史館の東華門内に纂修を開くを以て、東華錄と題せるなり、此書鈔本により官刻せらるゝ所なり、近日舶齋する大小二種の本互に異同あれども、後來潤色をへざる前の本なれば、反て事實を得ること少からざるなり、

○唐鑑二十四卷

四冊

宋の范祖禹撰す、呂祖謙註す、祖禹字は淳父、華陽の人なり、嘉祐八年の進士にして、龍圖閣の學士に歴官せり、治平中に司馬光詔を奉じて通鑑を修せり、

祖禹編修官となりて、唐史を分掌せり、其よつて得る所のものを以て、此の書を成せり、上は高祖より下は昭宣に迄るまで、大綱を撮取し、繋るに論斷を以てし、卷をなすこと十二、元祐の初め表上せり、後祖謙註を作り、分つて二十四卷となせり、貴耳集に云、高宗講官と云ふ、資治通鑑を讀て司馬光の宰相の度量あることを知り、唐鑑を讀て范祖禹の臺諫の手段あることを知ると云へり、

○魏鄭公諫錄五卷

三冊

唐の王方慶撰す、方慶名は淋、字を以て行はる、武后の時、官は鸞臺の侍郎同鳳閣鸞臺平章事に至り、太子の左庶子に終り、石泉縣公に封せらる、諡して貞と云、事蹟新唐書本傳に具さなり、方慶博學にして朝章に探練なり、書二百餘篇を著す、此の書魏徵が事蹟を録す、唐書藝文志に魏徵が諫事となし、司馬光が通鑑目錄に魏元成故事となし、標題の互に異なり、ひとり洪容齋隨筆に魏鄭公諫錄に作る、方慶武后の

時に嘗て言を以て主を悟す、召て廬陵に還る、後建言して太子の名を斥けず、復位の漸を以てす、蓋し伉直を以て自らあらはるゝものなり、故に徵が諫争の語において、撫錄もつとも詳かなり、司馬光が通鑑に記所、徵がこと多く是の書を以て據となすと云へり、

○魏鄭公諫續錄二卷 武英殿聚珍版原本 二冊

元の翟思忠撰す、此の書撰人の名氏を著はさず、元の伊足鼎が魏鄭公諫錄の序に云、王淋が諫錄五卷、至順の初め下邳の翟思忠常州の知事たりしとき、其餘を撫ひて續錄二卷を作る、其書元統中に刻し、明初已に罕に流傳す、故に彭年遺文を蒐採し、續錄一篇を爲りて、以て其闕を補へり、此本載て永樂大典中にありて、諫錄の後篇の數と、伊足鼎が説く所と合り、蓋し翟思忠が續する所なり、王氏の輯録する所の諫錄、僅に其見聞する所に據りて、賅備なることあたはず、唐書魏徵が傳に前後二百餘、奏して當帝

の心に割切ならざるものなし、已に盡く傳はらず、其他の片語單詞時に隨つて獻納するもの、更に史の盡く紀さるる所となすと云へり、此本衆説を拾ひ、史傳と異同ありて、實に諫諍の事に非ずして、廣く録中に濫入せるあり、然ども大旨明白にして、治道に切要なり、頗る補要ありとなす、他の小説雜記の比に非ざるなり、

○伊洛淵源錄十四卷

四冊

宋の朱子撰す、是の書乾道癸巳に成る、周子より以下及び程子交遊の門弟子の言行、其身の程門に列して、言行の表見する所なく、甚しきは邢恕の反して、害をなすが如きものも、また具に其名氏を録して、借考をなす、其後宋史道學儒林の諸傳、この書によりてこれを爲れり、蓋し宋人の道學の宗派を談するも、此の書により始めり、宋人の道學の門戸を分つも、またこの書より始ると云へり、

○朱子年譜四卷、考異四卷、附錄二卷 七冊

清の懋竑撰す、竑字は予中、寶應の人なり、康熙戊戌の進士にして、安慶府の教授を授けらる、雍正癸卯特に召して内庭に入直し、翰林院の編修に改めらる、朱子の年譜數本ありと雖ども、精確なるはなし、竑朱子の遺言において思を研する最も久し、よつて李氏の撰する年譜、洪氏の續を取り、互に相ひ參考し、語録文集にもとづき、舛漏を訂補して、四卷を爲れり、又備さに其去取の故を列し、朱子の韓集を校正せる例に仿ひて、考異四卷を爲り、併に論學の要語を取りて、附錄二卷を爲る、其文旨辨別ありて、學をなすの次序學問において特に詳にし、政事に於て頗る略せり、生平の著述、みな一々年月を縷述し、獨り陰符經、參同契の考異において、其名を載せず、亦意ありてこれを諱に似たり、年譜の體例に於て、ことごとく合はざれども、以て朱子の學譜となせりと云、

○考亭淵源錄二十四卷

八冊

明の宋端儀撰す、薛應旂重修、端儀字は孔時、莆田の人なり、此編は伊洛淵源錄の例に仿ひて、首に延平の李侗、籍溪の胡憲、屏山の劉子翬、白水の劉勉の四人を列し、師承のよつて次づる所に溯り、次に朱子の始末を載せ、次に同時の友人に及び、南軒の張栻に至て、以下七人、次に則考亭の門人勉齋の黃榦より、以下二百九十三人を備列し、其二十三卷は

すなはち門人の文字を記述するものなきは、其名を列せり、凡て八十八人、末の卷はすなはち考亭の叛徒趙師雍、傅伯壽、胡紘等の三人は、また伊洛淵源錄に邢恕を載するの例を用ひたるなり、應旂初に王守仁に學び、陸氏の學を講じ、晩に洛閩の旨を研窮し、朱子を兼ね取り、其目錄の後に云ることあり、兩先生の實に以て相ひ成す所を以て相ひ返する所に非ずとして、遂に陸九淵兄弟三人を以て考亭淵源錄の中に列するは、名實に乖くことを免れざるなり、

○自號錄一卷

一冊

宋の徐光溥撰す、光溥錢塘の人なり、其人を詳にせず、此の書は宋時の名鉅卿騷人墨客の號、凡て三十七、末に雜類を附せり、淳祐丁未友人譚友聞序を作りて傳へたり、

四冊

○廣輿古今鈔無卷數
清の程名失す、此の書は初に歷代の都會を置き、次に清國兩京十四省となし、直隸京畿より次第をなし、山川の景勝を記し、またおの／＼府と州との額賦の多寡及び禹貢の境域、天文分野を記し、また歷代の建置の沿革を述べたり、統て府の數ともに一百九十二州、ともに二百三十二、内直隸州五十八縣、ともに一千二百八十六なり、清國の地理の總志に於て開卷了然たり、

○朝鮮史略六卷

六冊

是の書一名は東國史略、撰人の名氏を著はさず、明時の朝鮮人の紀す所にして、其國の治亂興廢の事、檀君に始りて高麗の恭讓王に終る、王瑤の新羅朴氏よ

り以前はや、略せり、高麗王建より以後はみな編年し、記載の事蹟すこぶる具せり、

○琉球國史略十六卷

六冊

清の周煌撰す、煌字は景垣緒楚と號す、涪川の人なり、是の書は乾隆二十一年翰林院侍講全魁編修周煌を正副使に充て、其國に往かしめ、世子尙穆を冊して中山王となす時に、煌使を奉ずるの途次、及び使館の餘暇において見聞の及ぶ所時に隨つて採輯し、京に回りに傍はら正史諸書に正し、數月にして門を分ち、類を比して、此の編を成せりと云、凡て冊封の典禮、風俗及び山川の景勝、中山の世系を專に紀せり、初に圖繪あり、其國の風物を詳にせり、

○平山堂圖志十卷

四冊

清の趙之璧撰す、宋の歐陽修慶歷八年楊州に守たるの時築く所なり、楊の地平衍にして、俗好て高樓傑閣を作り、以て遠景を收む、平山堂ことに其一なり、今に至り七百餘年、其間興廢あり、清主此の堂に臨

幸ありて、御筆の扁額製詩及び器什の賜あり、此書蜀岡保章の名勝全圖あり、又城闌清梵より蜀岡三峯に至り、再び尺五樓より九峯に至るの眞景を繪き、一たび此卷を展て閱するときは、仙界に入るが如く、實に一奇觀なり、山水の景勝目中に瞭然たり、平山堂、宋時より名賢の題詠碑記あり、舊と汪應庚が攬勝志程夢星が小志あり、俱に古雅極て見るべけれど、藝文の一門を重じ、故事に於ては缺略せり、この編博く群籍を搜羅し、類聚區別して、體裁備はれりと云、乾隆乙酉の年、之壁楊に守たるの時に編せり、

○唐六典三十卷

八冊

唐の玄宗御撰、李林甫註す、此の書林甫勅を奉じて其書に註せり、三師、三公、三省、九寺、五監、十二衛を以て其職司官佐を列し、其品秩を敘して、周禮に擬せり、唐會要に開元二十三年張九齡等此の書を撰すと、然ども唐書に九齡開元二十四年知政事を罷め

らる、すなはち書の成るとき、九齡なほ位にあり、後二十七年に至りて、林甫の註成りて、獨り之を上る、この書修して進を経ざるものなり、よつて首に獨り

林甫の名を題せるなるべしと云へり、

○州縣提綱四卷 李氏函海原本

一冊

此の書撰人の名氏を著はさず、文淵閣書目に陳古靈撰すと、古靈は陳襄が別號なり、襄字は述古、侯官の人なり、慶曆二年の進士にして、事蹟宋史本傳に具さなり、史に稱せり、其官に莅み、至る所必ず民間の利病を講せり、歿して後の人劉彝その篋を視て、手書數十幅を得たり、みな民事を云へりと、すなはち是の書なり、裏に出るに似たれども、宋史藝文志等に載せず、文淵閣書目に題する所、譌り傳ふるに出づるなり、其書州縣の民に莅むの方を論ずる事、詳に備はれりとせり、凡て姦を防ぎ弊をたゞすの道、もつとも明にして、首卷に本を推し己を正し身を省るの數十事、もつとも要を知とせり、亦司牧たるもの

指南と爲すべし、襄が手に出でずと雖ども、心を吏事に究め、民情を悉するものにあらざれば、作る事能はずと云へり、

○官箴一卷

一冊

宋の呂本中撰す、本中の作る所の童蒙訓、己を修め人を治るの道においてつぶさに條理あり、蓋し心を經世にとむるものなり、此書多く閱歷する事あるの言にして、實事を書するものなり、首に清慎勤の三字を掲げて以て官に當るの法となす、其言千古易ふべからざるなり、其欺かざるの道を論ずるに至りては、明白深切にして、亦以て儆戒を資くるに足れるものなり、篇帙の多からざれども、詞は簡にして義くはし、もとより官にあるものの龜鑑なり、

○畫簾緒論一卷

一冊

宋の胡太初撰す、太初は天台の人なり、端平乙未の年、その外舅陶某出て香溪に宰たるの時、太初よつて縣令居官の道凡て十五篇を論次して、之を貽れり、

後十七年淳祐壬子の年、太初出て處州に守たるの明年、またこの稿をその戚陶雲翔なるものに得たり、遂に之を版に鈐り以て屬縣に授けたり、其目はじめに己盡と曰ひ、次に臨民と曰ひ、事上と曰ひ、察案と曰ひ、御史と曰ひ、聽訟と曰ひ、治獄と曰ひ、催科と曰ひ、理財と曰ひ、差役と曰ひ、賑恤と曰ひ、行刑と曰ひ、期限と曰ひ、勢利と曰ひ、然てこれを終るに嫌を遠ざくるを以てす、條目詳に盡せり、蓋しまた州縣提綱の類なり、其大旨己を潔し、心を清し、民を愛し、政を勤むるを急務とせり、反覆おしひらき、實に事情にあつるに切ならざるなしと云へり、

○三事忠告四卷 貸園叢書原本 一冊
元の張養浩撰す、養浩字は希孟、雲莊と號す、濟南の人なり、官は禮部尙書、參議中書省事に至る、事蹟元史に具さなり、養浩の縣令たりしときに、牧民忠告二卷を著はす、凡て十綱七十二子目、御史たりしときに、廟堂忠告一卷を著す、また十篇、その言

みな理に近かうして迂濶ならず、蓋し養浩、心を實政にとゞめ、閱歷する所のものを著すなり、三事を一事に著すにあらざるなり、明の洪武二十二年に廣西の按察司僉事たりしとき、黃女宏あはせて一卷となし、これを刻して總て題して政忠告となす、宣徳六年河南の知府李驥重刻して三事忠告と改むと云へり、
○漢官舊儀一卷、補遺一卷 武英殿聚珍版原本 一冊
漢の衛宏撰す、清の紀昀等補遺、この書撰人を著はさず、永樂大典に此卷漢官を以て標題す、然れども篇目は皇帝の起居、皇后の親蠶より以て璽綬の等、爵級の差に及で、一々件舉せざるなし、宏が傳に云ふ所の西京雜事と相合へり、又前後漢書の註中に、凡て漢の舊儀を引用するもの、並にこの卷に載する所とあひ同じ、衛氏の本書たる更に疑ひなく、或は後人その官制を多く載するを以て、官の字を増し題せるかと云へり、又前後漢書紀志の註中を考ふるに、別に舊儀の數條を徵引するあり、并に郊天、禘祭、耕籍、飲酎

緒論は、儒者の正理にあらざるとあり、

○唐律疏義三十卷

十五冊

の諸大典を屬す、此の卷ともに載せず、蓋し流傳のすでに久しく、脱佚するものなるべし、因つて蒐擇甄録し、別に一篇をつくり、卷尾に附して本書の備はらざるを補と云へり、

○救荒活民補遺書三卷

二冊

宋の董煟撰す、明の朱熊補遺、煟字は季興、鄱陽の人なり、紹熙五年の進士にして、嘗て瑞安縣に知たり、熊字は維古、江陰の人なり、此の書、上卷は古を考へ今に證せり、中卷は荒年を救ふの策を條陳せり、下卷は備さに本朝の名臣賢士の議論する所の施行の法、戒となすべきものを述べたり、當時の利弊すこぶる委し、實に宋史の闕を補ひ、勸分はまた宋史の政令の失載するを、此書に於てこれあるなり、尙古書中の實用をたすくるものなり、補遺は有明の郵賑制詔、及び前代の施を好み、福をうるの事蹟、その意を立る不善をなさざる事を以てせり、其郷里の勸施の格言は、經國の碩畫に非ざるなり、書中佛氏の因果の

唐の大尉揚州の都督趙國公長孫無忌等勅を奉じて撰す、風俗通に云、阜陶謨に虞律を造ると、尙書大傳に夏の刑三千、周の刑二千五百と稱せり、これ律を言ふの始とす、其後魏の李悝法經六篇を著す、商鞅これを受けて以て秦に相たり、漢の蕭何三篇を益して九篇となす、叔孫通また十八篇を益し、張湯越が宮律二十七篇、趙禹が朝律六篇を合せて六十篇、馬融、鄭康成みな嘗て之が章句を爲る、魏の世漢律を刪り約して十九篇に定増す、故の五篇に就き十八篇を合す、晋また増損して二十篇を爲る、南北朝互に更改あり、隋の文帝の開皇三年に蘇威、牛宏等に勅して新律を更め制し、死罪より以下千餘條を除き、定めて五百餘條をとゞめたり、篇目凡て十二、一に名例、二に衛禁、三に職制、四に戶婚、五に廢庫、六に壇興、七に盜賊、八に鬪訟、九に詐譌、十に雜律、十一に

捕亡、十二に斷獄、卷を成す事三十、その刑網簡要、疎にして失はずと稱せり、唐の太宗房元齡等に詔して隋律を増損し、大辟を下して流となすもの九十二、流徒となすもの七十一にして、大旨多く其舊による、高宗位につき、又長孫無忌等ともに律學の士に命じて義疏を撰ばしめて之を行ふ、此の書なり、宋の世多く之を採用せり、元時斷獄また毎に據とせり、明の洪武の初め、儒臣同じく刑官に命じて唐律を進講せり、のち劉惟謙等に命じて明律を詳定せり、其篇目は一に唐律を準用せりと云、其書元の泰定の間、江西の儒學提舉柳贊校刊し、卷末に江西の行省檢校官王元亨が釋文一卷を附せり、

十七冊

○八史經籍志二十三卷

此編は後漢班固が漢書藝文志一卷、唐長孫無忌等が隋書經籍志四卷、晉劉昫が舊唐書經籍志二卷、宋歐陽修が新唐書藝文志四卷、元脱々が宋史藝文志八卷、清張廷玉等が明史藝文志四卷は、皆正史より鈔出し、

其餘は元倪燦が原撰を清盧文弨が補する宋藝文志一卷、清盧文弨が補遼金元藝文志一卷、俱に抱經堂叢書中に收する所、金門詔が補三史藝文志一卷、金東山集中に收する所、錢大昕が補元史藝文志四卷、潛研堂叢書に收する所の以上八種、其本を陳列して彙刻せらる、蓋し書目は古書の存佚を検じ、及び門目を探討せる緊要にして、この史志によりて書目の體例を見らるべきなり、目錄の學は學中第一の緊要なりと、王鳴盛が十七史尚確に云れば、學者必ず精究すべきものなり、

五冊

○四庫全書總目無卷數

乾隆三十七年宗室永瑤等勅を奉じて撰定し、翰林學士紀昀主修たり、四十七年成を告げたり、卷首に聖諭表文凡例ありて、經史子集の四部分てり、その四部の中に子目あり、凡て四十三類、各冠らすに總序を以て其源流を述べ、綱領を挈し、また子目の首にをのゝ小序を以てし、詳にその分併を述べたり、

著録といひ、附存といひ、又條目の下に解題あり、凡て卷をなす事二百、その卷帙の繁重に互たるを以て、檢尋に便ならざるが故に、此本は解題を削り去つて、簡便に従へり、尙崇文總目の序釋論説を削るの例なり、

○古今偽書考無卷數、知不足齋原本 一冊

清の姚際恆撰す、際恆字は首源、新安の人なり、嘗て好古堂書畫記を著はせり、是の書は古今の偽書多く、眞偽を辨じがたきを以て之を辨別せり、經史子の三類を分ち、考證を後に附せり、明の宋濂諸子辨を爲れり、よつて經史子の三類を合せて辨せり、その前人の辨論の精確なるものは、悉く前に載せたりと云、又四部の中集なるもの、別集は人の偽をなし難きを以てこれに及ばすと云へり、子の類中に佛氏にわたるの書は、また略せり、偽書の外に眞書にして難ふるに偽を以てするものあり、又もと偽書に非ずして後人の妄に名を託するものあり、兩人一書を共にし、何人の

撰なるを知らざるあり、其著書の人を定むるにたざざるの類を附して辨別せり、

○彙刻書目無卷數、清板翻刻

十冊

清の顧修撰す、修字は棗厓、相州の人なり、嘗て讀書齋叢書を編刻す、其人なり、蓋し叢書彙刻の書あるは、宋の左圭が百川學海、明の陶宗義が說郛に始り、其名を題し校刻せるものは、明の程榮が漢魏叢書、瑞先卿が唐宋叢書に始れり、其類目は祁承燾が澹生堂書目に、類の目を分ちて彙刻の書を收むるを以て始とす、一部の叢刻を四部の次序をなし、哀集せるは此刻を以て始とせり、

○石經考一卷

一冊

清の萬斯同撰す、斯同字は充宗、別の字は僑夫、鄞縣の人なり、石經の沿革異同、唐宋以來の論するもの齟齬して一ならず、顧炎武はじめて諸家の説を集めて石經考を作る、實に之を始とす、斯同の是の編、ことごとく炎武の説を採り、又益すに諸家の論を以

てし、并に炎武の金石文字記に及べり、まゝ亦己が見
を附せり、杭世駿が石經考異の詳なる、顧氏の書に
なぞろふるに、かはるく備れりとす、且に炎武は漢
魏に詳にして唐宋に略せり、斯同は唐宋に於て特に
詳かなり、世駿が考異を作るとき、此の書の詳なる
に及ばず、之を要するに、三家の書を合せて考證備れ
り、偏く其一を廢すべからずと云、

○金石三例 雅雨堂校本翻刻

四冊

清の盧見曾編ず、金石例十卷、墓銘舉例四卷、金石
要例一卷、三種ともに編刻せるなり、其金石例は元
の潘昂霄が撰する所なり、昂霄字は景梁、蒼崖と號
す、官は翰林侍讀學士に至る、古昔の碑碣鐘鼎の文
をとり、綱を提げ要を舉げ、條を分ち類を聚めて十
卷となせり、墓銘舉例は明の王行撰ず、行字は止仲、
長州の人にして、吳中の十子の一なり、墓銘の書法
例の大意を舉げ、韓文の墓銘及び神道の碑文を舉げ、
李翱、柳宗元、歐陽修より朱子に至り、韓文の例を廣

め、陳師道より呂祖謙に至り、歐陽氏より以下六家の
文をとり、前の九家の例をおし廣めて、潘氏の例に
續げり、金石要例は清の黃宗義撰ず、宗義字は太沖、
黎洲と號す、餘姚の人なり、又潘氏の例を作る義と
例を壞るの始めとを著はさるるを以て、其闕を補へ
り、こゝに於て三書を合せて金石の例始て備はれり、
類に觸れてこれを長せば、金石の文に於て遺漏なか
るべし、清の盧見曾が校刊する所のものなり、

官版書籍解題略上終

官版書籍解題略下

子部

○賈子新書十卷 抱經堂叢書原本

三冊

漢の賈誼撰す、漢書藝文志に五十八篇、崇文總目にも
と七十二篇、劉向刪定して五十八篇となし、隋唐の
志みな九卷、別本或は十卷とあり、今隋唐の志を考
ふるに、みな十卷に作り、九卷の説なし、蓋し隋唐の
書を校刊するもの、崇文目を見ずして反て今本の追
改せるにより、明人の古書を傳刻せる往々如是と云
へり、然ども今本の僅に五十六篇にして、問孝一篇は
題録ありて書なし、實は五十五篇のみ、其書多く誼
が本傳に載する所の文を取り、其章段を割裂し、そ
の次序を顛倒して、加るに標題を以てし、殊に條理
なし、其中漢書に載せざるもの、往々說苑新序韓詩外
傳に類せり、然ども胎教の古禮、修政の語、上下の

篇、帝王の遺訓多く、保傳篇、容輕篇ならびに古典
を陳て、つぶさに源本あり、其詩を解し易を解せる、
また深く經義を得たり、殘闕にして次を失すと雖ど
も、これを棄つる事あたはずとあり、

○傳子一卷 武英殿聚珍版原本

一冊

晉の傅玄撰す、玄字は休奕、北地の人なり、官は司
隸校尉に至る、鶡觚子に封せらる、晉書本傳に稱す、
經國九流及び三史故事を論撰す、得失を評斷し各の
區別をなし、名づけて傳子となす、内外中篇を作り、
凡て四部六録あり、合せて百四十首、數十萬言、世
に行はるとあり、隋唐の志みな傳子一百二十篇と載
せたり、唐の世なほ完本となす、宋の崇文總目僅に
二十三篇を載す、故に宋史藝文志に僅に載て五卷あ
り、元明の藏書家つひに著録せず、蓋し佚するの久
しきを知るべし、永樂大典中に散見せる所の篇目を
採掇哀次して、文義を得て具にするもの十二篇、又
文義の全からざるもの十二篇、その宋志の五卷原た

だに考ふべからず、文によりて編綴して一卷となし、其永樂大典に載せずして他書に徴引するもの、また蒐輯して四十餘條を得たり、別に附録を作りて後に繋けたり、斷簡闕佚の餘、なほ其什の一を考へ見る事を得べし、是また寶貴となすべしと云へり、

○影宋本中説十卷

一冊

隋の王通撰す、宋の阮逸註と稱す、唐志に文中子中説五卷、文獻通考及び玉海に十卷に作る、今の本と同じ、凡て十萬言、此書上は孔子に比して偽書を作り、以て論語に擬し、すなはち孔子の後再び聖人あらば、まさに別に言行を出すべきに、未だその書を比擬するものを聞かず、甚しきは顔子に至り、また一人の門人蚤く死するものを取りて、これに擬せり、惡むべきの甚しきなり、偽書考にも詳に云へり、然ども大旨を要するに甚だ理に悖らず、且に聖人の言語を摹擬するは楊雄より始り、なほいまだ敢て其名をかさず、聖人の事蹟を摹擬するはすなはち通より

始る、すなはち其名を併せて之を僭するなり、また阮逸が偽造する所なりとも云へり、

○帝範四卷 武英殿聚珍版原本

一冊

唐の貞觀二十二年太宗御撰もつて太子に賜ふものなり、新舊唐書みな四卷と云へり、晁氏讀書志に僅に六篇を載せたり、陳氏書錄解題にまた題して一卷と云へり、此の本永樂大典中に載せ、凡そ十二篇、首尾完く具はれり、後に元の吳萊の跋ありて云、雲南の熨夷を征するとき、始て完書を見ると、其事を考るに泰定二年にあり、蓋し南宋のとき其半を佚せり、元に至りてすなはち亦舊本を得たり、故に明初うたれた全文あるなり、唐志に賈行の註を載せ、舊唐書敬宗の本紀に、寶曆二年祕書省著作郎韋肅この書に註して以て進む、特に錦綵百匹を賜ふと稱せり、これ唐時已に二註あり、今本の註に姓名なし、其體裁を見るに唐人の註經の式に似たり、其中楊萬里、呂祖謙の言を稱す、蓋し元人舊註によりてこれを補ふなり、

其詞冗贅を免がれざれども、援引すこぶる詳なり、一釐訂しおのく按語を下に附して、舊によりて四卷となせりと云、

○家範十卷

二冊

宋の司馬光撰す、此の書、周易家人卦辭及び大學、孝經、堯典、詩の思齊篇の語を節録して、以て全書の序を作り、首に載せたり、その後家を治むるより乳母に至り、凡て十九篇、みな史事の法則となすべきものを雜へとり、一々また光の論説する所あり、朱子小學の義例とや、異にして、意を用ゆる事は同じ、其節目つぶさに備はり、簡にして要あり、小學にたくらぶるに更に日用に切にして、嘗て大旨義理に歸せり、朱子かつて周禮師氏を論じて云、至徳を以て道の本となし、明道先生は敏徳を以て行の本となし、司馬公これを以て是編におけるを見るに、一代の偉人、己を修め家に型るの梗概を見るべきなり、

○迓書一卷

一冊

宋の司馬光撰、此の書己を修め物に及ぶの道、自問自答をなし、凡て四十餘條みな譬喩をもふけ、事理に切なる事を述たり、其言に云、時に獲る所ある、書して人に示す、人の論高きものは則云く、子の書庸にして奇なし、衆人の同じく知る所なり、論卑しきものは則云く、子の書迓にして世に用ゆるに益なし、我心を窮めて以て古の道を求め、かの及ぶ所のものすなはちこれを取れり、庸と迓とたゞ人の名づくる所なり、故に其書に命じて庸書と云、また迓書と云へり、嘉祐二年に作ると云へり、此の書温公文集の中にありて、標出せるなし、實に身心に切なるものにして、また家範に次ぐべきなり、

○儒言一卷

一冊

宋の晁説之撰す、説之字は以道、鉅野の人なり、少して司馬光の人となりを慕ひ、温公晩年に迓叟と號す、説之よつて自ら號して景迓と云へり、元豐五年の進士にて、蘇軾著述の科を以て薦めたり、元符中上書

を以て邪黨に入る、靖康の初め召て著作郎となり、中書舍人に試みられ、太子の詹事を兼ね、建炎の初め徽猷閣の侍制に擢でらる、高宗其作書の孟子を非るを惡み、致仕せしむ、是書すでに景迥生集に編入せり、晁氏讀書志に、是書王安石が學術の違僻を辨するがために作ると云、崇寧二年に安石を孔子に配享する後にあり、故にその中孔孟の一條名聖の一條、みな直に其事をしりぞく、實に紹述の徒を辨す、但に安石を辨するに非ず、一條の心迹を奪ふ一條の流品に及ぶ、以下の數條は、合せ兼て安石の心を居き、事を行ふを斥けたり、また但に學術の辨をなすに非ざるなり、紹述の説盛に行れて、侃々として撓まず、誠に儒者の言に愧ぢず、安石周禮を附會するにより周禮を詆り、孟子を尊崇するにより孟子を抑へ、すなはち之を激するの談あり、つとめて共に相反し、たゞに恩怨を以て是非をなす、殊に訓をなすにたらず、其大旨の正を取りて可なりとあり、

一冊

○童蒙訓一卷
宋の呂本中撰す、是の書は呂氏の家塾の訓課の本なり、其記す所の正論格言、多く大抵みな根本經訓にして、つとめて實用に切にして、身を立て政に従において深く裨けある所なり、朱子呂祖謙に答る書に云、舍人丈の著す所の童蒙訓、詩文を論する必ず黃蘇を以て法となすの語あり、此の本これなし、其他書に引く所の詩を論するの諸説、またみな書の内に見えず、故に何焯が跋に、其たゞに節録の要語にし原本にあらざと、意を以て推し求るに、洛蜀の黨すでにこの書を分け傳るもの、詞章を輕んじ、道學を重じて、眉山の緒論を以てする事を欲せず、遂に其論文を削除してこの本を爲るかと云へり、明人宋秉によりて雕行す、
○省心雜言一卷 武英殿聚珍版原本 一冊
宋李邦獻撰す、邦獻は懷州の人にして、官は直敷文閣の學士に至る、是の書宋時にありて臨安に刊するの本ありて、題して林逋が撰となし、或は又尹焯が

撰する所となし、宋濂其書に跋して王秘が編する所となし、陶宗儀說郛中に録入して林逋が撰となす、互に定論なきにいたる、永樂大典にこの書を載せたり、共に二百餘條、宋時の槧本によりて全帙録入し、前に宋人祁寬等が序あり、後に馬藻等の跋并邦獻の孫耆岡及び四世の孫景初の跋ありて、邦獻の作と云、耆岡かつて幼時手稿を見ると云、世に稱する所林逋が作に非るを辨せり、其書日用に切近にして、簡要質實にして、世範勵俗の道に於て發明する所頗る多し、聖賢の心法にして警戒の語なり、
○近思錄集解十四卷 四冊
宋の朱子、呂祖謙同撰、葉采集解、朱子年譜に、是書淳熙二年に成る、朱子年四十六、前に朱子の題詞ありて曰、淳熙乙酉の夏東萊の呂伯恭東陽より來り、余が寒泉精舍を過り、留止旬日、あひ共に周子程子張子の書を読み、其廣大にして宏博の津涯なきを嘆じて、かの初學のもの入る所を知らざる事を懼て、其大

體に與り、日用に切なるものを掇りとり、此編を作るとあり、書凡て六百六十二條にして、分つ事十四門、實に後來性理の諸書の祖なり、此集解は宋葉采濂園の諸儒の辨論の精純なるものを選び、字は訓をなし、旨は思ひを研して、積年の久しき此の書を爲せり、淳祐十二年書成て表上せり、
○崇正辨三卷 三冊
宋の胡寅撰す、是の書もつばら佛を闢かんが爲にして作れり、毎條先に釋氏の説を前に引きて、後に辨正せり、持論最も正し、其剖析また尤も明なり、然ども佛の患をなす心性微妙の詞に於て、聖賢の學を亂る、故に辨せずんばあるべからず、其經典荒誕の説に至りては、支離矛盾にして、妄謬灼然としてみ難するに足らざるものなり、必ず一々その有無をたくらぶ、是また勝を求むるに過ぎて、返てみづから褻るゝなりと云、
○讀書分年日程三卷 二冊

元の程端禮撰す、端禮字は敬叔、畏齋と號せり、鄆縣の人なり、薦めを以て建平の教諭となり、また台州路の教授となる、この書延平二年の自序に、輔漢卿があつむる所の朱子、讀書の法を修するに本づきて、讀書の法六條を作れり、一に居敬持志、二に循序漸進、三に熟讀精志、四に虚心涵泳、五に切己體察、六に著緊用力、端禮これを推し廣め、毎年月日讀書の程限の同じからずといへども、一に六條をもつて綱領となせりとあり、

○内訓一卷

一冊

明の仁孝后撰す、明史后妃傳を按ずるに、后洪武九年を以て冊して燕王の妃となる、成祖篡逆を以て國を取り、淫刑肆暴にして善の以て稱すべきなし、后ことに賢を以て是の書を著はせり、凡て二十篇、徳性といひ、修身といひ、慎言といひ、謹行といひ、勤勵といひ、警戒といひ、節儉といひ、積善といひ、遷善といひ、崇聖訓といひ、景賢範といひ、事父母と

いひ、事君といひ、事舅姑といひ、奉祭祀といひ、母儀といひ、睦親といひ、慈幼といひ、逮下といひ、待外戚と云、前に永樂三年正月望日の自序あり、后この書を作り、皇太子諸王に示すに過ぎず、永樂五年七月以後に至り、成祖后の内訓勸善書を、臣民に頒ち賜はれり、

○女訓一卷附孝慈皇后傳一卷

一冊

明蔣后撰す、嘉靖庚寅、正徳戊辰御製の序あり、此の書凡て十二篇、閨訓といひ、修徳といひ、受命といひ、夫婦といひ、孝舅姑といひ、敬夫といひ、愛妾といひ、慈幼といひ、妊子といひ、教子といひ、慎靜といひ、節儉と云、みな婦道に切なるものなり、明史蕪蔣后の傳を按ずるに、弘治九年製する所の女訓を天下に頒とあり、又この書の後序に、章聖慈仁皇太后、昔し藩邸に在し、嘗て女訓を作り、己に梓刻せらる、傳播の廣からざるを以て、近ごろ中宮に於て表出して、儒臣に命じて直解を作らしむと云へり、然

ばこの書、嘉靖九年再び馬后の傳を合せて刊布せるものなり、

○閑關錄十卷

四冊

明の程暉撰す、是編は朱子集中に異學を辨正するの語を録し、以て陸王の説を闢けり、凡て九卷、末一卷は宋史より以下諸家の朱陸を論するものの説を交へとり、其説たゞしからずと爲す、然ども門戸の見はなはだ深くして、詞氣のあひだ激烈すでに甚し、ことに儒者の氣象に非ず、陳建が學蔣通辨とひとしく、善く罵るものと云て可なりとあり、

○從政名言二卷

一冊

明の薛瑄撰す、瑄字は徳温、河津の人なり、永樂辛丑の進士にして、禮部右侍郎に至る、其書みな躬に行ひ、心に得るの言、兩つながら之を録せり、宣徳元年四月御史に擢でられ、尋で沅州の銀場を差監せる時の作なり、其言みな切實にして通達なれども、精要は讀書録中に見えたり、これ其緒餘なり、

○造化經綸圖一卷

一冊

明の趙謙撰す、謙は餘姚の人なり、是書洪武甲戌の年に作れり、周子の無極にして、太極邵子の心は太極たりと云より説き起し、性情造化もと一體、感に従ひて遂に造化とその用を同うし、三極の道たつ事を述べ、仁義禮智信の圈を設けて、條目を以てせり、其仁中に次第あり、また不仁中も次第ありて、みな一々圈を以て圖し、條記し分てり、其餘は類して知るべきなり、また易の四卦を以て仁義禮智に配せり、學者この心を以て時々省察する時は、その道心を失はず、念々忘れざる事を示せり、單卷小冊と雖ども、學者に切なるの書なり、

○塾講規約一卷

一冊

清の施璜撰す、璜紫陽還古の諸書院に侍講する事已に二十年、凡て朱子の人に教へたる所の學をなすの方、徳に進むの序を以て、師友に聞く事を得るもの、ほど二三を記し、今家塾に居て徒に授け、又郷鄰の

諸君子に聖賢の學を研究し、其平日聞く事を得る所のものを述べて、講約九條を爲る、一に尙道德といひ、二に定宗派といひ、三に持敬といひ、四に釋註といひ、五に力行といひ、六に習六藝といひ、七に育英才といひ、八に務謙虛といひ、九に防間斷と云、又附するに塾講事宜を以て其則を定めたり、其略に云、友を求め友を會するに本あり、益あり、齒德師表この例あるに非ず、之を總るに講會の盛品及び眞の學正ありて、力を勉め實に倣の工夫、すなはち塾講の一舉に負かずして、紫陽の大會またよりに光りありと云、この書康熙癸丑の年著はせり、

○讀朱隨筆四卷 清版翻刻

四冊

清の陸隴其撰す、隴其字は稼書、浙江の平湖の人なり、是の編は、朱子大全集を讀み、心に得る所を隨筆標記せるなり、正集二十九卷以前は凡て詩賦荀子にして、人の共に知る所なれば、置て論せず、三十卷より起り別集五卷に至つて止る、其精蘊を分條し

て纂録し、おの／＼按語を加へてこれを申べたり、隴其、一に朱子を以て宗とせり、近儒中もつとも醇正と稱せり、この編の大意は異説を闢にありて、紫陽を羽翼するを以ての故に、儒釋出入の辨、金溪姚江の蒙混の弊に於て、凡そ朱子の書中この義に互るものを節して取らざる事なし、疑似を剖析し、異同を分別す、頗る親切なりとすとあり、

○畜德錄二十卷

十冊

清の席啓圖撰す、啓圖字は文輿、震澤の人なり、此書周秦より以來元明に迄るまで、嘉言懿行をあつむ、凡て二十一、これを類次せり、立志、爲學、讀書、省克、家訓、孝友、勤儉、泄官、康濟、忠誠、處世、厚德、度量、名節、智識、義命、勸戒、養生、間適、女範、雜識、凡て卷をなす二十、康熙二十三年堯峯の汪琬之に序し、其子永劫校刻して世に傳へたり、宋儒の厚德錄、仕學規範及び名臣言行錄の類にして、身心世道に切なるものなり、其畜德と云ものは、易の大畜の象の辭によ

りて名づくるなり、明の陳沂が畜德錄の類にして、ややこれをおし廣むるものなり、

○孔子集語十七卷 平津館叢書原本

六冊

清の孫星衍撰す、星衍字は伯淵、陽湖の人なり、子史に載する所の宣聖の遺言を探り、宋の薛據が集語に比し、劉向が說苑新序の例を取りて、各篇目をなし、類をあひ從ふ、又莊列小説依託の詞に近きは、別に雜事を爲り、遺識寓言の如きは卷末に附せり、又其纂輯の例は、易の十翼、禮の小戴記、春秋左氏傳、孝經、論語、孟子の書は、世こそつて誦習すれば皆載せず、家語、孔叢子は成書あれば載せず、史記、孔子世家、弟子傳の如きは檢し易きを以てまた載せず、其餘の羣經、傳註、祕緯、諸史子及び唐宋人の類書、鉅篇隻句ことごとく載せて去取する所なしと云へり、

○六韜六卷附逸文一卷 平津館叢書本

二冊

周の呂望撰す、漢書藝文志に、儒家に周史六韜六篇あり、顔師古が云く、すなはち今の六韜なり、六韜は

文、武、虎、豹、龍、犬なり、今本文武龍虎豹犬を、戰國の初め、もとこの名ありて、太公の六韜となす、然ども其よる所を知らず、隋志に始て太公の六韜五卷を載す、唐宋の諸志みなこれによる、今その文の大抵詞意を考るに、詞意淺近にして古書に類せず、その依託のあと灼然として驗すべきなり、周氏の涉筆に云、その書竝に吳起其詞を漁獵して集め、つゝるに近代の軍政の浮談を以てし、淺駁にして施し用ゆべきなし、晁公武讀書志に、元豐中六韜、孫子、吳子、司馬法、三略、尉繚子、李衛公問對を以て武學に頒てり、號して七書と云、則その來る事已に久し、談兵家つねに稱述せり、

○孫子三卷 平津館叢書本

一冊

周の孫武撰、魏武帝註、史記に孫子列傳に武の書十三篇を載す、漢書藝文志に孫子兵法八十二篇、圖九卷を載せたり、のち前より少かるべきに、何を以て反て前より多きや、杜牧の註に傳る所のもの十三篇にし

て、のち前より少なし、杜牧云、武の書數十萬言、魏武その繁剩をけづり、その精粹を筆して此書をなすと、然らば則これに依れば、漢志の八十二篇は遷が傳の十三篇に非ず、梅聖俞また且て此書に註して、これ戰國あひ傾くるの説なりと云へり、葉正は則これを祖述して、春秋の末、戰國の初め、山林處士の爲る所、その言に吳に用ひらるゝと云ふものは、其徒の誇大の説なりと云へり、其説に、闔廬試に婦人を以てすと云は、最も奇險の信するに足らざるなり、

○十家註孫子

四冊

是の書十家と云ものは、曹操、王陵、張子尙、賈詡、李筌、杜牧、陳皞、孫鑄、梅堯臣、王哲の註なり、然ども何人の編することを知らざるなり、

○吳子二卷 平津館叢書本

一冊

周の吳起撰す、起が事蹟は史記の列傳に見えたり、漢書藝文志に吳起兵法四十八篇を載す、然れども隋志に一卷に作る、通志に孫鑄註一卷ありて、四十八篇

のものなし、蓋し亦孫の八十二篇の如し、僞書考に今六篇にして、その論膚淺にして自らこれ僞託の書なりと、中に屠城の語あり、尤も惡むべきしと云へり、

○司馬法三卷 平津館叢書本

一冊

齊の司馬穰苴撰すと云、史記穰苴が傳に、齊の威王大ををして古の司馬の兵法を追論せしむ、穰苴をその中に附せり、よつて司馬穰苴の兵法と號すと云へり、是の書すなはち齊國諸臣の追輯する所にして、隋唐の諸志みな穰苴の自撰する所と云ものは非なり、漢志誤て此の書を以て經の禮類に列して、軍禮司馬法百五十篇と稱す、陳師道が云、傳記に載する所の司馬法の文、今の書みなこれなし、疑ふらくは全書に非ず、又當時百五十篇にして、隋志三卷を載せて、篇を分たす、已に亡びたり、此の書僅に五篇にして、後人の僞造するに疑ひなしと、古今僞書考にも云へり、

○農書三卷 附蠶書一卷

二冊

るに至り、織は蠶を浴してより翦帛に至り、おのおの二十三事、凡て舂織の作苦歷々として見るべきなり、

○唐伯虎畫譜三卷

一冊

明の唐寅撰す、寅字は伯虎、六如と號す、吳郡の人なり、詩及び丹青を以て名あり、此の書は齊の謝赫、唐の張彥遠、王維、荆浩、宋の劉道醇、黃休復、郭若虛、郭熙、董羽、元の饒自然、明の王思善の十一家の説、三品、六法、六要、六長、三病、十二忌の畫訣より、采繪、用筆、用墨、賞鑒、裝幀の定式に至り、みな繪事に益あるものを集めたり、

○學畫淺說一卷 檀几叢書原本

一冊

明の王槩撰す、槩字は安節、繡水の人なり、此の書は唐寅が畫譜と同じく、古人の畫訣を輯め、まゝ己が説を各條下に附し、末に著色の法、四時膠礬の分兩及び金箋、金扇の上に畫くの法等の細事に至り、ことごとくこれを擧げたり、これまた畫家に於て大

宋の陳勇撰す、自跋に、此の書紹興十九年眞州に刊行すと云へり、其上卷は弘く農事を言ひ、中卷は養牛を論じ、下卷は養蠶を論じ、大抵ひろく大要を述べたり、經史を引き以てこれを詳明して、虛論多く實事少し、ことに齊民要術の典核詳明なるに及ばず、然ども言所亦頗る理に入るものあり、末に蠶書一卷あり、宋の秦湛撰す、湛字は處度、高郵の人にして、秦觀の子なり、云所の蠶事すこぶる詳なり、宋志に勇が書とおのゝ著録せり、何人が合せて一編となすことを知らず、其説勇が書の下篇と、以て互に相ひ補ふべし、

○佩文齋耕織圖 無卷數

二冊

康熙三十五年二月製序あり、農夫蠶婦の作苦の始末を究訪し、宋の樓璣の舂織の詩により、焦秉貞に命じて圖繪を作らしめられ、聖祖璣が詩に擬する五言律の詩、世宗の聖祖の原韵を和する詩、及び欄上に聖祖の題詩あり、耕は種を浸してより以て倉に入る

いに裨益あり、

○硯箋四卷棟亭楊州十二種原本

宋の高似孫撰す、是の書は嘉定癸未に成る、前に自序あり、第一卷を端硯となし、子目を分つこと十九、卷の中硯圖の類、四十二式を列す、註して歙石と云、第二卷を歙硯となし、子目を分つこと二十、第三卷を諸品硯となし、凡そ六十五種、第四卷は前人の諸文を輯めたり、其詩文はあきらかに題して端硯、歙硯と云ものは、既に前の二卷の内に附入せり、是の卷に載する所は、みな名品を標せず、故に別にこれを諸品の後に附せり、宋志録する所の硯譜の今に存するもの、なほ四五家にして、大抵材産、質性を詳にして、罕にその典故に及べり、似孫がこの書ひとり晩く出で、備さに諸家の説を探ることを得たり、又その學もと奄博にして、よく旁ら羣籍を徴して、以て之が佐證をなせり、故に敘述頗る見るべし、

○墨經一卷同上合刻

此の書もと毛晉が津逮秘書の中に載せて、原本題して晁氏撰すと云へり、時代字名を著はさず、何遜が春渚紀聞に云、晁季一生平他の嗜みなし、獨り墨を見て喜びて眉宇を動す、製する所の銘を晁季一寄寂軒造と云もの、潘陳に減せずといへり、この書の中膠を論じて云、上等の煤ありて、膠法の如くならざれば、墨また佳ならず、膠を得るの法の如き、煤に次で善墨をなすと、共に言ふ所のもの春渚紀聞に合へり、疑ふらくは季一が作となせり、季一名は貫之、晁説之の兄弟の行なり、其事蹟を考る所なし、説之と云ものは誤りなり、

○顏氏家訓七卷抱經堂叢書原本

四冊

是の書題して北齊の黃門侍郎顏之推撰すと、陸法言が切韻の序に、隋の仁壽中に列する所の同定八人、之推これに與るに作る、すなはち實に隋に終る、題する所は作書の時によるなり、陳氏書錄に云、古今の家訓この書を以て祖となすと、晁氏諸書志に云、之推

もと梁人、著はす所の書凡そ二十篇、立身治家の法を述て、時俗の謬りを正し、以て世人を訓せり、今その書を見るに、大抵世故人情において深く利害を明にして、よくこれをあやなすに經訓を以てせり、故に唐志宋志ともに儒家に列せり、然ども其中歸心等の篇、あまねく因果を明にして、當時好佛の習に出でたり、よつて雜家類に入る、又兼て字畫音訓、ならびに典故、品第を考へ正し、文藝に曼衍し、専ら一家の言にあらざるなり、此書は清の趙曦、明宋刻の本を取りて註解を加へ、書成るに及で曦明歿しぬ、因つて盧文昭再び此書を開し、補註する所なり、宋本沈揆が考證一卷ありて、此書の末に繋けたるを、散じて各文句の下に置けり、又通行の本文義の長せるを取り、異同を訂し、其下に註せり、卷末に北齊書之推が傳に註釋をなし、沈揆が跋語并に重校補註、錢大昕が補註等を附せり、

○蘇氏演義二卷武英殿聚珍版本

一冊

唐の蘇鶚撰す、鶚字は德祥、武功の人にして、宰相顔の族なり、光啓中に進士第に登り、仕履考る事なし、嘗て杜陽雜編を撰せり、此書久しく佚せり、永樂大典に引く所により、哀輯編を成せり、雜編はことに小説家の言にして、この書はすなはち典制、名物に於て具さに考證あり、書中云ふ所の古今註、中華古今註に多くあひ出入せり、然るに永樂大典の幸に存せるに非ずんば、崔豹が書の偽をなほ考へ見るべきなし、馬縞が書の勦襲の竟に由る事なきを證する事なし、陳氏書錄に其考究を稱せり、書傳の名物を訂正し、譌繆を辨證するは、李氏刊誤、資暇集、兼明書と並び馳すべきものなり、原書十卷あり、今うる所の僅に此の書のみにして、また珍とすべきものなり、

○兼明書五卷眞意堂叢書原本

二冊

五代の邱光庭撰す、光庭は烏程の人なり、大學博士に官せり、陳氏書錄に唐人と爲せり、然ども羅隱集

に光庭に贈る詩あり、則まさに已に五代に入るべし、是の書みな考證の書なり、宋史に十二卷に作る、書録に二卷に作る、此本五卷なれば、疑らくは後人の更め定むる所なり、首に諸書十二條となし、次に周易五條、尙書四條、毛詩十三條となし、次に春秋十條、禮記五條、論語十三條、孝經二條、爾雅三條となし、次に文選二十二條となし、次に雜說十八條、字書十二條となせり、其字書十二條中に、傳寫脫佚にかゝるあり、傳寫の誤り合せて一となすあり、唐人の考證の書中、顔師古と謬を正し俗を正すにありて、蘇氏の演義、李氏の刊誤、李氏資暇集と以てひとしく驅すべきなりと云、清の瓊川の吳氏、宋槧の本を以て嘉慶中校刊する所のものなり、

○考古質疑六卷 武英殿聚珍版原本

二冊

宋の葉大慶撰す、大慶は宋史傳なし、是の書藝文志に見えず、永樂大典中におのゝ韻中に散見し、別に寶慶丙戌葉武子、淳祐甲辰その子釋之の序、おの

おの一篇を載せたり、其文によりて考れば、大慶字は榮甫、當時詞賦をもつて名を知らる、かつて建州の學の教授に官せり、その里貫は、序中に具さならざれば、能く詳にする事なし、この書、上は六經諸史より下は宋世の著述、諸名家の疑義を抉摘して、考證の類、前人の發せざる所多し、其古書を徵引し、及び疏通互に證するのところに、各本文の下に於て夾註を用ひて以て之を明せり、體例もつとも詳に盡せり、南宋の説郛中の目に愧ぢざるなりと云、

○晁氏客語一卷

一冊

宋の晁説之撰す、是の書は、其筭記雜論、かねて朝野の見聞に及べり、蓋しまた語録の流にして、條下にまゝ夾註ありて、右五段張某と云ひ、又第四段に劉快治と云の如き、李及び壽明との諸名氏を述べしるすあり、蘇鶚が杜陽雜編の例を用ゆるなり、毎條に必ずその語る所の人を記す、いはゆる客語なり、其中の議論、多く身を立て己を行ふの大端にあづかる

もの多し、載する所、熙豐の間の名流の遺事、大都目撃より得たるものなり、史傳とまた互に相ひ參證すべきなり、

○洞天清錄集一卷

一冊

宋の趙希鵠撰す、希鵠はもと宗室の子にして、宋史世系表にその名を列せり、蓋し太祖の後、始末は考へ據るべからず、是の書論する所みな古器を鑒別するの事、凡て古琴辨三十條、古硯辨十二條、古鐘鼎彝器辨二十條、怪石辨十一條、硯屏辨五條、筆格辨三條、水滴辨二條、古翰墨真蹟辨四條、古今石刻辨五條、古今紙花印色辨十五條、古畫辨二十九條にして、大抵源流を洞悉し、辨析精審なり、刁斗は則行軍の炊具、今世に見る所の刁斗は、王莽の威斗の類と云が如き、厭勝家の爲に用ひらる、又今の銅犀牛、天祿、蟾蜍の屬は、みな古人油を貯へ燈を點するを以てす、今人誤りて水滴となす、その援引考證の類、みな確乎として賞鑒家の指南なり、

○仕學規範四十卷

四冊

宋の張鑑撰す、鑑字は功甫、奉議郎直祕閣に官す、是の書分て爲學となし、行己となし、澄官となし、陰徳となし、作文となし、作詩となす、凡て六類、宋の名臣の事狀を載せ、原文を徵引し、各著出せり、其採る所は九朝の名臣傳の諸書つぶさにす、修史のものゝ據りよる所となせり、故に多く史と合へり、且つ其遺闕を補ふべし、范仲淹の青社を鎮め、青民爲に祠を立つるの事、又趙抃の越州を治る時に、歲荒て米を貯ふるものに令して、反て價を増すの事、又張方平崑山縣に知たりしとき、餘賦を收め以て貧民に給するの事、哲宗の名臣傳に出で、今その書みな載せずして、三人の本傳に亦のせず、この類すこぶる多し、以て考證を資くべきなり、蓋し朱子の名臣言行録と體例の殊なりと雖ども、其一代の文獻徴すべきなり、

○自警編九卷

六冊

宋の趙善瑋撰す、善瑋は太宗七世の孫にして、南海に家し、端平中かつて江州に知たり、其書は、宋代の名臣大儒の嘉言懿行の法則と爲すべきものを編次せり、凡て學問の類子目三、操修の類子目十二、齊家の類子目四、接物の類子目七、出處の類子目五、事君の類子目十一、政事の類子目十七、拾遺の類子目二、ともに五十五目、蓋し言行録の體に仿うて、少しく其義例を變ずるものなり、善瑋は南宋の季に生れて、載する所のもの靖康に至りて止る、その後ひとり朱子の議論まゝ採入をなし、其餘は多く甄録せざるなり、もとより時代の相接するによればなり、

十冊

○君鑒五十卷
明の景泰帝撰す、景泰四年に書成る、御製の序あり、善の法と爲すべく惡の戒となすべきもの、二類に分てり、宣宗の君鑒とあひ同うして、二十九卷より三十五卷に及び、みな明の祖宗の事を紀せり、すなはち范祖禹の帝學の例なり、

一冊

○肯綮錄一卷
宋の趙叔向撰す、叔向みづから西隱老人と號せり、宗室にして、仕履を詳にせず、是の書、始めに俚俗の字義を辨じ、陸法言が唐韻の註中において摘録して以て考證に備へたり、然ども唐韻は孫愔が作にして、法言は隋時の人の著はす所なり、切韻は唐韻にあらす、開卷さきに誤る、然ども又孟子の名は口筒切と讀むべしと云ふ、其他の辨證又多し、

六冊

○編珠二卷、補遺二卷、續二卷
隋の杜公瞻撰すと云へり、補遺、續編は清の錢塘の高士奇が輯する所なり、是の書隋志に載せず、宋志に始て録し出せり、然ども世に傳本なし、士奇が序に、内庫廢紙中において之を得たり、原目凡て四卷にして其半を佚せり、遍くもとむるに得べからず、すなはち原目によりて補ひて四卷となせり、又類の具らざるものをひろめて二卷を作れり、首めに大業七年公瞻の自序に勅を奉じて撰進すと稱するを載たり、

その結銜に著作佐郎兼散騎侍郎と題せり、今その書を見るに、事を隸して對をなし、ほど徐堅が初學記の體の如し、たゞに前に序事なく、後に詩文なきのみ、永樂大典に、前代の類書に於て具さに採らざるなし、亦一字も登さず、其明の中葉以後に出る書にして、必しも六朝の舊籍にあらざるなり、士奇が續も唐以前の事をととりて、他の類書に較するに、近古なりとせずと云へり、

四冊

○小四書五卷
是の書四種は、清の朱升が編刻する所にして、首に宋の方逢辰が撰する名物蒙求一卷は、急就章の類にして、名物は小學の先んずる所なり、次に程若庸が撰する字訓蒙求一卷は、性理の學問にして、天人の道治教の原なり、次に元の陳櫟が撰する歷代蒙求一卷は、古今朝代の事を知らしむ、次に黃繼善が撰する史學提要二卷は、傳統の事迹の詳なる事を知らしめたり、この四書は四字にして言をなし、童幼に便なる

所にして、次第に精熟融會せしむるにあり、因りて朱升これが爲に傍註を作り、本文を讀むもの、その旁註を見れば繁複の勞なきなり、今事意多く旁註の足らざるによりて、又欄上に註を表して、學者をしてよる所を知らしむ、小四書と題するものは、朱子の四書に別てりといへり、

三冊

○純正蒙求三卷
元の胡炳文撰す、蒙求の書は李瀚より以下、その體に仿ふもの數家にして、大抵經傳の事實を雜採し、隸するに韻語を以てし、童子の記誦に便りす、然ども多く對偶のもつて工みなるを求めて、悉く法戒にあづからず、炳文が是の書、すなはち古の嘉言善行を集め、おのゝ四字を以て對を屬して文を成せり、自ら其出處を下に註せり、載する所みな幼學に便なるの事なり、啓導においてかはるゝ切近なりとす、上卷は立教明倫の事を敘し、中卷は立身行己の事を敘し、下卷は人に侍し物に接する事を敘せり、ほど

白鹿洞の規に準せり、毎卷一百二十句、總て三百六十句、卷中おのゝ子目あり、毎に一目多きもの二十句、少きもの四句に過ぎず、中間駢儷の格に拘り、聲韻に格せり、故に漏落の甚だ多しと云、

○文選錦字二十卷

十冊

明の凌迪知撰、是の書は文選の字句を集めて二十七門と爲せり、

○楚騷綺語六卷

三冊

明の張之象撰す、この書は楚詞の字句を摘て、以て擗擗に供せり、已に剽剽の學をなし、又參差ざつ録二十五、賦においてまた何の篇より出ると云事を著はさず、黃省曾の騷苑と同一なり、

○方言藻二卷函海原本

一冊

清の李調元撰す、此の書は古俗の方言百餘條を輯録し、經或は史子、或は詩賦の詠詠に見えたる所ものを證引し、各條下に註せり、凡て古方言俚語において頗る考據をなすべきなり、此書自編の函海中に

刻入せり、

○世說新語三卷

六冊

宋の臨川王劉義慶撰す、梁の劉孝標註、義慶の事蹟は宋書に具さなり、孝標名は峻、字を以て行はる、事蹟梁書に具なり、黃伯思が東觀餘論に云、世說の名は劉向に始り、其書すでに亡びたり、故に義慶の集むる所、世說新書と名づけたり、段成式が酉陽雜俎に、王敦澡が豆事を引て、尙ほ世說新書に作るを證すべし、何人の改る事を知らず、記す所三十八門に分かてり、上は後漢に起り、下は東晉に至るまで、軼事瑣語の談助をなすにたれり、明より以來世俗の行ふ所凡て二本あり、一は王世貞の刊するところとなし、註文多く刪節ありて、殊にその舊にそむく、一は袁聚の刊する所の本にして、蓋し陸本に従つて翻雕するものにして、なほ完書に屬せり、この本宋葉により校刻する所なり、

○唐世說三卷

三冊

唐劉肅撰す、この書記す所のもの、武徳の初に起り大歴の末に至る、凡て三十門に分ち、みな軼文舊事の勸戒にたすけ有るものを取り、前に自序あり、後に總論あり、昔し荀爽漢事の鑒戒となすべきものを記し以て漢語を爲る、今の記す所前修につぐことを庶ふと云へり、もと唐志これを雜史類中に列せり、然どもその中諧謔の一門は、繁蕪猥瑣にして、其書を穢す事を免かれず、史家の體例にそむく事あり、今退けて小説家類に置くに提要に云へり、是の書もと大唐新語と名づけたり、明の馮夢禎、兪安期等、李壘が續世說僞本と合刻し、遂に改め題して唐世説と云、殊に臆撰をなせりとあり、

○續世說十卷

五冊

唐の隴西の李壘撰すと云、前に兪安期の序ありて、其書は梁谿の安茂卿より出ると稱せり、宋本を以て翻雕すと、印行に及ばずして歿せり、後三年にして安期また焦竑の藏本を得て更に校正をなし、完書とな

すと云、文獻通考に列する所の、宋より五代に至るまでの事を載するものは、孔平仲の撰する所にして、實にこの書に非すと、何良俊が語林の序に文徵明これを言へり、王世貞又語格を刪り、世説を補へども、皆かつて此の書を見る事を言はず、其贋作なる事を疑へり、今その書を考ふるに、たゞに李延壽が南北史に載する所の碎事を取り、世説の門目によりてこれを編じて、増に十一門を以てせり、別に異聞なれども、また資考をなすべきなり、

○陰符經考異一卷

一冊

宋の朱子撰す、陰符經は唐の李筌に出づ、晁公武が讀書志に黃庭堅が跋を引て、筌が僞託する所と定めたり、朱子語錄に以て然とせり、然どもその時精語あるを以て、道に深きものに非ざれば作る事あたはずと、故にその文を考定せり、其定人以愚虞聖而下も一百十四字、みな經の文とす、けだし褚氏張氏の二註を用ゆるなり、黃瑞節が附録あり、徵引また頗

る賅備なりと云、

○老子道德經攷異二卷 經訓堂叢書原本 二冊

清の畢沅撰す、老子の註家百餘本に下らず、然ども佳本なるもの數十本にして、たゞに唐の傅奕が校定本、古字古音多く、且世希に傳本あり、故に沅その本について參校を加へ、まゝ古に合はざるものは、則衆説を折いて是とする所を定て、以て攷異を爲ると云へり、

○周易參同契考異一卷

一冊

宋の朱子撰す、陳氏書錄に、朱子參同契の詞韻みな古奧雅にして通讀し難し、讀もの淺聞にして、妄りに更改せり、他の書に比すれば舛誤多し、因て諸本を合せて更にあひ讎正せり、朱子の自跋に、また凡て諸同異ことごとくこれを存し、以て考證に備へたり、故に考異を以て名とせりと云、然ども書中朱子の自ら校するもの、惟に六七處にして、其餘は每節の下も文に隨ひて註釋せり、實はみな箋註の體にし

て、その餘はことごとく文字を訂正せずして考異を以て名をなせり、その旨を論さざるなりと云、跋末に自ら空同道士鄒訢と署せり、けだし鄒もと邾國にして、其後に邑を去て朱となせり、故に以て姓を寓せり、禮記の鄭註に云ふ、訢は熹に作るべしと、又集韻に熹は虛其切なり、訢また虛其の切と、故に以て名をこゝに寓せるなり、殆ど心を丹訣に究はむるは、儒者の本務に非ざるを以ての故に、之を瘦詞に託せるなるべし、朱子語錄に、參同契を論するの數條詳に盡せりとせり、

集部

○杜詩偶評四卷

三冊

清の沈德潛、字は碭士、歸愚と號せり、長州の人なり、甫が全集一千四百餘首、この録三百餘首にして、精華を會聚して、風雅に續くべきものを選べり、選中五言古體は夔州以前の作を以てし、七言古體は夔州以後もつとも工みなり、五言長律は少陵に至り、滔

滔たる百韻、然れども重複重韻あり、少陵の大才を以てすれども全璧を成す事あたはず、此の集二十韻以下のものを收めたり、絶句は龍標供奉を以て絶調となせり、少陵は古體を以て之を行へり、もと束縛を受るにあらざればなり、よつて遠神遠韻の數章のみ取れり、圈點評釋は、詩のこれを正に得る所の骨節を疏通し、眉目を洗刷して、これより悟入すべきが如きをなすがためにせりと云、同邑の潘承松、字は森千、此の書の爲に凡を記し例を起す事詳かなり、

○次山集十二卷

四冊

唐の元結撰す、事蹟は唐書本傳に具さなり、結が著す所の元子十卷あり、李商隱ために序を作れり、文編十卷は李紆序を作れり、又猗玗子一卷ならびに唐志に見えたり、今みな傳はらず、傳る所のものは只此の本にして、書名と卷數とみな合す、蓋し後人の散佚を撫拾してこれを編せるなり、その舊本に非ざるなり、二十國事容齊隨筆に見えたるもの、此本み

なこれなし、則その佚篇の多きなり、結の性俗にかなはず、また往々あと詭激にわたれり、初め商餘山に居り、自ら季及逃難猗玗洞と稱し、猗玗子と稱し、又或は浪士と稱し、或は瞽叟、漫叟、漫郎と稱す、頗る古の狂に近し、然ども制行高潔にして、深く時をあはれみ國を憂るの心を抱き、文章戛々として自ら異なり、唐文の韓愈より以前、毅然として自から成すものは、結より始めり、又耿々たる拔俗の姿ありと云つべし、

○韋蘇州集十卷

四冊

唐の韋應物撰す、應物は京兆の人なり、新舊唐書ともに傳なし、宋の姚寬が西溪叢話に載す、吳興の沈作詰ために補傳を作りて稱す、應物少うして太學に遊び、開元天寶の間に宿衛扈從遊幸に充てり、頗る任俠にして氣を負へり、亂後に流落して職を失せり、更めて京兆の功曹より累官、蘇州の刺史、太僕少卿兼御史中丞に至り、諸道鹽鐵轉運、江淮の留守となる、のち年九十餘、その終る所を知らず、是よりさ

き嘉祐中に、王欽臣その集を校定して序一首あり、應物が事迹を述べたり、補傳とみな合へり、其詩七言は五言にしかず、近體は古體に如かず、此本首に賦、次に雜擬、次に燕集、次に寄贈、次に酬答、次に逢遇、次に懷思、次に行旅、次に感歎、次に登眺、次に遊覽、次に雜興、次に歌行、凡て類をなす十四、五百七十一首、拾遺の數首は毛晉の補入する所なり、

○毘陵集二十卷

唐の獨孤及撰す、及字は至之、洛陽の人なり、官は司封郎中常州の刺史に至る、卒して謚し憲と云、事蹟は唐書本傳に具さなり、唐の貞觀より以後、文士みな六朝の體に沿ひ、開元天寶を経て詩格大いに變じ、文格も尙ほ舊規を襲へり、元結と及と始て奮起し、前代を漸除せり、その後韓愈、柳宗元ついで起り、唐の古文遂に蔚然として極盛にして、斷雕を以て樸とするは、數子實に其首に居れり、唐實錄に稱す、韓愈獨孤及の文を學ぶと云へり、その集は門人安定の

梁肅が編する所とせり、李舟これが爲に序せり、凡て詩三卷、文十七卷、舊本久しく湮せしを、明の吳寬内閣より鈔出して始めて世に傳れり、その傑作は唐文粹、文苑英華に略已に載せたり、

○白氏文集七十一卷

三十冊

唐の白居易撰す、居易字は樂天、華州の人なり、官は刑部尙書に至る、事蹟は唐書本傳に具さなり、錢曾が讀書敏求記に見る所の宋刻の居易が集兩本ありて、みな題して白氏文集と云ひ、長慶集と名づけず、汪立名が校刻する香山集、また寶曆以後の詩と稱す、今考るに、居易嘗て自ら其集を寫し、僧寺に分ち置けり、其記す所に據れば、大和九年東林寺に置もの二千九百六十四首、勅して六十卷とせり、開成元年に聖善寺に置もの三千二百五十五首、勅して六十五卷と成せり、開成四年に蘇州の南禪院に置もの凡て四百八十七首、勅して六十七卷と爲せり、みな題して白氏文集と云、開成五年に香山寺に置もの凡て八

百首、合せて十卷と爲せり、すなはち別に題して洛中集と云、且長慶四年に元稹曰氏長慶集の序を作り、盡く其文を徵して、手づから排纂して二千一百九十一首五十卷と成せり、然ども唐志に七十五卷、宋志に七十一卷と爲せり、此本居易の跋に、詩筆大小凡て三千八百四十首、七十五卷と、會昌五年に自記せり、又別本なり、

○昌黎詩集註十一卷

六冊

清の顧嗣立撰す、嗣立字は俠君、秀野と號せり、長州の人なり、是の書の箋註家は、宋の洪興祖が年譜辨證、樊汝霖が譜註、及び孫汝聽、韓醇、劉崧が全解、祝克が音義、蔡元定が補註あり、宋の慶元の間、魏忠舉これを哀集して名づけて五百家註と云、實慶三年に王伯大音釋の一書を更め定め、諸家の善本を集め、參ふるに方崧卿が舉正増攷の年譜、及び朱子の考異を以て劔南に刊せり、こゝに於て魏註遂に廢せり、後また朱子の離騷集註の例に仿ひ、悉く諸家の姓氏を

刪り、羣説を彙輯し、一書を作り、増益する所頗る多し、今の傳る所の東雅堂の刻本なり、嗣立がこの書、諸家の箋註を採擇し、亦參ふるに己が見を以てし、之を新舊唐書に考へ、集註を作ると云へり、康熙三十八年自序あり、此書の始末は凡例に詳かなり、

○韓文四十卷、外集十卷、附錄二卷 六冊

唐の韓愈撰す、李漢編せり、清の朱彝尊が云く、此の書尙ほ宋刻の本あり、長州の文氏の藏本、のち李日華の家に歸す、正集の外なほ外集十卷、別集一卷、附論語筆解十卷あり、止に四十卷にして、外集別集はあづからず、蓋し流傳の久しき、又闕逸する所と云へり、此の書筆解のみを缺けり、明の嘉靖中游居敬箋釋を省き、正文のみを校刻し、編次は李氏の舊に従ふと云へり、

○柳文四十三卷、別集二卷、外集二卷、附錄一卷 右合刻

唐の柳宗元撰す、劉禹錫編せり、其後卷の目増損せ

六冊

り、宋時にありて已に四本あり、一はすなはち三十卷、元符の間に京師に開行の本となせり、一は曾丞相家の本にして晏元獻が家の本、一はこの四十卷の本にして、穆修が家より出ると云、即禹錫の原本なり、陳氏書錄に云、劉禹錫序を作り編次と稱せり、其文三十二卷となし、退之が誌祭文の如き、第一卷の末に附せり、今世行ふ所の本はみな四十五卷にして、誌文を附せず、當時の本に非ざるなり、今本載する所を考るに、禹錫が序實に四十五卷となす、三十二卷に作らず、振孫の説く所と符せず、或は後人禹錫序を追改して、卷数を合するも亦知るべからず、之を要するに、韓柳の集を刻するものは穆修より始り、禹錫の舊に非ざるなり、此の集また卷數異なり、別本なるか、韓集と同じく居敬が刻する所なり、編次は禹錫の舊に従へりと云、

○李長吉歌詩四卷

三冊

唐の李賀撰す、賀が事蹟は新唐書文學傳に具さなり、

賀系は鄭王に出づ、故に郡望を以て隴西を稱せり、實は昌谷に家するなり、この書は西泉の吳正子箋註、須溪の劉辰翁評點ありて、明このかた徐渭等の五家の註本あり、又邱象等の六家の辨註、孫枝蔚等の七家の評あり、王琦また諸家の説をとり、彙解を作れり、遞にあひ糾正し、互に發明あり、然ども要するに正子の註を以て最古とせり、賀が詩を爲るや冥心に孤り詣り、往々筆墨の外に出で、意を以て言ふべからずと云へり、

○李文公集十八卷

四冊

唐の李翱撰す、翱字は習之、隴西成紀の人なり、貞元十四年の進士にして、官は山東道の節度使檢校戸部尚書事に至る、唐の藝文志に十八卷に作る、超汭が東山存稿に書後一篇あり、李文公の集十八卷、百四篇と稱せり、陳氏書錄に云、蜀本二十卷に分てり、近時凡て二本あり、一は明景泰の間、河東の刑讓が鈔本となせり、清の徐養元これを刻せり、譌舛最も

甚し、毛晉が刊本なほ十八卷に作れり、翱は韓愈の姪婿たり、故に其學みな愈より出でたり、其古人に到るものは仁義の詞なり、焉ぞ一藝を以て名づけん、故に才と學とみな愈に遜り、百氏を鑄銘する事あたはずと雖ども、立言つぶさに根柢ありて、大抵温厚和平なり、蘇舜欽云、その詞は韓に似て理は柳に過たり、誠に篤論なりとせり、

○皮子文藪十卷

三冊

唐の皮日休撰す、休字は襲美、襄陽の人なり、鹿門山に居て自ら醉吟先生と號す、咸通八年進士に登り、太常博士に官せり、是の編は其文集の序に、咸通丙戌上第せずと稱し、退て州野に歸り、その文を編次す、篋を發て叢萃の繁き藪澤の如し、よつて文藪と名づくこと云、凡て二百篇、晁氏讀書志にもつとも篋銘によしと云へり、また經術にもとづき、孟子を請うて學科に立て、韓愈を請て太學に配饗し、唐人にありて尤も卓識となせり、僅に詞章を以て目する事を得

ず、集中詩わづに一巻あり、

○王荆公詩箋註五十卷

八冊

宋の李壁撰す、壁字は季章、雁湖居士と號せり、初め蔭を以て官に入り、後進士に登り、寧宗の朝に參知政事に遷る、事蹟宋史に具さなり、是書晁志に五十卷に作り、通考に十五卷に作るはたましく文を倒するなり、この書、臨川に謫居のとき作る所なり、原本流傳の絶て少なく、近代藏書家著録せず、海鹽の張宗松元刻の本を得て始て校刊せり、集中古今體の詩世に行ふ、臨川集を以てこれを校するに増多七十首、其佚する所のもの卷末に附録すと云、詳なる事は宗松が凡例に見えたり、

○玉臺新詠集十卷

二冊

陳の徐陵撰す、此の選する所は梁以前の詩なり、劉肅が大唐新語に、梁の簡文帝太子たりしとき、好て豔詩を作れり、境内これに化せり、昨年改作しこれを追んと欲して及ばず、乃ち徐陵に令して玉臺集を爲らし

め、以て其體を大にすと云へり、此に據ればすなはちこの書梁時に作れり、故に簡文を皇太子と稱し、元帝を湘東王と稱す、今本に陳尙書左僕射太子少傅東海徐陵撰すと題するは、後人の追改する所なり、其書前八卷は漢より梁に至り、五言の詩となし、第九卷は歌行となし、第十卷は五言二韻の詩となし、皆綺羅脂粉の詞と雖ども、古を去る事遠からず、尙ほ溫柔敦厚の遺を講ずるにありて、概ね淫豔を以てこれを斥くべからず、又この書によりて古詩の考據をなすべきもの多し、

○篋中集一卷

一冊

唐の元結編す、此の集は乾元三年に成れり、沈千運、王季友、于逖、孟雲卿、張彪、趙微明、元季川の七人の詩を録せり、凡て二十四首、前に自序ありて云、已に長く逝ものは遺文散失し、方に阻絶なるものは近作を見ず、ことごとく篋中ある所總てこれを編次し、命づけて篋中集と云へり、其詩みな淳古淡泊にして、絶

て雕飾を去り、惟に當時の作者と門徑互にことなるに非ず、七人の作る所の他集に見えたるもの、亦ここに及ばず、蓋し汰して精華を取り、百に一を存せり、特に刊薙の名に居るを欲せず、故に記言に、篋中ある所僅に此のみと云へり、

○河岳英靈集三卷

二冊

唐の殷璠編す、璠は丹陽の人なり、序首に題して進士と云、書録解題に亦た々に唐の進士と稱せり、其始末を詳にせず、是の集は常建より閻防に至り、二十四人の詩二百三十四首を録せり、姓名の下に品題を著す、鍾嶸が詩品の體に仿へり、顯に次第を分たすと雖ども、然ども篇數の多き事なし、其序に云、ここに退迹により宿心を遠る事を得たり、けだし志を得ずして書を著すものなり、故に録する所みな淹蹇の士、論するところ多く感慨の言なりと云へり、

○國秀集三卷

一冊

唐の芮挺章編す、挺章の里貫を詳にせず、諸書に稱

して國子進士と爲せり、蓋し大學生なり、前に舊序ありて是の集天寶三載に編すと云へり、凡て九十人、詩二百二十首、宋の元祐の間、曾彥和が跋に云、名は一士を缺き、詩は一篇を増せりと、毛晉が校刊に至り、また三人を虚うすと云、今本編内實に八十五人、詩二百十一首あり、晉詳に檢せざるなり、唐以前總集を編するに己が作を以て選に入るものは、王逸が楚詞を録するに始り、再び徐陵が玉臺新詠を撰するに見えたり、挺章また己が作二篇を録せり、けだしその例に仿へり、然ども文章論定おのづから公評あり、まさに之を天下後世に待せんとするを要するなり、表章の例のよるべき有りと雖ども訓となすべからず、

○唐御覽詩一卷

一冊

一名は唐歌詩、一名は選集、一名は元和御覽、唐の令狐楚編す、楚字は穀士、宜州華原の人なり、貞元七年に進士第に登り、左僕射に至る、事蹟唐書本傳に具さなり、この書憲宗の時勅を奉じて編進せり、陸

游が渭南文集にこの書の跋あり、右唐御覽詩一卷、凡て三十人、二百八十九首、元和の學士令狐楚が集する所なりと云、

○中興間氣集二卷

一冊

唐の高仲武編す、是の前に自序ありて、至徳の初に起り大曆の末にいたるまで、凡て二十六人、詩一百十首と云、末に元祐戊辰曾子泓が跋あり、獨り鄭當一人を遺し、詩八首を逸すと稱せり、蓋し宋時にあつて已に殘闕す、故に陳氏書録に云、選する所の詩一百三十二首なり、姓氏の下におのづか品題ありて、その警句を拈せり、河岳英靈集の例にして、張衆甫、章八元、戴叔倫、孟雲卿、劉灣の五人を俱に缺けり、毛晉が跋に、舊鈔本缺くところ張章戴諸評俱にあり、獨り劉灣考る事なし、故に編中の四家、姓氏の下に於てともに註し、評を卷首にのせたり、今卷首を檢するにこれなし、まさに久しきによりてまた佚するのみ、

○極玄集二卷

一冊

唐の姚合編す、是の集王維より戴叔倫に至り、二十一家の詩をとり、凡て一百首、今存するもの凡て九十九、あはせて自から詩家の射雕子と稱せり、亦虚語にあらざるなり、すべてあざな及び爵里登科の年と、一々詳に載せたり、總集の兼て小傳を具するは實に此の書より始る、亦以て考證を資くるにたれり、

○才調集十卷

五冊

蜀の韋穀編す、穀は王建に仕へて監察御史となる、その里貫事蹟みな詳かならず、この集は卷ごとに詩一百首を録す、共に一千首あり、自序に李杜の集、元白の詩を稱せり、然ども集中に杜詩なし、實に杜詩高古なるを以て、其書の體例と同じからず、故に採録せず、其中頗る舛誤あり、李白が愁陽春賦を録す、これ賦にして詩にあらず、王建が宮中調笑詞を録す、これ詞にして詩にあらず、みな體例にそむく、賀知章が柳枝詞を録す、乃劉采春が女の歌にして、知章に

非ず、その曲は中唐に起る、知章のとき亦あらざるの類、みな姓名の譌異多し、然ども頗る諸家の遺篇あり、白居易が江南に蕭十九を贈る詩、賈島が杜駙馬に贈る詩の如き、みな本集になき所なり、又詩字を改竄するもの、この書ひとり其舊を存せり、また考證を資るにたれるなり、

○搜玉集一卷

一冊

編輯者の名氏を著はさず、鄭樵が通志にこれを載せたり、その來る事舊し、舊目凡て三十七人、詩六十三首、この本たゞに三十四人にして、詩六十二首あり、蓋し毛晉が重刊釐定する所なり、註する所の考證頗る詳かなり、然ども胡鵠等三人録ありて詩なし、晉合せて其姓氏を刪り、疑を缺き、舊を存するの意にあらず、又人はその三人を缺き、詩は僅に其二を缺けり、三人に分記するに足らざるなり、訂する所の確ならざるなり、

○又玄集三卷

一冊

唐の韋莊撰す、莊字は端已、杜陵の人なり、蜀の王建めして書記を掌らしめ、起居舍人たるに及んで唐詩を選す、杜甫より魚玄機に至り、一百四十二人、三百首を集めたり、自序に昔し姚合極玄集を撰し、當時に傳へ、已に精微を盡し、今更に玄なるものを採り、勅して三卷を作る、獨り短見を資るのみにあらず、亦後昆に貽すべきなりと云、

○唐百家詩選二十卷

七冊

宋の王安石撰すと、是の書の去取絶て解すべからず、宋より以來これを疑ふもの一ならず、曲に解をなすものも亦一ならず、大抵さして安石と爲せり、ひとり晁志に云、唐百家詩選二十卷、皇朝宋敏求次道編すと、次道三司判官たりし時、其家の藏する所の唐人一百八家詩選を取りて、其佳なるもの一千二百四十六首を擇び一編となせり、王介甫これを見て、因つて再び去取する所あり、かつて題して唐詩を觀んと欲するもの、これを見れば足れりと云、世遂に以て

介甫が纂する所とせり、其說諸家と異なり、讀書志は南宋の初に作れり、安石を去る事遠からざるなり、又晁氏元祐より以來舊家の獻緒論あひ承け、其言まさに必ず由る事あるべし、邵氏聞見録、周氏清波雜誌に是の書の始末見えたり、此本宋の乾道中に倪仲傳が刊する所にして、仲傳が序あり、其書久しく傳はらず、清の康熙中に宋肇、宋本を得て之を刻せり、則この書なり、

○萬首唐人絶句詩九十一卷

十六冊

宋の洪邁編す、淳熙の間に於て唐五七言絶句五千四百首を録し進御せり、後また補輯し、萬首に滿る事を得て、紹熙二年これを上る、是の時に勅を降し褒嘉して、選擇甚だ精備に博洽を見の論旨あり、陳氏書錄に唐人の詩をとる李九齡、郭震、滕白、王岳、王初の屬の如し、その尤も深く考へざるものは梁何遜となす、劉後村詩話にまた云、其たゞに唐人の文集を取り、雜説を鈔類して書をなし去取する所なし、蓋し

當時の瑣屑を撫拾して、萬首の數に足せり、其精審なる事能はず、勢の必ず然る所なり、この書原本一百卷にして、毎卷百首を以て率とせり、亦百卷に満ず、目錄の後に、嘉定の間紹興の守吳格が跋を載て云、原書歳久しく蠹闕す、よつて修補し以て其傳を永ふすと云、此本まさに修補の後、また散佚せるなり、

○聲畫集八卷

四冊

宋の孫紹遠編す、紹遠字は稽仲、録する所みな唐宋の人、題畫の詩なり、凡て二十六門に分てり、この本卷首に、淳熙丁未十月紹遠の自序ありて云、廣に入るの明年、攜る所の前集の詩、及びこれを同官に借し、その畫の爲にして、作者を擇び一集となし、名づけて聲畫と云は、有聲畫無聲詩の意を用ゆるの意なりと云、

○古文關鍵二卷

二冊

宋の呂祖謙編す、是の書韓愈、柳宗元、歐陽修、曾鞏、蘇軾、張朱八家の文、凡て六十餘篇を取り、その命意

布局の處を標舉し、學者に示めすに門徑を以てせり、故に關鍵と云、卷首に總論、看文、作文の法を以てし、又字旁に鈎抹の處に評論あり、

○崇古文訣三十卷

八冊

宋の樓昉撰す、昉字は陽叔、迂齋と號せり、鄞縣の人なり、紹熙四年の進士にして、歷官興化軍に守たり、是の集選する所の古文凡て二百餘首、陳氏書録にその大略を稱せり、呂氏關鍵の如くして、録する所秦漢より下も宋朝に至り、篇目增多にして發明もつとも精し、學者これに便れり、蓋し昉、業を呂祖謙に受けたり、故に其師説を推しひらき密を加へたり、

○衆妙集一卷

一冊

宋の趙師秀編す、是の集唐代の五七言律詩を録せり、沈佺期より起り王貞白に至り、共に七十六人にして、先後を詮次せず、五言十の九に居り、七言僅に十の一なり、是集風度流麗を以て宗となせり、中唐の格に近し、此の本明の季に嘉興の屠用明が家より出で

て、寒山の趙靈均これを常熟の馮班に授け、班また毛晉に寄せて之を刊せり、始めて世に傳へたり、

○箋註三體唐詩六卷

三冊

宋の周弼編し、元の釋圓至註せり、選する所の唐詩を三體と云ものは、七言絶句、七言律詩、五言律詩なり、首に選例を載せ、七言絶句を七格分つ、實接と云ひ、虚接と云ひ、用事と云ひ、前對と云ひ、後對と云ひ、拗體と云ひ、側體と云ふ、七言律詩を六格に分つ、四實と云ひ、四虚と云ひ、前虚後實と云ひ、前實後虚と云ひ、結句と云ひ、詠物と云ふ、五言律詩を七格に分つ、前の四格は七言に同じ、後三格は一意と云ひ、起句と云ひ、結句と云ふ、宋末風氣日にうすく、詩家各古體に工みならず、故に衆妙集、瀛奎律髓に録する所のもの近體にあらざるなし、此の書また相ひ同じ、列する所の諸格尤も詩の變をつくすに足らず、然

ども詩家の授受この規程ありて、これをなして亦一説を備ふるにたれり、此書世に行ふもの誤脱多きを

以て、古刻の本を以て校刊するものなり、

○文章軌範七卷

二冊

宋の謝枋得編す、是の集は録する所漢晉唐宋の文、凡て六十九篇にして、韓愈の文三十一、柳宗元・歐陽修の文おのゝ五、蘇洵の文四、蘇軾の文十二に居る、其餘はおのゝ一篇のみ、前の二卷を題して放膽と云ひ、後の五卷を題して小心文といひ、各批註圈點あり、其六卷は圈點ありて批註なし、出師表、歸去來辭は并に圈點またこれなし、則意を寓する所なりと云、其門人王淵濟云く、漢の丞相晉の處士の大義清節を、壘山深く意を致す所なりと云へり、此の本世に坊刻のみありて誤謬もつとも多し、因つて韓版を覆刻せらるゝなり、此の書によりて壘山の眞本を見るに足れり、

○唐宋千家詩選二十二卷棟亭楊州十二種原本

四冊

是の書題して後村先生編すと云、序跋凡例共になし、門類を分つ事凡十二、五七言絶句、五七言律詩の近

體のみを録し、各門目により配纂し、詩を學ぶ者に便ならしむ、此書諸家の書目に載せず、世に行ふ疊山の撰に託する千家詩にや、出入し、増益するに門類を以てするに似たり、蓋し名を劉克莊に託せるなり、體例もと坊本なりと雖ども、詩式を見るの捷法となすべし、清の曹寅劉後村の選する所とし、校刻し楊州十二種中に入る、は誤りなり、

○風雅翼十四卷

七冊

元の劉履編す、履字は坦之、上虞の人なり、明に入りて仕へず、自ら草澤の間民と號せり、是の編は首に選詩補註八卷を爲り、文選の各詩を刪補訓釋す、大抵これを五臣の舊註に本づき、各たつに己れが意を以てし、次に選詩補遺二卷を作り、古歌謠詞の傳記及び、諸子樂子樂府詩集に散見するものを取り、選録するもの四十二首、以て文選の闕を補へり、次に選詩續編四卷を爲り、唐宋以來詩詞の近古のもの一百十九首を取り、以て文選の嗣音を作り、其去取は

大抵真德秀の文章正宗に本づき、その詮釋體例は則ち悉く朱子詩集傳を以て準となせり、然ども其うち曲解附會を免がれざる所ありと云、

○唐宋八大家文讀本三十卷

十六冊

清の沈德潛編す、是の編は韓愈、柳宗元、歐陽修、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石の八家の文を取れり、唐宋八家の文は、明の茅坤、唐順之が著す所の文編を析て、八家文抄一百四十四卷、五代文抄二十卷を撰せり、然ども坤が編は浩繁に互り、學者あまねく讀み難しとす、故に繁を刪りてこれを爲れり、每家おのゝ評語あり、字傍に文格圈點あり、大抵舉業の爲に設る所なり、

○唐賢三昧集三卷

二冊

清の王士禎編す、士禎字は貽上、濟南の人なり、少年嘗てその兄士祿と神韻集を撰す、其書人の爲に改竄せらる、故に晩年此編を定めたり、皆盛唐の作を録せり、名づけて三昧と云ものは、佛經の自在義を

取れるなり、是の書は重て嚴羽の説を申べて、獨り神韻を主として作れるなり、

○古詩選三十二卷

十一冊

清の王士禎編す、此編は五言詩十七卷、七言詩十五卷、五言は漢魏六朝より以下、唐代は陳子昂、張九齡、李白、韋應物、柳宗元の五人を載せたり、七言古逸一卷、漢魏六朝一卷、唐は李嶠、宋之間、張說、王翰四人を一卷となせり、王維、李頎、高適、岑參、李白を一卷と爲り、王昌齡、崔顥の二人は附録五卷と爲り、以下は唐の杜甫、韓愈、宋の歐陽修、王安石、蘇軾、黃庭堅、晁說之、晁補之、陸游、金の元好問、元の虞集、吳萊十三人の詩にして、李商隱、蘇轍、劉迎、劉因の四人は附録となせり、夫五言は漢代にはじまり歷代に沿流し、晉宋齊梁已に互に其體を變じ、亦一格に拘らず、士禎がこの書一家の書にして、以て古今の變を盡すにたらざるなり、

○新編濂洛風雅九卷

四冊

清の張伯行編す、是の編は周子、二程子、邵子、張子、游酢、尹焞、楊時、羅仲素、李侗、朱子、張拭、真德秀、許衡、薛瑄、胡居仁、羅洪先の十七家の詩を集めて福建に巡撫たりしとき刊せりと云、元の金履祥さきに濂洛風雅あり、伯行またこの書あり、其舊名によりて一字も改めざるは解すべからずとあり、

○宋十五家詩選十六卷

十六冊

清の陳評編す、是の編は梅堯臣、歐陽修、曾鞏、王安石、蘇軾、蘇轍、黃庭堅、范成大、陸游、楊萬里、王十朋、朱子、高翥、方岳、文天祥の十五家を録し、每集おのの小傳及び前の詩話を繋げたり、又己が評する所の論を以て附せり、

○宋高僧詩選二卷後集三卷續集一卷補遺一卷二冊

宋の陳起編す、起字は宗之、錢塘の人なり、書肆を陸親坊に開き、また陳道人と號せり、此書宋朝の浮屠の詩に名あるもの九人を選べり、清波雜誌に載する九僧なるものこれなり、所謂九僧は、劔南の希畫、

金華の保暹、南越の文兆、天台の行肇、沃州の簡長、青城の惟鳳、江東の宇昭、峨嵋の懷古、淮南の惠崇なり、後集の上巻は贊寧より以下十人の詩を録し、中巻は延壽より以下十二人を録し、下巻は善權より以下十九人を録せり、續集は祕演より十七人を録す、補遺は汲古閣の毛辰が初集の闕を補ふものなり、此の書は陳起が江湖集中に入りしが、闕けたるを康熙中毛辰が汲古閣に刊せるを、乾隆壬寅の年、鮑廷博宋本を以て知不足齋に校刊せるものなり、

○藏海詩話一卷

一冊

宋の吳可撰す、永樂大典中に載せて、撰人の名氏を著はさず、明より以來諸家の目に著録せず、大典に宋の吳可が藏海居士集を載せたり、此の書の名目と相ひ合へり、又集中詩を論ずる時代の亦あひ合ふ所あり、よりて可が作となすと云へり、論ずる所の有形無形の病ひ、もつとも抉微に摘入せり、その他の評論考證亦とるべきもの多しと云、

○誠齋詩話一卷

一冊

宋の楊萬里撰す、此の編題して詩話と云、然ども文を論ずるの語、詩よりも多し、又頗る諧謔雜事に及べり、蓋し宋人の著す所往々かくの如し、且一萬里のみに非ざるなり、萬里もと詩名を以て名あり、故に論ずる所理に中る、萬里詩を作るに多く好で俚語を用ゆと云へり、

○吟窓雜錄五十卷

十冊

宋の陳應行編す、前に紹興五年浩然子の序ありて、前に諸家の詩話を列せり、惟り鍾嶸の詩品よりどころ有りとするれども刪り去り、其餘は李嶠、王昌齡、皎然、賈島、齊己、白居易、李商隱諸家の書の如き、おほむね依記に出づ、開卷魏の文帝の詩格一卷あり、則盛に律詩を論せり、引く所みな六朝以後の句なり、

○明代選層三十卷

七冊

明の李本緯編す、本緯字は君章、都門の人なり、この編は洪武より慶曆に至るまで、詩を以て名あるも

のを、門を分ち類を比し、三十類に分ち、劉基より張元易に至り、宗室、法外、閨媛、娼妓に至るまで、合せて六百九十人を得たり、その類次の法は、五言、七言絶句、律詩、長篇をつらね、之を置くの序は摘句あり、聯集あり、半章あり、全篇ありて、人名及び詩題は聯句の下に系けたり、體例もと駁雜なる事を免れざるなり、

○琴操二卷 平津館叢書原本

一冊

漢の蔡邕撰す、邕字は伯喈、陳留の人なり、此書首に古琴の製造のよりて出る所を述べ、次で古琴曲の詩歌の五曲、又十二操、九引、雜歌二十一章の解題をなし、古曲の存せるもの各其詩を解後に附せり、琴操の體一ならず、暢あり、歌詩あり、操あり、引ありて、すべてこれを操と云、隋書經籍志に琴操三卷あり、晉の孔衍撰すと、崇文總目、中興書目、並に孔衍に屬せり、傳註に引く所及び讀畫齋叢書に傳る所の本、みな蔡邕が撰に作る、唐志に桓譚が琴操二卷

を載せたり、新論に琴道篇ありて、琴操ある事を聞かず、琴操の言に伏羲始て琴を作ると、又神農始て琴を造ると云、其言合はず、則琴操桓譚の撰にあらざるなり、この書清の孫星衍、古誼の存せる所を經傳に證し、各條に按語を加へ、校勘して自編の叢書中に刻入し、卷末に補遺一篇を附せり、

弘化四年丁未春月新刻

横山町一丁目

御書物師

出雲寺萬次郎

官版書籍解題略下終

諸藩藏版書目筆記凡例

斯書は昨年の秋七月、諸藩藏版の擧あるべしとして、經史子集の内何か然るべきと、可否を尋問ありし藩、前後四家あり、僕これが爲めに、四庫のうち學者の裨益ともなり、雕刻も便利になるべき品種、經は康熙の四經、乾隆の三經、史は南北史、隋書等をはじめとして、我土にこれまでに翻刻もなきものにて、尤も佳なる物を考覈して、盡く題をしるし、一小冊とし、なほも我土は唐山の如く、同種の品を二版も三版もありて、彼是するとも、海内流傳も數多には發販あるまじければ、是までに諸家にてすでに雕刻ありしものは、譬へば校正等精核に非ずとも、それはさし置、重複のなきやうに致すが簡要にあるべくと心附き、諸藩に藏版ありしものを筆記して添て、一小冊と共に二種として奉りぬ、その後一二の子弟三

四の友人竊抄して、一時倉卒の筆記、遠邇へ流傳し、人動すれば輒之を尋問す、故に首尾を刪補して四卷とし、今家塾に雕刻す、

一、斯書、舊より數日の憶記にして、搜索訪索するのいとまなく、また世の經生文人に示すに意なく、諸侯士大夫わづかに讀書に従事する人の、分り易からん事を專一として記せしなれば、辭の鄙野をいとはず、僕が意志を通ずるにあり、

一、慶長元和の比より寛文延寶の間まで、活字版にて儒書醫書を刷りしこと少からず、また津輕家などにて山鹿素行が著述を雕刻ありしなど、今の藏版なれども、當時藏版の名目なし、元祿のはじめ柳澤家に晉書以下の五史を雕刻ありしを、其頃も神田の藏版と世人唱へしよし、細井廣澤が深川居隨筆に見えたり、今按に、其頃柳澤家の邸は神田橋うちには有りしゆゑなり。さすれば坊刻にあらざるものは、皆これを記して、各藩の先君儒教を重じ、文士を敬ひ給ふ一斑を、世の人にらしむるのみ、

一、藏版の名目は、水府彰考館にて編修ありし新編鎌倉志、参考保元平治物語など、そのころの先鞭なるべし、皆貞享元祿の中にあり、正徳享保にいたりては藏版の唱へ比々として起りぬ、それより已前紀府にて那波道圓が明備録、永田善齋が胎餘雜録を雕刻して、京師の書肆へ命じて發販ありし例多し、また藏版の名目はなけれども、右様の藩の失費にて上木出來して、後には版木を書肆へ下されしこと、世間一様の風習なりしゆゑ、其後には版木書肆の有となるとも、其はじめは藩にて出來せしもの悉く是を其藩へ記す、

一、原稿は僅に廿枚に足らず、始に足利の僧三要長老が活字の貞觀政要を起せし事より、享保中明律等の官刻ありし話に及び、直に尾府明倫堂藏版の目に及ぶ、今寛政中よりして數多の官刻なりしものを新に首に記して、已後重複なきを欲す、既に舊臘より王引之が經傳釋詞を學舎翻刻ありしに、處士某が其

擧を不知してまたこれを刻す、公私相關らざるに似たれども、我土は一版にして餘あり、それより別種を刻するにしかず、

一、斯書、聞見によりて草すれども、悉く依據する所あり、されども誤るものも多かるべければ、看人は正あるを願ふのみ、全く侯家藏版のみ記するを主とすれども、一二は其藩士の藏版に及ぶものあるは、諸藩の數を擧るにあり、其餘は各條の下へ記すれば、別に及ばず、

諸藩藏版書目筆記卷之一

信濃 東條耕子藏著
門人 佐藤養君正校

我土にて武家の世となりて、儒教の書籍を雕刻せしは、中世以降の事にして、南北朝のとき、和泉の國堺浦道祐居士が何晏が論語集解の正平本を始とし、此よりして周防の大内義弘朝臣が元版の陳彰年が重修廣韻を雕刻し、會津上杉家の老臣直江兼續が史記評林、類聚、文選などの三書を活字版に起せしなど、今も儘世に傳へたり、其餘なほもあるべきに皆悉く散逸して知るべからず、〔頭書、大塚遜、字退翁、播磨人、昌平志一卷、〇國朝官刻印版始、于慶長甲寅刻、大藏一覽、貞觀政要等書、又有活字銅版、見于駿河日記、元祿元年十一月官刻四書直解、置之日光祖廟及伊勢、山王、鶴岡、〕道祐居士が正平本、當時我邦のみにて傳流寛永増上二寺各一部にせしにあらす、唐山へも播布せしと見えて清の錢曾が讀書敏求記に重價を出して此書を購ひ、珍蔵とせしよしを記せり、さりながら正平を高麗の年號ともいひしは誤りなり、堺浦道祐居士重新命工鑄梓、正平甲辰五月吉日漢講と記しありしを其ま、載せて、六行絲欄大字活版本寸分厘毫を違はず外題を擧たり、

は西條の儒臣山井鼎が〔按るに、眞蹟を見しに重鼎と作りしもの多く、後に重の字を避しなるべし、〕編述せし七經孟子考文を見たまひて御賞賜あり、猶また侍講官荻生觀〔俗名惣七郎、祖徠の弟、〕へ命じて、鼎が遺漏せるを補はしめて、七經孟子考文補遺二百卷、三十三本として雕刻に相成り、長崎奉行をして清國へ遣はされしに、彼土にても誠に賞歎いたし、其後仁宗の嘉慶二年、わが土の寛政九年に當りて、右の七經孟子考文補遺を天子内府にて雕刻し、四套二十四本として、手廣く彼土にて行れて今に至れり、其外太宰純校正七百口傳、古文孝經、根本遜志が校正せる皇侃が論語義疏、彼土宋よりして既に散佚して傳はらざればとて、歙縣の鮑廷博が知不足齋叢書に收るなど、我土文學の盛なるを海外に示すに足りしは、全く二百年來休明の運に依りてなれば、申まではなけれども、文學に従事するもの、益々山野にあるとも操觚の勞を厭はずして、此道鼓舞すべし、享保中、明律、度量衡考、六論衍義、同大意、五倫名義、改正服忌令、同小

今按に、正平の甲辰は十九年なり、北朝の貞治三年は足利家の二代義隆の時なり、しかるに重新命工鑄梓とあれば、其以前鎌倉の頃既に雕刻ありしなるべく、中世已前孝謙稱徳の世に、無垢淨光陀羅尼經を雕刻ありて、今もま、世に傳はりたれども多く佛書のみなり、この時は蓋し唐の玄宗晩年より肅宗代宗の時當りていと舊く、また康永の比、高師直が楞嚴經を雕刻し、齋其甫なるものありて韓柳文の抄本を雕刻せしなど頗る多けれども、應仁文明の亂よりして盡く散亡して知るべからず、好古の人知らずんばあるべからず、其後文祿慶長の間に東照公駿府に在せし時に、禪宗の僧徒下野足利の三要長老に命じて、論語集解、孔子家語、貞觀政要、武經七書等を活字版にして雕刻し給ふ、藤井貞幹書籍存佚考、吉田章城が活版經籍考、近藤守重の右文故事書籍考の二書及び英選活字版目録、古版本目録、松澤老泉が文會業餘に詳なれ、續ては常憲公、文學を好ませ給ひて、四書章句集註改點本、同巾箱本、永樂四書大全、五經改點本、書經大全、詩經大全、周易程傳、書經集傳音註、詩經集傳音註、周易本義巾箱本など數種雕刻に相成り、永く學者の裨益となり、有がたき事どもなり、文昭公にも別して文雅に在せられ、新井君美が獻議にて、萬曆版十三經、二十一史全部をも雕刻あるべき所なりしが、不幸にして薨じ給ひて其擧ならず、恐れ多くも斯の道の遺憾とも申奉るべし、有徳公に

刻本、蕃著考、普救類方、太平和劑、局方指南總論、東醫寶鑑などの數種、御世話有て官刻相成りしが、其後は右の版本を書肆のものどもへ下し賜りて、世人還て是等の美事を知るものなし、其後御代々官刻になりしもの尠なからず、されども右様の有がたき古文の御代に生れながら、世上の儒士文人と唱ふるもの、返て近きを疎かにして遠きを慕ひ、七經孟子考文をさへ讀し學者稀にして、徒に新渡舶來の書籍を讀て是等のことを知らず、故に僕が固陋を揣らず、四庫は初て唐書に見ゆ、我土の四庫の分類に詳ならずして、蒙求世説をもつて史の部とす、傳記の類に似たれども、蒙求は小説家に屬して、何れも子部なり、我土の小説と心得しは水滸傳、演義三國志等の話本にして、是は演史劇本と唱へて四庫の内へ收むる事なし、唐宋よりして史部中目錄の學盛なれば、是また講究なくんばあるべからず、漢書藝文志より明史に至るまで、宋の王堯臣が崇文總目、晁公武が郡齋讀書志、陳振孫が直齋書錄解題、明の楊士奇が文淵閣書目、焦竑が國史經籍志、清の乾隆中勅修四庫全書提要、黃虞稷が千頃堂書目等、其外諸家著錄多ければ就て見るべし、分て、學舎にて雕刻ありしもの左に記し置候間、すでに官刻に相成候しなくは除き、また諸藩は勿論、坊間書肆にても雕刻せしものも除き、有用の品と學

士必用の種と、得と別紙中へしるし貴覽に備へ候ま
ま、御選びあるべきなり、今時の諸藩に儒官記室の
職にあり候、人々右様の事は難學いたし候ものが致
し候事にて、孔孟忠孝仁義の教訓には無用のやうに
心得候へ共、儒者顧問待對の用なくしては、舊より治
國平天下の事業にも疎く、且は古今の制度、時勢の
沿革もわかり申問敷候間、藏版の一事に付、おもひ
出候の事ども認め申候、猶又三四日内の筆記なれば、
誤謬も可し有之候ま、御一覽の上推敲ありたしと、
曾ていのるところなり、

因に云、或人此稿を見て難詰せしは、侯家の藏版の
みにあらず、まゝには其藩の陪臣の藏版も混雜して
あれば、概して諸藩とはさしがたし、第一に福山藩
の藏版は全く小學纂註のみにして、韓非翼叢、呂氏
春秋は侯家の藏本にあらざれば刪りて然るべしとな
り、僕その言に隨ひ刪落もすべきなれども、既に稿
本も人々傳寫して、今更刪落すとも馴も舌に及ばず、

且そのむかし韓非翼叢を著せし太田善齋は、僕が知
識の人にして、既に侯家にも出費を賜り、雕刻あ
るべき積りなりしが、侯家事多し其の儘にて
打捨ありしゆゑ、一己の力にて活字版として、僅に
三百部を刷りしなりと物語りしを聞きゆゑ、風と記
しおきしなり、其他右に類せしも十中に一二はある
べけれども、多くは侯家にては儒臣記室の職にあり
しもの、享保の頃には文集遺稿の類を、その君侯よ
りして雕刻ありて、一時の文學の貴光ともなりしな
れば、其藩中にては世上へ知られんを欲せしこと、斷
りなしとも謂がたければ刪落するに忍びず、舊稿を
存せしなり、僕また諸藩陪臣藏版書目筆記十二卷を
草す、いまだ全くならず、その外近世名家著述目錄
六卷を著はす、これは書估玉崑堂にて雕刻するに、今
に全く出來せず、
伏して冀くは、別紙の諸書追々に有志の人、侯家の
みにあらず、既に雕刻になりしものを除きて、各有

志の書を藏版として、學士の裨益を贊襄ありたらば、
僕が婆心の本望たるべし、

經類

- 文公易說、廿三卷十本 宋朱鑑編、
- 周易本義通釋、十二卷七本 元胡炳文撰、
- 周易本義附錄纂註、十五卷四本 元胡一桂撰、
- 易學啓蒙通釋、二卷二本 元胡方平撰、
- 周易本義辨證、五卷三本 清惠棟撰、
- 書蔡傳輯錄纂註、六卷五本 元董鼎撰、
- 書傳纂疏、六卷六本 元陳樸撰、
- 詩童子問、十卷五本 宋輔廣撰、
- 詩傳遺說、六卷三本 宋朱鑑撰、
- 詩集傳名物抄、八卷八本 元許謙撰、
- 詩傳通釋、廿卷八本 元劉瑾撰、
- 春秋釋例、十五卷十五本 晉杜預撰、
- 春秋名號歸一圖二卷附春秋年表 五代馮繼先撰、
- 春秋左傳補註、十卷二本 元趙汴撰、

- 禮記集說補正、三十八卷九本 清納蘭成德撰、
- 儀禮圖十七卷、旁通圖一卷八本 宋楊復撰、
- 大戴禮記、十三卷四本 漢戴德撰、
- 大戴禮記補註、九卷四本 清阮元撰、
- 四書纂疏、廿六卷十三本 宋趙順孫撰、
- 四書通旨、六卷六本 元朱公遷撰、
- 四本通釋、廿卷十四本 元倪士琦撰、
- 四書章句集註附攷、四卷一本 清吳志思撰、
- 孝經鄭註一卷、附補證一卷、孝經鄭氏解輯一卷、一本
- 五經文字三卷、唐張參九經字樣一卷、唐玄度四本
- 六經正誤、六卷四本 宋毛居正撰、
- 九經補韻、一卷一本 宋楊伯禹撰、
- 鄭志三卷、附錄一卷、二本 魏鄭小同編、
- 四書白文、無卷數、四本
- 五經白文、無卷數、十一本
- 宋本影抄繪圖爾雅、十一卷三本
- 說文真本、三十卷十本 漢許慎撰、

古本玉編、三十卷三本梁順野王撰、
 古本廣韻、五卷五本唐孫福撰、
 千祿字書、一卷一本唐顏孫撰、
 五音集韻、十五卷十本金韓道昭撰、
 通叶集覽、二卷二本清王鳴玉撰、
 古今韻略、五卷五本清邵長蘅撰、
 經傳釋詞、十卷三本清王引之撰、

史類

八史經籍志、三十八卷自漢書藝文志至明史藝文志十七本
 四庫全書總目、四卷六本清乾隆中紀的等撰、
 彙刻書目十卷、補一卷、十本清顧修撰、
 古今僞書考、一卷一本清姚際恆撰、
 唐律疏義、三十卷十五本唐長孫無忌等撰、
 唐六典、三十卷八本唐玄宗御撰李林甫註、
 魏鄭公諫錄、五卷三本唐王方慶撰、
 魏鄭公續諫錄、二卷元程思忠撰、
 唐鑑、廿四卷五本宋范祖禹撰、

稽古錄、廿卷四本宋司馬光撰、
 通鑑綱目、五十九卷六十本宋朱子撰、
 通鑑答問、五卷五本宋王應麟撰、
 續通鑑綱目條記、廿卷清遠述來撰、
 朱子年譜、四卷、考異四卷、附錄二卷、口本清王懋竑撰、
 伊洛淵源錄、十四卷四本宋朱子撰、
 自號錄、一卷一本宋徐先溥撰、
 漢官舊儀、二卷、漢衛宏撰、補遺一卷清皇子永璿等撰、一本
 考亭淵源、廿四卷八本明宋端義撰、
 救荒活民書、三卷、宋董煟撰、補遺三卷、明朱熊撰、二本
 州縣提綱、四卷一本宋陳襄撰、
 書簾緒論、一卷一本宋胡太初撰、
 官箴、一卷一本宋呂本中撰、
 三事忠告、四卷一本元張養浩撰、
 金石例十卷、元潘昂霄撰、墓銘舉例四卷、明王行撰、金石
 要例一卷、附論文管見一卷、清黃宗義撰、四本清盧見曾編、曰三金石三例、
 石經考、一卷一本清萬斯同撰、

琉球國史略、十二卷六本清周煌撰、
 東華錄、十六卷十六本清蔣良騏撰、
 廣輿古今抄、八卷四本清程某撰、
 朝鮮史略、十五卷五本不知撰者、

○

扶桑略記、十五本皇朝僧皇圓撰、
 孝義錄、無卷數二十本文化中撰、

子類

賈子新書、十卷五本漢賈誼撰、
 傅子、一卷一本晉傅玄撰、
 顏氏家訓、六卷四本隋顏之推撰、
 影宋本文文中子中說、十卷一本隋王通撰、宋阮逸註、
 蘇氏演義、二卷唐蘇鶚撰、
 兼明書、五卷二本五代邱光庭撰、
 家範、十卷二本宋司馬光撰、
 迂書、一卷一本同上、
 童蒙訓、一卷一本宋呂本中撰、

洞天清錄、一卷一本宋趙希鵬撰、
 近思錄、十四卷四本宋朱子、呂祖謙同撰、
 崇正辨、三卷三本宋胡寅撰、
 純正蒙求、三卷三本元胡炳文撰、
 攷古質疑、六卷二本宋葉大慶撰、
 白警編、九卷六本宋趙善瑋撰、
 晁氏儒言、一卷、晁氏客語、一卷、二本宋晁說之撰、
 省心雜言、一卷一本宋李邦獻撰、
 肯綮錄、一卷一本宋趙叔問撰、
 牧民心鑑、二卷一本明朱逢吉撰、
 從政名言、一卷一本明胡繼宋撰、
 開關錄、十卷四本明程暉撰、
 帝範、四卷一本唐太宗御撰、
 歷代君鑑、五十卷十本明景帝御撰、
 女訓、一卷一本明蔣后撰、
 內訓、一卷一本明徐后撰、
 畜德錄、十卷十本明陳沂撰、

老子道德經攷異、四卷二本元黃筮撰、
 周易參同契考異一卷、陰符經考異一卷、宋朱子撰、一本
 孫子一卷、周孫武撰、吳子一卷、周吳起撰、二本
 六韜六卷、周呂望撰、同法一卷、周司馬穰苴撰、二本
 琴操、一卷一本漢蔡邕撰、
 農書三卷、宋陳旉撰、蠶書一卷宋秦觀撰、一本
 耕織圖詩、二卷二本清聖祖御撰、
 硯箋四卷、宋高似孫撰、墨經一卷、宋晁說之撰、一本
 編珠二卷、隋杜公瞻撰、補遺二卷、續二卷、清高士奇撰、六本
 造化經緯圖、一卷一本明趙謙撰、
 小學白文、二卷二本
 名物蒙求一卷、明方建撰、性理字訓一卷、明程若庸撰、歷代
 蒙求一卷、元陳樸撰、史學提二卷、元黃繼善撰、合四本二曰
 小四書、明朱升編、
 三字經、一卷一本宋王應麟撰、
 唐伯虎畫譜、一卷一本明唐寅撰、
 學畫淺說、一卷一本明王概撰、

孔子集語、十卷六本清孫星衍撰、
 讀朱隨筆、四卷四本清陸隴其撰、
 世說新語、六卷六本宋劉義慶撰、
 續世說新語、十卷五本唐李肇撰、
 唐世說新語、十三卷三本唐劉肅撰、
 文選錦字、廿一卷十本明凌迪知撰、
 楚騷綺語、六卷三本明張象之撰、
 明代選屑、十五卷七本清李本緯撰、
 方言藻、二卷一本清李調元撰、
 熟講規約、一卷一本清施瓚撰、

集類

李長吉歌詩三卷、外集一卷、三本唐李賀撰、
 韋蘇州集、一卷四本唐韋應物撰、
 次山集、十二卷四本唐元結撰、
 李文忠公集、十八卷四本唐李翔撰、
 皮子文數、十卷三本唐皮日休撰、
 白氏長慶集、七十一卷三十本唐白居易撰、

韓文、廿卷六本唐韓愈撰、
 柳文、廿卷六本唐柳宗元撰、
 半山詩集、五十卷八本宋王安石撰、
 昆陵集、十二卷五本宋蘇軾撰、
 杜詩偶評、四卷三本清沈德潛撰、
 韓詩集註、十二卷五本清顧嗣立撰、
 篋中集、一卷一本唐元結撰、
 河嶽英靈集、三卷二本唐殷璠撰、
 御覽詩、一卷一本唐令狐楚撰、
 中興感氣集、二卷一本唐高仲武撰、
 極玄集、二卷一本唐姚合撰、
 國秀集、三卷一本唐芮挺章撰、
 才調集、十卷五本唐韋莊撰、
 又玄集、二卷一本同上、
 搜玉小集、一卷一本不載撰者、
 玉臺新詠、十卷二本陳徐陵撰、
 唐百家詩選、廿卷宋王安石撰、

唐人萬首絕句、九十一卷十六本宋洪邁撰、
 崇古文訣、三十五卷八本宋樓昉撰、
 聲畫集、八卷四本宋孫紹遠撰、
 古文關鍵、二卷四本宋呂祖謙撰、
 唐詩衆妙集、一卷一本宋趙師秀撰、
 文章軌範真本、七卷二本宋謝枋得撰、
 宋高僧詩選前集一卷、後集三卷、續集一卷、一本宋陳起編、
 唐宋千家詩選、十二卷四本宋劉克莊編、
 唐音、十五卷元楊士弘編、顧麟批點、五本
 文選心訣一卷、元虞集撰、文章精義一卷、宋李普卿撰、一本
 風雅翼、十四卷七本元劉履撰、
 古詩選、三十二卷十一本清王士禛撰、
 唐賢三昧集、三卷三本同上、
 唐宋八大家文讀本、三十卷十六本清沈德潛撰、
 箋註三體唐詩、六卷三本清高士奇撰、
 新編濂洛風雅、九卷四本清張伯行撰、
 宋十五家詩選、十六卷清陳評編、

吟憲雜錄、五十卷十本、元陳應行編、

藏海詩話、一卷一本宋吳可撰、

放翁詩話、一卷一本宋陸游撰、

誠齋詩話、一卷一本宋楊萬里撰、

此外猶もあるべけれども、僕が聞見するものをしるしぬ、猶また宋の龔厚が周易新講義十卷、四庫全書摘要中著録無_レ之に付、彼土にて散佚致し候哉と御心附、御雕刻の思召有_レ之候由、大慶之至には候へ共、是は林天瀑先生佚存叢書中に、既に收載して彼土へも渡り、阮元が擘經室全集中にも既に提要題も御座候間、新に御見出しには相成申間敷候、佚存叢書目錄は、顧修が彙刻書目中には第二集まで載せ有_レ之候得共、餘に及ばず、乍_レ序残らず附載して入_二貴覽_一候、

佚存叢書

第一集、古文孝經孔氏傳一卷、五行大義五卷、隋蕭吉撰、唐臣軌

二卷、唐武后撰、唐書要錄三卷、唐吉備真備撰、西京新記一卷、唐章述撰、唐章

詠百二十首、二卷、唐李峴撰、

諸藩藏版書目筆記卷二

尾府明倫堂明倫堂は學館の名、別に繼述館もありしが、今は明倫堂のみになりしなり。

群書治要、五十卷五十本唐魏徵撰、

李忠定集、四十四卷四十五本宋李綱撰、

二種共活字版、

帝範、四卷二本唐太宗御撰、

魏鄭公諫錄、五卷二本唐王方慶撰、

陸宣公奏議集註、廿二卷十本唐陸贄撰、府教官石川安貞集註、

今文孝經鄭註、一卷、引證一卷、合一本岡田珽之撰、

李伯紀忠義編、七卷七本府督學家田虎撰、

冢註周易、十卷五本

冢註尚書、十三卷六本

冢詩毛詩、廿卷十本

左傳杜解增註、三十卷十五本

章註國語增註、廿一卷六本以上五種冢田虎撰、

第二集、文館詞林四卷、唐許敬宗撰、唐許敬宗撰、朱子感興詩註、宋蔡泰軒撰、

易傳六卷、宋李正中撰、左氏蒙求一卷、元吳化龍撰、

第三集、唐才子傳十卷、元辛文房撰、難經集註五卷、宋王九思撰、

第四集、古本蒙求三卷、唐李紳撰、玉堂類稿廿卷、宋崔敦復撰、西垣類稿三卷、宋崔敦復撰、

第五集、周易新講義十卷、宋龔厚撰、

第六集、宋景文公集十卷、宋宋祁撰、

右は活字版にて文化中出來、全部六十本御座候、是等は我土の人第一に讀候ねば相成ざる儀に御座候へ共、七經孟子考文同様に、近を疎かにして遠を慕ひ、世の學士文人殊に依り、佚存叢書の書名も知り不申、歎敷事共に御座候、僕事も海外に全存無_レ之書物十三四部取集置候に付、追ては編録可_レ仕と奉_レ存候に付、天瀑先生御集置の叢書も、御承知被_二成置_一候様に記し申候、

謹て按るに、尾府文學の盛なる事東海に冠たり、安永中儒臣に命じて群書治要を校正し、活版として三百部を刷し、十部をもつて清國へ贈らしむ、此書宋時に既に散佚して彼土の人知るものなし、幸に我土に存して後世に顯る、斯文の大幸とも謂ふべし、整版になくとも、我土文運の隆盛なること海外の人知る所なり、近頃清人儀徴の阮元が擘經室全集中、極めて治要提要を記して口を極め賞揚せり、我土の人知らずんばあるべからず、此外府の藏版猶多く、今一一に訪搜に遑あらざれば、僕が聞見せるものを諸藩の首として記しぬ、

紀府學習館

倭名類聚抄、廿卷十本源順撰、府儒官那波船校刊、

活所遺稿、十卷七本那波船撰、

活所備明錄、三十卷十五本同上、

木庵集、七卷三本那波守之撰、

膾餘雜錄、五卷五本永田道夢撰、

右の四種の書は近世のごとく、學舎等の名目など有て藏版と申にはなけれども、全く府にて雕刻ありしゆゑ、各家の人々著述を今に傳ふことを得たり、何れ□□人々へ賜りしとなん、其舉いづれも寛文延寶の頃なり、

偽書説、三卷三本

孝經集傳、一卷一本

論語集解補解、十卷四本

新定三禮圖考、四卷四本以上山本維孝撰

九經補韻、一卷一本宋楊伯嶠撰、川合襄平校刊、

南紀風雅集、三卷三本伊藤弘朝編、

校正貞觀政要、十卷十本唐吳兢撰、元戈直註、

我土貞觀政要の鏤版は、慶長中三要長老が校正本、寛文中京師の坊刻本、近時の小田原家校正およびこの版と四通なり、各本ともに慶長寛文本の誤謬を削正して頗る精核を極む、されども同種幾版もあらんよりは、すべて藏版あらば別種に致したし、

既に頃昌平學にて清の王引之が經傳釋詞を雕刻ありしに、處士某がまた別に藏版にせしとなり、僕がこの編を草せしは、全く諸藩にて追々その舉あるに、重複をなし給はゞ勞して詮なければ、既にありしものは除きて御取掛りあるやうにと、婆心にくそ思ひ奉るなれ、

因に云ふ、紀府は伊藤蘭嶋、祇園南海、崖熊野、川合春川、柳原篁洲、高瀬松庵等をはじめとして名儒尤も多ければ、藩臣の藏版還て府よりも多しと、其儒臣遠藤克輔僕に語りぬ、僕また諸藩陪臣藏書目筆記を編著せんとするは是が爲なり、

水府彰考館

大日本史、二百五十卷

扶桑拾葉集、三十卷三十五本

續扶桑拾葉集、十三卷十三本

花押叢、七卷

續花押叢、七卷

參考源平盛衰記、五十卷

參考保元物語、三卷

參考平治物語、三卷

參考太平記、四十一卷

舜水文集、三十卷廿七本

朱氏談綺、八卷四本

常山文集、廿五卷

常山詠草、五卷

西山隨筆、二卷

西山奇方、八卷

草露貫珠廿二卷、拾遺一卷、廿本

三國筆海全書、廿五卷廿本路薩眞幸撰、

救民妙藥集、二卷一本

新編鎌倉志、九卷八本

校正都氏文集、三卷

校正難太平記、二卷

校正惺窩文集、十卷

校正洪武正韻

校正古篆彙選

右廿四種、義公の獨斷より出で、諸臣を選択して各の器材を見て分校せしむ、公宗室の貴を屈して、謙遜して儒士を優待したまふ、その嘉言善行は安積覺が義公行實、立原萬が西山公遺事に載せられたれば、言ふに及ばず、僕先に萬が男任と情交深くして、此盛事を知りて是をしるす、

福井藩明善堂

垣庵文集、十卷五本

四書通辨、十九卷八本伊藤元基撰、

四書略圖解、二卷二本大原武治撰、

右の三種は、いづれも元祿中にありて藩の學舎にて雕刻なりしなり、今は傳流極めて少なし、

五經傍訓、十一卷十一本

孔雀樓筆記、四卷四本

孔雀樓文集、八卷五本以上三種清田絢撰

邀翠館集、十二卷四本

以上二種
伊藤繪撰、

先年藩の儒官高野惣左衛門は僕熟交之所に候處、昔時の伊藤垣庵、其子龍洲等が、藩に禮遇せられし話説をきくに、垣庵儒職にして祿秩八百石二十人扶持にて、寛文のはじめ光通君の時に聘せられ、その男平庵早世せしゆゑに、門人播磨清田宜齋を養子として遺祿を襲はしむ、宜齋後に龍洲と號す、龍洲が男は縉なり、二男絢は父の舊姓にして清田を稱す、二人ともに藩に仕ふ事年久しく、侍讀の勤勞ありしゆゑ、其著述を多く藩より彫刻の失費を賜りて上木になりける、當時は儒士を優待して文學を崇奉あること、諸藩とも一般の風習なり、されどももの少ければ貴く、多ければ賤きは自然の勢ひにして、享保よりのちは文學盛にひらけ、諸藩ともに侍讀教授講官等の差別なくとも、儒員を置ざるはなく、還て著述を彫刻し、失費を賜はる

やうの事すくなし、また儒士一史だも精通せざれば、古今を博綜して顧問備訪の任にあたるべき人物もなく、漢土の事歴を研究する人は、我土の典故を知らず、我土の典故を講習するとも、慶元已降の武家規定式目法令等をしるものなく、遂に儒士は世の無用のものなりと、世俗心得候様になりしは、儒士寡聞固陋の人多くして、有用正大時務得失に志す人なければなり、儒士より起家して三千石に至りしは、土佐の小倉三省、備前の熊澤蕃山のみなれども、兩人ともに登用の後家老に累遷せられてよりなれば、さもあるべく、垣庵は新に八百石二十口となりしは、當時の奇遇ともいふべく、また當時藩君の明敏にありし御方にて、能も果斷ありしなり、今時は貴紳にかくのごとき人あるをきかず、

汲古閣本孝經正義、九卷三本
汲古閣本論語正義、廿卷十本

周易正義校勘記附、十一卷九本

福井家にて、已前に十三經註疏翻刻ありたきとして、治好君法諡威
徳院殿の時、儒官高野惣左衛門より僕に問合せありて、既にその擧あるべき所なりしが、世上事故多くしてその事ならず、其後に先君の遺意なりとて、彌以て彫刻あるべしとて、既に訓點等の事に及びしに、或人藩へ申せしは、下總國の土豪關某が汲古閣版十三經を藏版に起せしが、僅に孝經論語のみ出來して、詩經を半分彫刻する比に某歿して果さずして、跡を續で刻する人もなく、其儘にしてあれば、かの彫り掛の板木を買得て繼刻し給はゞ、いと便利にあるべしと勧めければ、有司どもその説に隨ひ、右のほり掛の板木を購ひ、詩經刻足しにかゝりける、其比藩の記室岡本慎助と云ふものは、惣左衛門が門人なりしが、僕が惣左衛門と熟交なるをもつて、惣左衛門歿後は僕と往來して經史を講習して、僕が疎妄を納れ、弟子同

様に教督を受く、依てひそかに註疏繼刻の事をかたり、身も右の掛り役に命せられしとなり、僕これなきをて慎助へ告しは、大藩にて註疏全部の彫刻は、古人の所謂閣下一朝の變を廢するに過ず、さすれば他人のほり掛を繼刻あらんよりは、とてもの事校勘記附の方しかるべしと勧めければ、僕が言を藩有司へ告しに、有司また儒官花木某などと評議するに、某が申せしよし、校勘記附頭書、か
記附は十七
史也とは東條生心得違ひなるべしとて、僕が言を然りとせず、僕また慎助に告ぐ、弘簡録は十七史へ附て、世上概してかうかん記附と唱ふれども、聲同して文字異也、されば藩の儒官たりし人、惣左衛門歿して後は、阮元が校勘記を見し人もなしと覺ゆとて、校勘記周易一部出して某に見せしむ、それより初て校勘記附で彫刻あるべきに定まりけるとなり、その後慎助も歿し、藩にも事故多くして其儘にてあり、大抵世の儒士と稱する人、大家

名士はさておき、校勘記、弘簡記をも一見せずして人を議すること多し、吾黨の士つとめて博覽宏識を事とすべし、寡聞固陋狹隘淺見に落ることなかれ、

雲藩明教館

- 輔儲編、三卷三本 宇惠撰、
- 古文矩一卷、文變一卷、合一本
- 四家雋、十二卷六本 二種物茂卿撰、宇惠校刊
- 荀子遺乘、三卷三本
- 世說新語補考、二卷二本
- 同續考、一卷一本
- 說苑考、二卷二本 三種桃井源藏撰
- 出雲天隆公壽藏記、一卷一本 平信敏撰、
- 鳩谷集初稿、七卷三本 同上、
- 古今名物類前集五卷、後集七卷、續集二卷、拾遺四卷、合十八本 陶齋尚古老人撰、
- 校定延喜式、五十卷五十本 藤原時平等奉敕撰、

尙古老人は、藩主不昧侯の別號なり、侯好古の癖ありて殊に茶禮を精究し給ふは世の知る所なり、今時また南北史の雕刻ありと聞く、盛舉といふべし、

會津藩日新館

- 玉山講義附錄、三卷三本
 - 三子傳心錄、三卷三本
 - 三程治教錄、二卷
 - 右の三種は、藩の始祖正之君の編述し給ふ所なり、侯山崎闇齋を尊信ありて、一藩その學風にむかふ、委しくは土津靈神行狀、墨水一滴等に見えたり、
 - 大學辨斷、一卷一本
 - 會津孝子傳、五卷 二種其儒官山崎泉撰
 - 本朝通紀前編廿五卷、後篇三十卷、合二十四本 長井定宗撰
- 定宗は會津城下の處士なり、歳十七のとき綱目通鑑を讀終りて、風と我土の編年體の史なきを知りて、甲越戰爭記を讀し時、天文七年戊戌八月武田晴信逐其父信虎而自立すと筆記せしが、是よりして野乘數部を研究して、十九歳のとき全部五十卷全く成しぬ、當時の藩君其志を賞したまひて、失費を下し全部を雕刻せしむ、是等も近世の藏版と唱ふるが如くならざれども、全く藩の隆にて

鐵版出來せり、後に板木平安の書肆へ賜りしなり、定宗わづかに歳二十四歳にして早逝す、其年月を詳にせず、享保中の篠崎東海が隨筆に見えたり、今時の人定宗が少壯のときの著述なるを知らずして、文辭の錯置事實の異同を指摘すれども、少壯にして是等の大手筆あるは、一豪傑の士と謂ふべし、

- 書經正文、二卷二本
- 詩經正文、二卷二本
- 論語正文、二卷二本
- 孔傳孝經、一卷一本 以上猪維嶽校刊、
- 本詩詩、一卷一本 唐孟榮撰、同人校刊、
- 詩經世本古義、廿八卷廿八本 明何楷撰、古屋爾校刊、
- 書纂言、四卷 元吳澄撰、
- 二種いづれも活字版、纂言全くならず、堯舜典および洪範のみ今もまゝ坊間に希に有、當時の君侯には古屋重次郎を信用ありしゆゑ、重次郎がすゝめによりて雕刻あるべきところなりしが、整版は追ての事として、活字にて出來せしなり、
- 童子訓、二卷二本

藩主容頌君の著述にして、一藩の子弟へ教誨し給ふとして雕刻ありしなり、白河樂翁侯の序文を載す、この時會津風土記を出來して、すでに獻備にもなりしかば、續て雕刻有るべきに、侯逝したまひてならずと、この外なをも有るべし、僕が耳目のおよぶ所のみを記す、

高松藩講道館

- 嶮州遺稿、七卷三本
- 元明史略、三卷三本
- 宮詞百首、一卷一本
- 和漢年鑑、一卷一本 以上後藤世鈞撰、
- 訓點五經、十一卷十一本
- 訓點四書章句集註、十九卷十本
- 訓點小學句讀集註、六卷四本
- 右は元明史略より六種、講道館督學後藤芝山が著述校刊なり、芝山名世鈞、字守中、彌兵衛と稱す、林鳳岡の男榴岡の門人なり、四書五經の訓點は、三

百年來薩摩の僧桂庵が四書素讀本六卷、日向の僧文之が玄昌和點本章句集註十卷、藤惺窩が訓點十卷、林羅山が道春點本四書十卷、五經十一卷等、慶長中の刻本をはじめとして、其後菅玄同が得庵の四書點本十卷、山崎嘉聞齋が四書點本十卷、俗に嘉點と唱、五經十一卷、毛利貞齋、中村惕齋、貝原益軒、俗に口安昌、宇都宮遯庵、大高芝山等、各四書五經の訓點あり、四書のみ訓點は、三宅道乙本、淺香意林庵本、熊谷了庵本、鶴飼石齋本、中島正佐本、山本復齋本、八尾竹林本、新井白峨本、中川伯仙本、林家改點本などにいたるまで數十家、その外半紙本、巾箱本、大字本、片假名附本、假名附本、無點本、九行十六字本、九行十七字本、九行十八字本、十行本など唱へて、書肆の品と諸家藏版と殆ど百種にも及ぶべきは、慶元已降休明の運にして、いと有がたき事なり、そのうちに後藤點と唱へて芝山が訓點のみ海内に行はれて、其餘の衆家の本匹敵するこ

とあたはず、後藤點本は寛政四年壬子の四月上梓になりて、文政三年庚辰再刻し、天保六年乙未に三刻し、同十一年庚子に四刻し、わづかに五十年の内、度々雕刻するにいたる、今はこの版も書肆へ賜りしゆる坊刻となりけれども、その初版は全く講道館にて藏版となりし也、

赤石藩

學範、一卷一本

蛻巖集、十卷六本

蛻巖後集、十卷六本 以上三種 梁邦美撰

守山藩觀濤閣

論語徵集覽、廿一卷廿一本

發字便蒙解、二卷一本

歷朝詩纂、廿卷十本、後集、廿卷十本

菊經、二卷二本

菊經解、五卷三本 以上藩主 黃龍侯撰

劉向新序、十卷五本

古學範、二卷二本
 金華稿刪、十卷六本 以上平 玄中撰
 戰國策考註、五卷五本
 尺牘彙材、三卷三本
 大東詩雋、七卷二本
 唐詩選箋註、七卷七本
 唐詩選餘言、二卷二本
 絕句解辨書、三卷三本
 求古印譜、二卷一本 以上戶崎 允明撰
 守山の黃龍侯は名頼寛、字子猛、黃龍と號し給ふ、物徂徠の學術を信用して、服部南郭、太宰春臺等の護社の諸子招致して經史を講究し、後に平賀金華を聘して師範とし、其教誨をいたたまひて、時習の李王の修辭に長じ、宗室の貴を屈して諸名士と應接し、金華歿後にみづからその遺詩文を編輯したまひて雕刻させ、毎卷に門人守山世子源頼寛子猛編輯と題したまふ、その事西山公が朱舜水の

文集を雕刻ありしとき、毎卷へ門人權中納言從三位西山源光圀と題したまふ例なり、我土の貴紳は、孟子の所謂おしへを受るを臣とするを好むもの多くして、挹遜謙讓して文學の徒を尊信するを知らず、文學の士も只に利祿のみに沈溺して、道義をもつて王侯を貌する人なく、享保より寛延の頃までは、處士韋帶の士市井に僑居して口を文學に糊するものあれば、必ずしも侯家の招致ありて、その人の學術操行により、十人が十人一樣といふにはあらねども、王侯貴紳本供にて儒士の宅へ訪尋したまふことは常にして、さして珍らしくも世上のもの思はざりしが、寶曆明和のころよりして、その風習自然とおとろへやみたり、守山黃龍公金華を聘したまふに、本供にて駒込の金華が宅へいたり、束修の禮を備へ、又老臣戸崎允明等をして贊を其門に執らしむなど、實に千古の美談と謂ふべし、

諸藩藏版書目筆記卷之三

賀藩明倫堂

恭靖先生文集、十四卷十本木下貞幹撰、男寅亮校刊、
 今時の再刻本は錦里遺稿と題す、
 本草綱目五十二卷、同圖三卷、合四十本明李時珍撰、稻宣義校刊、
 結髦居別録、八卷四本稻宣義撰、
 韓非子全書解詁、廿卷十本津田鳳圃撰、
 四書章句集註、十九卷十二本銅活字版、
 四書本義滙參、四十五卷廿五本清王步青撰、
 按るに、順庵が恭靖文集は、原版は天明戊申の脱年京師にて焼失す、その後順庵が子孫寛政中に再刻せしもの、柴栗山が序を載せしもの今行はる、原版は寅亮が願にて金澤にて雕刻し、其失費は侯より賜り、侯家の藏版にて出来せしなり、寅亮字汝弼、號菊潭、俗稱平三郎、幕府に仕へ奉る、

因に云、先頃藩の儒臣大島忠藏が話に、金澤にて萬曆版の廿一史を雕刻あるべき積りなりしが、事故ありて成らず、また鄭樵が通志をも翻刻あるべきもくろみなりしが、これもならずと、誠に惜むべし、
 謹て按るに、稻若水が校正本草綱目、結髦居別録は、みな其後書肆へ下されしなり、諸藩此例多し、一々にしるさず、

薩藩

萬國輿地全圖、一帖藩主英翁侯使儒臣赤崎彦禮、石塚崔高二人校刻之、
 南山俗語考十二卷、附録二卷、六本英翁侯撰、
 鳥名便覽、一卷英翁侯、
 成形圖説、百卷藩醫曾榮撰、廿卷廿本刊成、餘未成、
 本草參疏、三十卷十五本同上撰、
 質問本草、八卷四本琉球吳氏撰、同上校刊、
 仰望録四卷、附録二卷曾榮撰、
 仰望節録、一卷

仙臺藩養賢堂

小學白文、四卷二本
 四書章句集註、十九卷十本
 五經正文、十一卷十一本
 韻府一隅、十六卷十本清顏懋竑撰、

先比その儒臣大島精一郎が話に、藩の先儒佐久間洞巖が奥羽觀跡聞老志、蘆東山が無刑録など、既に侯家の藏版と成るべき事なりしが、遂に果さずして罷ぬと、

熊本藩時習館

浪江入楚、五十四卷五十四本中院通勝卿撰、細川幽齋校正、
 新古今集鈔、廿卷四本
 伊勢物語闕疑抄、五卷五本
 類字和歌集、一名名所類聚、四卷四本以上三種、幽齋侯撰、
 崔顥詩集、二卷一本熊谷維校刻、
 常建詩集、二卷一本同上、
 震庵遺稿、十卷十本戴弘篤撰、

樂津集、廿四卷廿四本戴慈編輯、

崇孟、二卷一本同人撰、
 孤山遺稿、十六卷同上、
 韓詩外傳、十卷五本秋山儀校刊、
 玉山詩集、十卷三本同上、

新古今集鈔より類字和歌集までの三種、藩の始祖名は藤孝、號幽齋、後に玄旨と稱し、從二位の著述なり、其事法印に敘せらる、和漢の典詁に博達の人、歷は諸書に見えたり、浪江入楚は活字版にて、傳本極めて希なり、世上多くは寫本にて行はる、已上の四種は當時は全く藏版なりしが、餘の三種と共に書肆へ賜りしなるべし、今時は其藩中の者すら、始祖の著述を知し人少し、

福岡藩

四書章句集註、十九卷十本貝原篤信校刻、
 五經正文訓點、十一卷十一本同上、世に貝原本と唱これなり、
 小學備考、八卷八本貝原篤信撰、
 近思錄備考、八卷八本同上、

朱子文範、五卷五本同上、
 大和本草廿五卷、和名二卷、合廿本同上、
 孝經便蒙釋義三卷、附錄二卷、合四本竹田定直撰、
 筑前孝民傳五卷、後篇五卷、十本同上、
 名義備考、八卷四本村上緯撰、
 清三朝事略、二卷一本同上、

右はいづれも書肆へ版を賜りしとなり、今時にありてはその初は藏版なりしを知るものなし。

岡山藩 學舎の號なし、烈侯のとき熊澤了芥信用にて學舎造營ありしが、我土にては武備を専らとすれば文字は次なりとて、遂に講學所とのみ唱ふ、近時明倫堂と學舎唱ふよし、されども實否を詳にせず。

鳩巢文集、十卷十本室直清撰、
 鳩巢文集後篇、十五卷十五本同上、
 鳩巢文集補遺、六卷六本同上、以上共譯原實校刊、
 毛詩鄭箋、廿卷五本井通熙校刊、
 周易古註、十卷五本同上、
 本朝軍器補正、十二卷十二本土肥經平撰、
 常山樓筆餘、五卷三本湯淺元禎撰、

常山樓文集、十卷五本同上、
 右も其後版本は書肆へ賜しとなり。

長藩明倫館

長門戊辰問槎、四卷四本山縣孝孺等撰、
 長門癸申問槎二卷、後篇二卷四本瀧長愷等撰、
 周南文集、十卷六本山縣孝孺撰、
 鶴臺遺稿、十二卷八本瀧長愷撰、
 華陽文集、十二卷六本山根清撰、
 東郊文集、十卷五本和智棟卿撰、
 畫禪室隨筆、五卷五本明董其昌撰、
 事斯語三卷、附錄二卷
 唐詩趣、十六卷四本小倉實廉撰、
 阿藩 學館の號なし、學問所と唱ふ、岡山に同じ。
 周易本義筆記十六卷、附錄讀易要領四卷、合九本
 周易啓蒙筆記、二卷四本
 書集傳筆記十二卷、附錄讀書要領三卷、合七本
 詩集傳筆記十六卷、附錄讀詩要領四卷、合九本

四書鈔說、十九卷十二本
 近思錄鈔、十四卷八本活字版、
 孝經刊誤集解、二卷一本同上、
 四書訓點、十卷十本
 五經訓點、十一卷十一本
 小學訓點、二本 以上十一種中村欽撰
 此訓點三種は、世の所謂惕齋點これ也、
 通鑑綱目前編、廿五卷廿本明南軒撰、
 通鑑綱目正編、五十九卷六十本宋朱子撰、
 通鑑綱目續編、二十七卷廿本明商輅、萬安等撰、
 明紀綱目、廿卷十本清張廷玉撰、
 右の二種坊間にて阿波版と唱へて、三宅道乙が校刻せる前正續三篇百六卷本と、鶴飼金平が校刻せる三編百十本の兩種に分て、今盛に世に行はる、蓋し朱文公綱目へ正編の字を加へしは、明世より始り、前編續編の繼述ありしによりて、後人みだりに加へしなり、この版は明の陳仁錫が校閱本にて、宋

の尹起莘が綱目發明、劉有益が綱目書法、元の汪克寛が綱目考異、王幼學が綱目集覽、徐昭文が綱目考證、明の陳濟が綱目正誤、馮智舒が綱目質實の七種を各件の下へ挿入て、評論を専らとせしものなり、されども七種の各家見る所なきにもあらざれども、返て原旨に違ふ事も少なからず、明世より前修の成書を剽竊して一書となすこと、唐順之が綱鑑會編、葉向高が玉堂鑑綱、王世貞が綱鑑會纂、袁黃が了凡綱鑑、蔡方炳が綱鑑彙編のごとき俗書類る多く、清にいたりても權楚材が綱鑑易知錄、姚培謙が通鑑學要など大同小異にして、均しく明世の餘流なり、我土の人此等の鈔略本のみを讀むによりて、原書の作者を知ることなきはいと惜むべし、近時林天瀑先生の建議にて、學舎にて文公綱目五十九卷のみを官刻となり、發明はじめ刪判して載せず、始めて文公の眞面目を見るが如し、

津藩造士館

唐詩句解、十三卷十三本江忠貞撰、

南溟詩集、七卷三本江忠貞撰、

荀子考註、一卷一本江忠貞撰、

右はいづれも版木書肆へ賜る、

聽訟彙案、三卷三本津坂孝純撰、(頭書論語、孝經)

絶句類選、八卷八本同上、

拙堂文話、八卷四本齋藤謙撰、

續拙堂文話、八卷四本同上、

津藩にては文學の隆盛なること、近世諸藩の及ばざる所なり、造士館の諸生常に百人の餘、督學教授より助教典籍の諸員まで、備はらざる事なくして、學田一萬石を附置て、文學は更なり、弓馬劍鎗の武技に至るまで、みな悉く此に習演して、その各師長ありと、近時資治通鑑の翻刻はじまりけれども、雕刻いまだ半にいたらず、以上の七種は造士館にて出費して出來すれども、さして侯家の藏版とは稱

しがたし、侯家の藏版温公通鑑のみなりと、その儒官鹽田又之丞余に語れり、

秋田藩日知館

較定今文孝經、一卷一本山本信有撰、

經義撮說、一卷一本同上、

論語古傳、廿一卷廿本小林重應撰、

藝苑日鈔、十六卷十六本村瀬之熙撰、

如不及齋別號錄、廿四卷廿四本藩主泰山侯自撰、

秋田藩は先世山崎闇齋の學派にて、學舎を明道館と號し、小學四書五經等の訓點本の版ありしが、明和壬辰の大火に焼失して知人もなし、天明の末藩主村瀬栲亭は、山本北山を信用ありて學風一變せり、しかれども一藩文學今に甚だ盛にして、藩士に著述する人多し、藏版も數種あり、近時の大窪詩佛、奥山榕齋、岡部菊涯等その巨魁なり、

米澤藩興讓館

松島紀行、一卷一本

つら／＼ぶみ、一卷一本

嚶鳴館遺稿十卷、附録一卷、合十本已上紀徳民撰、

米澤の鷹山侯細井平洲を信用にて、一藩學にむかふ事古今に比ひなし、侯己を卑うして平洲を優待し給うて、歿後に猶また遺稿附録中へ自撰の碑文を載せて、事歴を世に示したまふ、いと奥ゆかし、今時の諸侯になき所なり、

大聖寺藩廣徳館

東渠詩集、一卷菅原利精撰、

瓶山原學編、一卷三浦衛興撰、

開窓自適、一卷同上、

弘前藩弘道館

武教要録、一卷二本

武教餘録、廿卷十本

中朝事實、四卷二本以上山鹿義矩撰、

質疑一卷、瑣語二卷、合二本

非物編、十一卷七本以上五井純禎撰、

蘭洲遺稿、十卷六本山崎敬撰、

弘前にては山鹿素行信用にて、諸書を雕刻あるべき所なりしが、素行赤穂淺野家へ配せられしゆゑ事やみぬ、世に素行の著述多く寫本にて行はれ、聖教要録毀版となりしより、傳本も極めて稀なり、右三書の版は今に存すれども摺事なく、弘前の學舎にはありと、義矩が六世の孫山鹿八郎右衛門余が爲に語れり、

岡藩鳳鳴閣

仄韻選、二卷一本源久貞撰、

平戸藩維新館

周易釋解、十四卷十二本

書經釋解、十三卷六本

詩經釋解、十五卷十一本

儀禮釋解、十六卷八本

四書釋解、廿六卷十九本

名疇、六卷六本

虛字證解、十二卷十二本以上皆川懸撰、
桃花洞遺稿、二卷二本舊本題平戸文學
平石榮子春撰、
鯨志、二卷一本

荀子箋釋廿卷、附錄二卷、十本清盧文昭抱經堂本、
朝川鼎校刊、
韓子誠誤、二卷二本清順廣折撰、

大洲藩

韓魏公別錄、三卷二本宋王巖撰、
安陽全集、五十卷廿五本宋韓琦撰、

徳山藩

鹽鐵論、十二卷六本漢倪寬撰、伊
藤長胤校刊、
徳山吟稿、四卷二本徳山侯毛利元次撰、
徳山雜吟、二卷一本同上、

棲息堂筆記、二卷

大村藩

文淵詩源
韓子識語
紀效新書

蓮池藩

小篆論語、十卷五本
小篆千字文、二卷二本以上皆伏山校刊、

詩經毛傳補義、廿卷十二本

孟子解、十四卷七本

孔子家語補註、十卷五本

助字譯通、三卷三本以上岡白駒撰、

按るに、元文寛保のころは、諸藩とも文學の士を推
崇ありて、其著述または校正の書を藏版に起した
まふ事、世間一樣の風習なり、鍋島四家のうち外
外に藏版あるを聞ざりしに、特に當時の蓮池侯、京
都の處士岡太仲を信用ありて、賓師の禮をもつて
優待し、その廢康を贈りて衣食を裨け、または著
述に入用の書籍を購ふべしとて、毎歳に金五十兩
賜りて意を文藝に専ららしむと、その事瀧洲漫
筆に見えたり、今時の貴遊は文學を奉崇するの名
あるとも、これらの舉あるを聞かず、さすれば其

人あるも其人なきか、實に歎かほし、

臼杵藩

芙蓉紀行一卷、附錄一卷、禹稷合祀記一卷、一本
豊城集、十三卷四本以上莊允益撰、

新發田藩道學堂

四書章句集註、十九卷十四本山崎嘉訓點、
四書或問、三十九卷十九本同上、活版、

中庸輯略、二卷一本同上、

論孟精義、三十四卷廿六本同上、

儀禮經傳通解三十七卷、續二十九卷、合二十四本同上、

朱子書鈔節要、廿卷八本朝鮮李滉撰、黒
岩慈庵校刊、

通鑑綱目鈔略、廿八卷十四本黒岩慈庵撰、

按るに、寺島宗意が和版書籍考に云く、山崎嘉が訓
點四書は寛文年中に開版す、朱子の註解をこまか
に吟味し諸本の點をたゞす、或問輯略を附す、朱
子の本意を立るなり、故に嘉點本には大學中庸章
句に朱子の跋文あり、諸本にはなしと、

今此語を考ふれば、新發田に雕刻ありしは享保中

の事なれば、この本を再刻ありしなるべし、和版書
籍考十

卷、其刻は元祿十五年
三月になりしなり、世にこれを嘉點と唱ふ、或問と精

義は焼失して傳流甚だ稀なり、寛政中大學或問、中

庸輯略のみは再刻ありて原版は絶てなしと、其藩

醫佐藤自庵余に語れり、

津和野藩

日本紙譜、二卷一本不題撰者、

天剛地殺圖、二卷二本清陳章侯原本、
多胡眞祇摹刻、

赤穂藩

書疑、九卷三本宋王柏撰、

東坡文鈔、四卷二本赤松勳校刊、

太史華句、八卷四本明凌穉隆撰、

左國腴詞、八卷四本

真本古文孝經孔氏傳、一卷一本赤松鴻撰、

靜志亭集正編、十卷五本同上、

赤城風雅集、七卷三本赤松勳撰、

蘭室詩文集、廿卷十二本同上、
魯齋詩稿、七卷三本赤松繪撰、

佐伯藩爾雅樓

正半版論語集解、十卷二本

眞本墨子全書、十五卷八本以上二種活字版

四溟詩話、四卷二本明謝榛撰、

讀書敏求記、四卷四本清錢曾撰、

閱藏知津、三十卷十五本明宗密撰、

法華經通義、十六卷八本同上、

五種算經、孫子算經一卷、五曹算經五卷、劉徽海島算經一卷、甄鸞五經算經二卷、夏侯陽算經三卷、十二卷六本清鮑廷博校本、

壺邱詩稿、七卷四本

壺邱詩二稿、九卷六本

壺邱詩三稿、十二卷七本以上三種藤襲撰、

佐伯侯の庶公子名駿、字公錦、號扶搖、學をこのみ業を餘熊耳にうけて、時習の護園派の詩文に長じ、ひろく一時の名士と應接したまひて、好文の名藝

園に傳播す、諸家の集中に扶搖公子と稱すこれなり、この公子の好尚よりして一藩學にむかひ、高丘君、高標君の兩世博覽をよろこびたまひて、珍卷奇冊一時に輻湊して、藏書の富海内に冠たり、所謂紅粟齋十萬卷と都下のものいひ傳ふ、文政中にいたりて時君の願ひによりて、先代の所藏幕府へ獻納したまふに、その餘多し、嘗て爾雅樓書目十二卷を一見せしが、韃靼以降大藩巨鎮といへども、爾雅樓の藏に企て及ぶべからず、故に藏版になりしものも尋常の品種にあらず、惜哉讀書敏求記は文化丙寅の大火に焼失しぬ、その頃高標君の自編清風といふ詩集二十卷、剗刷半分成りてありしが、これも版木焼失して其事やみたりとなむ、

鳥取支藩慶遠樓

護法漫筆、二卷一本二版あり、一は活字版、一は整版點附、卷首題「不輕居士著」

武藏風土記考證、四卷二本同上、

法華經新點七卷、考異一卷、合八本同上、

玉露童女行狀一卷、六歲夢一卷、合一本服部通撰、

鳥取支藩冠山君は名定常、字不輕居士と號し、總殿頭と稱したまふ、學を好んで蕉中大典和尙に參學して、内外の典籍に博覽なり、その人と爲り摠遜謙虛にして士に降り、一時の逢掖文人交りを納れざるものなし、荻野梅塢、佐藤愛翁、弘福の鶴峯禪師および余、虚左の遇を蒙り、つねに往來して經史を討論す、三子は道德文章をもつて一世に山斗たり、余は三子と選を異にして、その著述成ごとに校正の任に當られ、一書ごとに示したまはらざるはなし、特に皇朝藝文志二十卷、元史藝文志二卷、近世藝文志年表十卷、右の三書は余とともに贊輯になりて、上木もあるべきに、文政己丑三月の火災に罹りてその事罷ぬ、侯天保四年癸巳七月七日春秋六十七歳にして逝し給ふ、侯著述編纂する所の目四十八種三百八十八卷あり、親く余が目撃する所なり、侯指館の後甲午の火災にて遺書

多く散逸して、其書目さへ知るべからず、大祥の後嗣君侯の碑銘を建立あるべしとて、一文士に撰文を請はんとして、著述編纂の詳なるを知るを得ず、幸に余が侯と二十餘年の應接に舊しく、校正の任に預りしを以て、其臣、を以て是を訪はしむ、余向に近世名家著述目録の編著ありて、僕の在世の時候と商推して詳かに其目を記せし故、録し上りぬ、をしや侯今の世に在さば、難し有文運の盛りなるを益よろこび給ふべし、今諸藩書目を收載するによりて、知遇のむかしを感じて其事記しぬ、

黒羽藩

日本書紀校本、三十卷十五本

日本書紀神武卷假名附、二卷二本

武門要鑑鈔、五卷

機織彙編、五卷

感響録、三卷大關増業撰、

園部藩

子夏易傳、十一卷六本

大義覺迷錄、三卷二本清高宗御撰、活字版、二種小林珠淵校刊、

仁正寺藩

皞齋詩稿、四卷二本木口簡撰、

學庸增註、二卷二本

章註國語訂正、二卷一本

唐詩選要解、七卷五本

唐詩故事、五卷三本以上岡島順撰、

古尺牘十二卷、續十二卷、合八本明屠隆編、岡島順校刊、

飲肥藩

如蘭集

以上廿六家

諸藩藏版書目筆記卷之四

彦根藩弘道館

逸周書、十卷三本一名汲冢周書、未知撰者、晉孔晁註、

白石道人詩集、二卷一本宋姜夔撰、

琴所稿刪、三卷一本澤村維顯撰、

襄園集十卷、後篇十卷、遺編十二卷、合二十本野公撰、

草廬詩集十卷、二篇十卷、三編十卷、四編十卷、五編十卷、六編十卷、七編十卷、八篇十卷、合二十四本龍公撰、

草廬文集十卷、尺牘五卷、合七本同上、

凝煙含詠藻、二卷二本村田泰足撰、

疑煙含詠藻、二卷二本村田泰足撰、

姫路藩好古堂

四書便講、十卷六本佐藤直方撰、舊本尾題三原橋藏梓、

大學全蒙釋言一卷、孟子盡心口義一卷、合一本同上、

蘭齋遺稿六卷、一日百首詩稿一卷、合六本舊本題三原橋文學藤仲撰、

國語略說、五卷五本關脩齡撰、

松山藩明教館

聿修館遺稿、四卷一本藩主定通君詩集也、

桑名藩立教館

求言錄一卷、附錄求龍說一卷、合一本活字版、舊本通雅、五十二卷廿七本明方以智撰、

山谷題跋、八卷四本宋黃庭堅撰、廣瀨典校刊、

獨看和歌集、十二卷十二本

集古十種、四十二卷四十二本

花月草紙、八卷四本以上三種樂翁侯撰、

桑名の儒臣廣瀨臺八は柴栗山の門人なり、余柴碧

海と交驩してその人となりを知り、遂にこれと應

接する事わづかに三次、嘗て其著す所の夢遊編一

卷、蒙齋小稿二卷を持して余におくり、談通雅の

ことに及ぶ、樂翁侯には方以智が博達を信じたま

ひて、物理小識をも翻刻あるべき所なりしが、書

肆須原屋伊八にて雕りかゝりしと聞給ひて、事や

みしとなり、

國策考註、六卷六本同上、

姫路城隍郡二十四封内孝廉傳、二卷首題白鷺文人著、按る末寛政十二年四月稿成、

宋明道本國語二十一卷、附錄六卷、合八本葛西實校刊、

陶說、六卷六本清朱琰撰、同上校刊、

通俗唐詩解、二卷二本葛西實撰、

清三朝實錄探要、十六卷十六本村山緯撰、

神令、二卷一本一條兼長公撰、

詩緝、三十六卷宋嚴粲撰、是は今度雕刻はじまりし本數未だ知るべからず、

姫路藩の藏版猶もあるべきに、未だ聞見せず、先年

葛西健藏が話に、白鷺侯名忠道、字恕誨、白鷺と

號す、性質明敏にして學をこのみ、佩文韻府か淵

鑑類函の二書を翻刻あるべきの意ありしが、失費

容易ならざるを以て成らず、能く高貴を屈して儒

士を優待し、一藩むかしより山崎派の學風にて、偏

僻の事多かりしを、關永一郎を尊信ありて文學大

に聞けしは、この侯より起りしとなり、

高田藩

新定儀禮圖考、一帖

松氏文章十卷、後篇十卷、合十本二種村松貞吉撰

郡山藩

晉書、百三十卷六十本唐房喬等撰、

宋書、百卷廿五本梁陳約撰、

南齊書、五十九卷十本梁蕭子顯撰、

梁書、五十六卷十本唐姚思廉等撰、

陳書、三十六卷同上、

以上六史共題志村三左衛門禎幹、荻生宗右衛門茂

卿國讀、

廣金石韻府、五卷五本清林尚榮、李根同撰、葛長校刊、

孫子國字解、十三卷十三本物茂卿撰、

詩題苑、四卷四本同上、

徂徠集廿卷、附錄一卷、合廿本同上、

四聲國字通、四卷牧田方毅撰、

柳澤家の始祖保山侯、學を好んで著述も頗るおほ

く、嘗て我土にて史漢、後漢書、三國志の外は歴史の翻刻なく、學者の史學に乏しきをおもひて、萬曆版を全部雕刻あるべしとて、寶永中より志村三左衛門、細井次郎太夫、田中省吾、荻生宗右衛門、矢野理平、安藤仁右衛門等の時儒數輩を延致して校正せしめ、晉より以降は南朝を以て正統とすれば、先は南朝より始むべしとて、志村荻生の二人に命じて右の五史を雕刻ありしなり、其後續て北朝は魏書、北齊書、周書、南北史また隋書、唐書と雕刻あるべきに、嗣侯吉里君の時に和州郡山へ轉封ありて、事故多くして成らず、故に京師の書肆松會三五郎へ右の版木賜りしと云、其後松會にて五史版焼失して、わづかに晉書のみ半分残りしに、雕刻仕足して、今も世に行はれぬ、宋書、南齊書、梁書、陳書もまゝには世に傳はり、好事家にはあれども世人知る人すくなし、今時もし歴史を翻刻するの志しあらせらるゝ諸侯あらば、保山侯

の如く全部と申さば一朝一夕の事ならざれば、其餘の一史宛翻刻あらば、いと史學の裨益となるべし、

小倉藩

辨道解弊、二卷二本石川正恆撰、

石増先生文鈔、四卷二本石川正恆、増井勝三子之集録也、

忍藩

四朝別史

中津藩

字實提要、十卷清王錫侯撰、

此書は總目一卷、提要十卷、本編四十二卷、附録七卷、總て六十卷ありて、張自烈が正字通の誤謬を訂正して、旁康熙字典の蕪雜を指摘して、斷然として其疵瑕を辨駁す、且編中に清の太祖太宗世祖聖祖世宗高宗の歴代の廟諱を犯せしゆるゑ、七世目の仁宗嘉慶のはじめに、王錫侯が子王霖王需等、孫王壯飛王靈飛王蘭飛等遠誦し、敕して字實の鏤

版を毀棄し、その書を禁止す、彼土にありては如何にも時王の法令を違犯せしかば、禍ひ子孫におよびしも理なきにあらず、我土にては字書講究の一助となれば、學者の裨益少なからず、先年倉成善司が懇請によりて、全部雕刻となるべき積りにて、先は提要进行を雕刻ありしなりと、その子倉成柏司余に語りぬ、

福山藩

呂氏春秋、廿六卷六本秦呂不韋撰、鹽田屯校刊、

小學纂註、六卷四本清高愈撰、北條謙校刊、

韓非子翼毳廿卷、附録二卷、十本活字版、大由方撰、

漢吳音圖、四卷二本同上、

白川藩遊藝館

曹大家女誡註、一卷一本木村榮平撰、

鳳樓詩稿、四卷一本河正誠撰、

鳳樓詩二稿、二卷一本同上、

按るに、白川侯の先封は忍なり、此二稿は天明中

にありしゆゑ、諸家の集中齋侯と書す、侯名正識、字子遠、鳳樓と號し給うて、未だ世子たりし時の事なり、

佐倉藩

讀書會意、三卷三本澀井孝徳撰、

雜圖、三卷三本同上、

馬性小品、一卷一本北邨士撰、

正名緒言二卷、附録一卷、二本菱川實撰、

稱謂私言一卷、附録一卷、合一本

佐倉藩は澀井大室よりして文學甚だ盛なり、菱川翁、僕が幼年のころに句讀をこの人に受く、依て當時のことを憶記するに、此餘なほも藏版あるべし、今俄かに知るべからず、近時また濱松藩と同じく、石經十三經全部の雕刻ありと聞く、まことに盛舉と謂ふべし、

小田原藩

史記論文、百三十卷廿五本清吳齊賢撰、

校正貞觀政要、十卷十本唐吳兢撰、元戈直註、

大垣藩

名公四序、一卷一本舊本題三編田元秀俊卿輯、

東陽文集、十卷三本守屋煥明撰、

土浦藩郁文館

漢隸字源、六卷六本

正字千字文、一卷一本一名楷書歌訣、明李登撰、關思恭校刊、

五體千字文關思恭撰、

關源内は舊大宰純が門人にて、文學を以て土浦藩に筮仕す、名思恭、字子肅、鳳岡と號す、かねて臨池の癖ありて筆札の技に長ず、晩年には書名のために掩れてその學術をしる人なし、其男名其寧、字子永、南樓と號す、孫名克明、字子徳、潢南と號す、曾孫名思亮、字世達、東陽と號す、東陽近時行書類纂十二卷を編輯す、余と屢交し、乃祖が漢隸字源を始め數種を郁文館にて雕刻ありしが、そ

の版本は書肆前六左衛門へ藩より賜ふにより、其後鏤版の在所を知らずと、余が爲めに語りぬ、また其儒臣上原平仲が話に、郁文館山崎學派なれば、關氏などの學問とは流派を異にし、今にいたりて關氏の子孫は、正月中乃祖の文學により仕へし爲めに、孝經一篇を講ずるのみにて、告朔の饌年存せり、故に藩中にも儒流とおもふものなく、書家者流を以て目しけるとなん、

古河藩盈科堂

標箋王註孔子家語、十卷五本魏王肅註、

標箋楊註荀子全書、廿卷十本唐楊註、二種千葉玄之標箋、

雪華圖說、一卷一本

續雪華圖說、一卷一本二種許鹿侯撰、

古河侯の先侯、侍醫原尙庵を擢んで儒臣に命ぜしより、一藩の學派古註疏を主とす、其ころは唐津城主たり、尙庵名瑜、字公瑤、雙桂と號し、はじめは業を伊藤東涯に受く、寶曆中侯先封の地古

河へ移封あつて後、尙庵茂右衛門藩有司に請うて家語荀子二書の標箋を藩の藏版として、聲價一時に起れりといふ、事松延年が文集中に見えたり、その後二書版本書肆へ賜り、藩にはあらず、家語は江戸書肆嵩山房にて再版までせしが、荀子は版本焼失して傳本極めて稀なり、

濱松藩經誼館

熊耳文集正編十六卷、詩集四卷、合八本餘承裕撰、

明四先生文範、四卷四本同上、

澹園集初稿、十卷二本秋以正撰、

野泉帖、二本

丙丁炯戒錄、二卷二本鹽谷弘撰、

熊耳翁は、僕が祖父通庵嘗て詩文を此人に學ぶ、今の刻本は熊耳集正編と題してあれば、二編か續編か繼て雕刻あるべきなるべし、その子孫を訪尋せしに、その藩の儒官小田切要助の話に、今は斷絶してなしと、因て一奇事あり、僕年來近世文士の

事歴を訪捜して、近人の傳記を著はさんとして、各家の遺書を収集する事百種をもつて數ふ、されども家舊よりまづしうして衣食を節縮して、ようやく千種の餘におよびしが、甲午の火災に著述草稿よりして經史集は更なり、我土先修の遺書集類雜書にいたる迄、片言隻辭をのこさず悉く燒燼して、再び収集のこと成りがたし、其年の四月、下谷新寺町を通行して廣徳寺の門前に至り、日も二十八日なれば、熊耳翁が墓に謁して、集の正編のみは世にあれども、今は 社の學流も盡く廢して、只一人その遺書を訪捜するものなしと、胸中に憶記して、墓門を出て上野山下にいたりしに、一人の書鋪僕が好事癖あるを知りて、一苞の美濃紙の反古數百紙を出して云く、享保間の儒流と見えたり、誰も見るとても有るまじければ、先生の一閱を待ちて紙屑とせんとなり、僕倉卒に展披して讀むに、前後混雜して首尾全からずといへども、熊耳翁眞

跡にて、續集と爲るべき稿本なれば、價を論せずして購ひ得てかへりぬ、誠に翁が靈陰に僕が見るをまちてこの反古紙授るがごとし、のちに編纂して六本となしぬ、さすれば其子孫たるもの、其遺書は賣却して手澤の稿本轉展して、僕が掃墓の日にあたりて目にふれしは、いと奇事とも謂ふべし、編中の關係にあらずとはいへども、爰にちなみに記す、澹園集も初稿とありて、其君侯よりして學舎に雕刻したまふよしなれば、侯家の藏版なるべきは疑ふべくもなし、村意語が諸家人物志徂徠門人中江澹園を載せて云く、名以正、字子師、須溪と號し、一に隅夷と號す、秋元喜内、岡崎の水野侯に仕ふと、按るに、定て岡崎にて役せしならん、猶尋ぬべし、

唐津藩傳習館

黄山谷平原帖等右善校刊、

丹波龜山藩邁訓堂

新編歴史徴、七十二卷内廿四卷廿四本

古押譜、八卷七本

史論奇鈔、七卷七本以上松崎祐之撰

觀海集、十二卷六本松崎維時撰

雪樓集、十卷三本中島漁撰

掛河藩拭目館

海錄碎事、廿二卷七本宋葉廷珪撰

龍野藩

龍野四孝傳、四卷二本

鯉江藩

子叢摘芳、二卷

篠山藩

御註孝經補義、一卷一本編井軌撰

大學衍義補、百六十卷五十本宋眞德秀撰 明邱濬補

通鑑肇要前編二卷、正編十九卷、續篇八卷、明記八卷、

合十五本清姚培謙撰

按るに、百五十年前は剽竊も近時の如く高價に

なしと見えて、眞西山が原本の大學衍義四十三卷を京都の書肆にて彫刻したりしに、また間もなく陳仁錫が校正本の衍義補をも彫刻せしなり、兩様ともにみな元祿中の事なり、その後天明戊申の京師大火にて版木燒失して、書肆も再版の力もなく、篠山侯京師の御勤役中、失費を惜しまず藏版に出來せしなり、往時坊刻になりし明宣宗救撰の御製御倫書六十三卷三十卷、江元祚が孝經大全二十二卷十本、黃道周が孝經集傳八卷四本、陳哲が春秋胡傳集解三十卷十五本、陳子龍が詩經毛引二十一卷十本、蔡清が四書圖史合考二十四卷二十五本、盧一誠が四書講述二十四卷廿本のごとき、皆々燒版なり、これらの書何れも還て清國にては散佚して傳はらずと見えて、諸家の書目中にも載せず、各家著述の醇疵はしばらく置て、陳哲、蔡清が道學粹粹、陳子龍、黃道周が節氣高邁、その人をもつて傳ふるに足る、世の諸侯これらの書我土に傳へて

存するを知り給はゞ、如何にも一朝の變を廢して再刻の舉ありたき事なり、世の文士是等のことを選舉する人なし、依てこゝに記す、

中村藩

霞城講義、二卷一本

經義折衷、一卷一本

經義緒言、一卷一本以上井純卿撰、

鳩居居語、二卷一本尾修平撰、

上田藩

封内孝子傳、二卷二本桂希言撰、

封内異行傳

岩城平藩施政堂

大學章句講筵句義、三卷二本舊本題岩城後鹽分宜撰

陸奥岩城疆界路程全圖、一帖鍋田三善撰

琉球入貢紀略、一卷一本同上、

關宿藩教倫館

古本蒙求、三卷二本龜田興校刊、

五穀稻梁辨、一卷一本同上撰、

丸岡藩懷風館

雲遊錄三卷、後錄三卷、合六本關襲撰、

高島藩長善館

樵談、一卷一本宋許斐撰、

筆疇、二卷一本明王達撰、

鷺湖詩集、十卷二本舊本題源忠林子野著、

諏訪八勝圖詩、一卷一本吉田清撰、

福智山藩

泰西輿地圖說、六卷六本

西洋錢譜、二卷二本

增補改正珍貨孔方鑑、二卷一本

增補改正珍貨孔方圖鑑、二卷一本

新選錢譜、十五卷十五本

泉貨分量考、一卷一本

彩雲堂藏泉目錄、二卷二本

岩村藩

六經略說、一卷一本太宰純撰、

世話類備、四卷二本福島世興撰、

祥刑要覽、二卷一本明吳訥撰、若山極校刊、

開廠賑粥法、一卷一本鎌倉石見撰、丹羽瀨裕校刊、

烏山藩

詩韻合英異同辨、十八卷四本清劉文蔚原輯、任以治、蔡應襄二子校刊、

桂林遺稿、八卷六本繩維直撰、

長島藩文禮館

松秀園書話、三卷

壬生藩

永嘉八面鋒

安中藩造士館

備忘錄、四卷四本清張履祥撰、

綽山吟稿、一卷一本

東還日記、二卷一本

西征吟稿、一卷一本

泉藩

壺山集、五卷二本

壺山二集、七卷二本二種藤忠如撰、

神戸藩教倫堂

古言錄、二卷一本

猗蘭子、三卷二本

猗蘭臺集十二卷、二集十二卷、三集十二卷、合十八本

これは皆當時の神戸侯高祖名忠統、字大乾、猗蘭と號し、物徂徠の高弟、封邑西臺になりし時の著述なり、諸家集中に西臺侯と稱す、享保壬子の歲神戸に移封あり、忠統君學を好んで李王の修辭を能したまふ、嘗て猗蘭子六十六部を美濃紙極々最上の品へ摺立させて、我邦六十六箇國の神社佛閣に奉納あり、蓋しその意一箇國に一部の積りにして、古人の書を名山石室へ藏するの意なるべし、まことに高貴の身にして其風雅高致のほど、思ひやるに堪へたり、古言錄は鏤版火災にて焼失し、餘は今に存せりと、其藩の儒臣澤三郎余が爲に語れり、

高取藩

大和風雅、七卷二本

並鄂百絶、一卷一本卷首題出羽守植村家長廷君撰

自娛齋遺草、二卷一本内藤景文撰

田原藩成章館

春秋五論、一卷一本宋呂大圭撰

月泉吟社稿、一卷二本宋吳潛編

四庫全書簡明目録、三卷四本清劉等勳等撰

全部二百卷の内、經書の部のみなり、

天地或問珍、六卷六本

詩筌、五卷二本

爽鳩遺稿、二卷一本以上概見正長撰

山中藩

五種遺規、十二卷十二本清陳宏謀編撰

按るに、訓俗遺規六卷、教女遺規三卷、養正遺規三

卷なり、人世一日も缺くべからず、必讀の書なり、

相良藩

論語古説、十卷五本

學庸軌説、二卷二本

弄華辨、一卷一本以上三種川田良照撰

山上藩

眠龍館印譜、二卷二本

宮川藩

女誠和解、一卷一本

三子孝狀、一卷一本舊本題備前守紀正毅撰

按るに、この書は二版あり、原刻は寛政中にあり、

新刻は天保乙未六月の嗣侯正民君の序を載す、正

數字元方、采真と號し、殊に行書を能し給ふ、

以上四十家

諸藩藏版書目筆記終

古經題跋序

定上人、既撰古經之譯場列位成、復集古經之槧寫年月姓名并誓願文藏印、與金字紺紙等、編爲二卷、以藏於何寺、統之體例、一如譯場列位焉、披閱之下、遂令古經宛然在目、唐經尙矣、而世豈復知上人藏有西魏大統三年寫造之菩薩處胎經乎、眞梵笈中之驚人秘寶哉、古來寫經功德靈異如響應、願力所成固當不易磨滅、而上人作此書、又兼攷群籍故事、以爲證明、腹笥便々精博該富、予之望風教外、瞻仰白業者、晞慕無既、

尊古自牧居士金郊書

江楓魚火

跋

曩昔弘仁九年春天下大疫、於是嵯峨帝親書金字心經、

序

凡搜索古經、如覓至寶、涉獵描撫、萃義于梵漢、經歷諸記、探證于古今、以備博覽、以廣異聞、亦古聖溫故之遺意也、本邦古經約係隋唐以還之傳籍、到今

鉅利名監往往收藏焉、然散軼殘缺無有蒐輯之者、豈可不慨嘆乎哉、寬永中平安岱中庵良定上人、討尋南都西京諸山之零本殘編、以集成大藏經全部、今收弄于寧樂念佛寺者是也、嘉永壬子之秋、余西游、搜訪諸山古經、適得縱觀之、其中有西魏陶忸虎所書菩薩處胎經五卷、唐慶節所書樓炭經一卷、最爲其冠、其他有本邦支那縉紳公卿暨名縉聞人所謄寫經一千餘卷、咸一千年以上物也、可謂希世鴻寶矣、於是余謂、本邦之富于古籍、不讓西土、如歐陽氏所稱也、今南都一古刹其存者猶如是、遍求諸海內、當獲大藏中八九分歟、頃日余抄錄諸名山藏經題跋、以備考證之資、因紀會所寓目、以贅卷端爾、

文久三年癸亥冬嘉平月題于佛眼山古經堂、

古經題跋卷上

佛眼山竺徹定輯錄

○和州藥師寺藏

大般若經卷第二十三

藤原宮御寓天皇、以慶雲四年六月十五日登遐、三光慘然、四海遏密、長屋殿下、地極天倫、情深福報、乃爲天皇、敬寫大般若經六百卷、用盡酸割之誠焉、(寓は寓の誤、關戸本)◎以下同シ和銅五年歲次壬子十一月十五日庚辰竟用紙一十七紙 北宮

○按、續日本紀曰、武文天皇、慶雲四年六月十五日崩、所謂天皇斥文武帝也、長屋王傳見諸史、東征傳曰、長屋王製千袈裟、施此土沙門、衣緣繡偈曰、山川異域、風月一天、寄諸佛子、共結來緣、鑑真和上大嘆賞之、遂決東征之意云、惟惜遭讒而不克

終焉、寔千歲之遺憾也、又按、大般若經校異曰、我朝謄寫大般若經防于神龜五年、以余考之、當以和銅本爲權輿耳、

○和州興福寺藏

大般若經卷第五十三 (卷第二百六十七、關戸氏藏)

神龜五年歲次戊辰五月十五日、佛弟子長王至誠發願、奉寫大般若經一部六百卷、其經乃行行列華文、句句含深義、讀誦者蠲邪去惡、披閱者納福臻榮、以此善業、奉資登仙二尊靈、各隨本願往生上天、頂禮彌勒、遊戲淨域、面奉彌陀、并聽聞正法、俱悟無生法忍、○恩方又以此善根、仰資現御寓天皇、并開闢以來代々帝皇、三寶履護、百靈影衛、現在者爭榮於五岳、保壽於千齡、登仙者生淨國昇天上、開七キ本開法悟道、修善成覺、三界合識、六趣冥靈、無願不遂、有心者獲明矣、因果達焉、罪福六度圓滿、四智果、圓、神龜五年歲次戊辰九月二十三日、書生散位寮散位

少初位下壹難善得、(張上福、關戸本)

初校生式部省位子無位山口忌寸人成

再校生式部省位子無位忍海連志登麻呂、(三宅巨島主、關戸本)

裝潢圖書寮番上人無位秦常忌寸秋庭

檢校使作寶宮判官從六位上勳十二等次田赤染造石

金

檢校使陰陽寮大屬正八位上勳十二等檜曰佐諸君

(檢校藥師寺僧口辨關戸本アリ)

檢校藥師寺僧・慈 (道七キ本) 用長麻紙陸張(伍張關戸本)

○按、續日本紀曰、王者舍人親王之弟也、靈龜元年六月薨、今據此、神龜經本之跋、則恐史紀之誤歟、今言二尊者斥天武帝及尊妣、言現御寓天皇斥聖武帝也、此經零本今流傳在尾州名護屋府某氏手云、(用紙一張長五尺八寸二分 幅八寸六分アリ)

○和州東大寺藏

仁王護國般若波羅密經二卷

朕以萬機之暇、披覽典籍、全身延命、安民存業者、

經史之中釋教最上、由是仰憑三寶、歸依一乘、敬寫一切經卷軸已訖、讀之者以至誠心、上為國家、下及生類、乞索百年、祈禱萬福、聞之者無量劫間、不墮惡趣、遠離此網、俱登彼岸、

天平十三年歲次辛巳春二月十四日

○按、續日本紀曰、天平十三年帝發願、廣為蒼生祈景福、天下諸國各造四天王護國之寺、并寫金光明最勝王經十部、并妙法蓮華經十部、又曰、天平感寶元年詔曰、以華嚴經為本、一切大小乘經律論抄疏章、必讀誦書寫、悉令盡竟、蓋此時之物也、余嘗游戒壇院、瞻禮帝所書華嚴經、并菩薩戒羯磨文、奎章煥爛、字字拭目、世有古蹟手鑑者、咸以帝宸筆為卷首、第惜斷奎殘壁不完備耳、

大愛道比丘尼經二卷

皇后藤原氏光明子、奉為尊考贈正一位太政大臣府君、尊妣贈從一位橘氏大夫人、敬寫一切經論及律、莊嚴既了、伏願憑斯勝因、奉資冥助、永庇菩提之

延七下本

樹、長遊般若之津、又願上奉聖朝、恆追福壽、下及寮采、共盡忠節、又光明子自發誓言、弘濟沈淪、勤除煩障、妙窮諸法、早契菩提、乃至傳燈無窮、流布天下、聞名持卷、獲福消災、一切迷方、會歸覺路、

天平十二年五月一日記

○按、日本史曰、皇后善書屬文、嘗手寫金字一切經律論、製願文書每卷後、余嘗觀京畿諸大刹藏經、皇后所書經論凡有三種、各有願文、一曰為尊考尊妣、天平十二年五月一日、一曰為亡考、天平十二年三月十五日、(願書、非光明皇后)一曰為二親魂路天平十五年五月十一日、文章體裁各異、然皆黃紙墨書、筆力秀潤、但未見所謂金字者為憾焉、

阿難四事經一卷

維神護景雲二年歲次戊申五月十三日

景申弟子、謹奉為先聖、敬寫一切經一部、工夫之莊嚴畢矣、法師之轉讀盡焉、伏願橋山之風輅向蓮場

而鳴鑾、汾水之龍驤泛香海而留影、遂披不測之了義、永證彌高之法身、遠暨存亡、傍周動植、同茲景福、共沐禪流、或變桑田、敢作頌曰、

非有能仁誰明正法、惟朕仰止給修、慧業權門利廣兮、拔苦智力用妙兮、登岸敢對不居之歲月、式垂罔極之頌翰、

○按、孝謙帝宸筆經、往往收弄于城和諸刹、皆有神護景雲二年願文、書法勁道、似非女筆者、然諸史缺之不載一何也、待勘、

○和州西大寺藏

金光明最勝王經十卷

天平寶字六年壬寅正月八日佛弟子百濟豐虫寫、

○按、豐虫傳見續日本紀、今略焉、

中阿含經卷第二十九

天平寶字元年九月十五日式部位子少初位下上毛野君大河勘本經、

覆位興福寺沙門

行禪證

大毘盧遮那經供養次第法卷第七

天平神護二年十月八日正四位下吉備朝臣由利、奉為天朝奉寫一切經律論疏集傳等一部、

○按、續日本紀曰、神護景雲三年天皇不豫、羣臣曾無得謁見者、典藏從三位吉備朝臣由利出入臥內、蓋此時所書歟、

○和州唐招提寺藏

大般若經卷第一百七十六

夫以般若大乘者、斯乃三世諸佛之肝心、十地菩薩之寶藏、然則歸依者無不消災納福、隨順者豈無斷惑

謹真、伏惟、為孝子坂上忌寸氏成秋穗等慈光考故出

○先

散位從八位下大隅忌寸 君足初校

坤宮舍人少初位上秦忌寸 忍國參校

裝書匠散位少初位上秦忌寸 東人裝

○按、諸子傳見續日本紀、今略焉、

天平寶字三年十月二日散位少初位下岡曰佐大津寫

左大舍人少初位上大隅忌寸 君足初校

散位從八位下大綱君 廣道再校

坤宮舍人少初位上秦忌寸 忍國參校

裝書匠散位少初位上秦忌寸 東人裝

○按、諸子傳見續日本紀、今略焉、

天平神護二年十月八日正四位下吉備朝臣由利、奉為天朝奉寫一切經律論疏集傳等一部、

○按、續日本紀曰、神護景雲三年天皇不豫、羣臣曾無得謁見者、典藏從三位吉備朝臣由利出入臥內、蓋此時所書歟、

○和州唐招提寺藏

大般若經卷第一百七十六

夫以般若大乘者、斯乃三世諸佛之肝心、十地菩薩之寶藏、然則歸依者無不消災納福、隨順者豈無斷惑

謹真、伏惟、為孝子坂上忌寸氏成秋穗等慈光考故出

○先

散位從八位下大隅忌寸 君足初校

坤宮舍人少初位上秦忌寸 忍國參校

裝書匠散位少初位上秦忌寸 東人裝

○按、諸子傳見續日本紀、今略焉、

天平寶字三年十月二日散位少初位下岡曰佐大津寫

左大舍人少初位上大隅忌寸 君足初校

散位從八位下大綱君 廣道再校

坤宮舍人少初位上秦忌寸 忍國參校

裝書匠散位少初位上秦忌寸 東人裝

○按、諸子傳見續日本紀、今略焉、

天平神護二年十月八日正四位下吉備朝臣由利、奉為天朝奉寫一切經律論疏集傳等一部、

○按、續日本紀曰、神護景雲三年天皇不豫、羣臣曾無得謁見者、典藏從三位吉備朝臣由利出入臥內、蓋此時所書歟、

○和州唐招提寺藏

大般若經卷第一百七十六

夫以般若大乘者、斯乃三世諸佛之肝心、十地菩薩之寶藏、然則歸依者無不消災納福、隨順者豈無斷惑

謹真、伏惟、為孝子坂上忌寸氏成秋穗等慈光考故出

○先

散位從八位下大隅忌寸 君足初校

坤宮舍人少初位上秦忌寸 忍國參校

羽介從五位下勳四等坂上忌寸石楯大夫之厚恩、撫育之慈高踰須彌、擁護之悲深過大海、經生累劫、碎身捨命、何得報方欲西母長壽晉於□□盡曾參之侍奉極仲□□爲子之至誠、展事親之深□□命亦□□催年報運既窮□□存誠有闕、慈顏無感、泉路轉□□地而雖悲歎、都無□□治領袖唯有佛法、必救恩虛□□寶龜十年歲次己未潤五月朔□□紀朝臣多繼、并男氏成女□□結言奉寫大般若波羅密經一部、□□爲遠代之法寶也、□□用奉資先考之神□□海、速到極樂之寶□、早登摩尼之玉殿、□□□□□□、

大藏經全部

宋本

每卷押唐招提寺印、印文古雅、

金剛經一卷

唐鑒真和上真蹟、無跋、

妙法蓮華經七卷

天平十二年六月、菩薩戒弟子沙彌優曇、敬寫法華經

一百部、款識上押內家私印之信、

○和州法隆寺藏

妙法蓮華經七卷一軸

長壽三年六月一日、寫經人雍州長安縣人李元惠、於

揚州敬造此經、書法絕妙、

同經七卷

用明天皇宸翰、

梵網經二卷

紺紙金字、上宮皇太子真蹟、

法華經義疏四卷

標背有大委國上宮王私集非海彼本之十二字、如勝

鬘經疏、

勝鬘經疏義私鈔六卷

右彼鈔者、大唐高僧之製造、日域面目之祕書也、貞

觀十三之運雖請求於我朝、建長第七之曆纔訪得乎、

荒陵恨矣、忘先哲之芳志、可悲失後銳之龜鑑、依茲恩

寫一本、永冀傳通矣、伏惟、上宮王聖靈者東域佛法

之鼻祖也、法隆學問寺者太子鄭重之御願也、纔辨

因果之人、誰忘皇太子之鴻恩、苟志報謝之輩、須

崇法隆寺之人法、聖靈忝留義疏於末代、寺家又昌

夏冬之研練、須寫此鈔安置彼寺、仍更修寫一本、永

以寄入、以謝聖靈無窮之恩德、以擬寺中琢磨之披覽

而已、丹襟之旨、蓋以若斯、

建長八年三月十八日 西大寺衆首慈藹叡尊

此鈔者、延曆寺座主慈覺大師、以承和五年奉使入

唐、幸達揚州、詢求法文緣宿殖、故遇此疏、鈔寫

得送歸叡山鎮藏、其疏主者南嶽大師後身上宮太子、

又鈔主者天台六祖妙樂弟子祖孫道合光榮妙極、吾

師獲之、流傳本朝、可謂繫固之士、權示先後、傳教

救迷、未學信之、須篤敬重、

貞觀十三年十二月十八日

前入唐沙門圓珍敬記

貝多羅葉三片

尊勝陀羅尼一、般若心經一、摩多體文一、迦葉尊

者所書云、可謂梵文之祖矣、近時勢州西來寺某上

人摹刻之、

大般若經卷三十二

若夫法海淵曠、譬彼滄、慧日高明、等斯靈曜、受

持頂戴、福利無邊、讀誦書寫、勝業難測、是以大

法師諱行信、平生之日、至心發願、敬寫法華一乘

之宗、金鼓滅罪之文、般若真空之教、瑜伽五分之

法、合貳千漆佰卷經論、奉翊聖朝、退報四恩、兼救

羣品、然假體如浮雲、草命似電光、未畢其事、含

玉從化、弟子孝仁等不勝風樹之傷、敬弁先願、仰

願桂畏聖朝、金輪之化與乾坤無動、長遠之壽爭劫

石彌遠、退願篤蒙四恩、枕涅槃之山、坐菩提之樹、

位成灌頂、力奮降魔、廣及法界、六道有識、離苦

得樂、齊登覺道、

神護景雲元年九月五日敬奉寫竟（願書天平神護三年八月十六日改元神護景雲）

○余曾游法隆寺、觀信公所書大般若經、書法勁健、非凡筆也、夢殿安公塑像、其仙風道骨可知也、

其傳見高僧傳、

中阿鉢經卷第十一

天平寶字元年潤八月二十五日式部位子少位下上毛

野君大河勘本經、

覆位興福寺沙門

行禪證

天平寶字三年九月十日文部書生大初位上高赤麿寫

左大舍人少初位上大隅忌寸

君足初校

坤宮舍人少初位上秦忌寸

忍國再校

散位從八位下大綱君

廣道參校

裝書匠散位少初位上秦忌寸

東人裝

增一阿鉢經卷第廿三

天平寶字二年三月二十七日覆位藥師寺沙門善牢勘

本經、

覆位元興寺沙門

善覺對校

天平寶字三年十一月四日散位大初位上三島縣主岡

麿寫、

左大舍人少初位上大隅忌寸

君足初校

坤宮舍人少初位上秦忌寸

忍國再校

散位從八位下大綱公

廣道參校

內史裝書匠少初位上長江臣

多古志麿裝

增一阿鉢經卷第五十

天平寶字二年五月十一日覆位藥師寺沙門善牢勘本

經、

覆位元興寺沙門

善覺對讀

天平寶字三年十二月二十六日前春宮舍人初位下科

野虫麿寫

坤宮舍人少和位上秦忌寸

忍國初校

散位從八位下大綱公

廣道再校

左大舍人少初位上大隅忌寸

君足參校

內史裝書匠少位下長江臣

多古志麿裝

長阿鉢經十報法經卷下

天平寶字六年五月日

願主光覺

頭優婆塞大行

垂水乎伎多

垂水公黑人

垂水大野

垂水赤麻呂

垂水大麻呂

垂水廣島

垂水古麻呂

大三和筆

布也布伎大山

猪名部首老

高向村主東人

多目宿禰大羽古女

垂水都良女

猪名部首刀自古

大三和孫子

衆事分阿毘曇卷第十一

天平寶字六年六月八日

願主僧光覺

文忌國長

鳥部連刀自古

紀勝賀田奈古

川原連島古

彌勒菩薩所問經論卷第三

天平寶字六年十月七日

願主僧光覺

光笠菩薩

父僧道風師

客水君益下古

優婆夷戒經卷第六

子紫

願主僧光覺
智戒

頭優婆夷智高

阿毘曇問分界品第一

天平寶字六年十月七日

願主僧光覺

毛人黃皮四枝

桑名牛養

尾張連田女

同申女

語字麿
大伴河久麿
大和御都木女
阿爾桑麿

增一阿鈴經卷第十

右奉爲皇帝皇后、

維天平寶字六年歲次壬寅二月一日

願主僧光覺

僧道眞

僧願成

沙彌壽益

優婆夷文善

僧况戒
僧命花
沙彌降成
沙彌壽貢

優婆夷法賢

長尾忌寸國勝

平群朝臣虫名古

後布王公人

優婆塞鳥養

優婆夷文明
檜前村主家刀自
狛虫名古
資村廣足
姓布王口名

○按、續日本紀曰、天平寶字中、紹天下鼎建三戒檀、大興毘尼、今觀此戒本數種、四衆正位次第有序、非今時竿濫之比、自俾千載之後、仰其遺風餘烈矣、

無垢淨光經小卷

在百萬塔中、傳曰孝謙帝宸筆、塔跌面有神護景雲元年十月等之款識、按、續日本紀曰、神護景雲四年戊午亂平、帝發願曰、造三重小塔一百萬基、高各四寸五分、基徑三寸五分、露盤之下各置根本慈心相輪六度等陀羅尼、至是功畢、分置諸寺、此經乃是也、或曰、此經爲我朝刊版之權輿焉、

佛說菩薩投身餓虎起塔因緣經一卷

贈從一位右大臣兼行皇太子傅中衛大將藤原朝臣誓

願、

延曆十口年六月十一日

大藏經全部

五部大乘經

應永中所書也、每卷有題字、

○和州高貴寺藏

大乘莊嚴經論卷第一

延曆七年五月二十日

檀越沙彌延命

伊福部連福人

經師僧信徹

大般若經全部

仁平三年歲次癸酉六月十六日、書寫筆師願空、川

合宮一筆經也、爲佛法興隆、滅罪生善、法界衆生、

平等利益也、

施主沙門僧念口

承安二年歲次壬辰十一月八日癸酉、供養了、其日導

師松林院法印請僧卅一人、樂頭光近、樂人舞人二十

人、

元久元年甲子八月日百卷成後施入之、

應保二年歲次壬午二月九日丙午書寫、

願主俗姓紀氏長寬寺住僧永信

筆師僧相譽五百廿卷一筆

○紀州日高郡新村觀音堂藏

大般若經卷第四百三十

竊以昔河東化主諱萬福法師也、行事繁多、但略陣耳、其橋構之、近啓於廣河般若之願、發於後身、此始天平十一年迄來十二年冬、志未究畢、迹偃松嶺、是以改造洪橋、花影禪師四弘之願、發於寶橋一乘之行、繼於般若汎導汎誨良長、于茲吾家原邑男女長幼幸預其化心、請本主謹敬加寫大般若經二帙廿卷繕飾已畢、此第四十三帙并第五十二帙也、仰誓辱捧一毫之善、咸報四恩之重、伏願人賴三益之友、家保百年之期、廣施少善、餘祐普及、親疎自他相攜共遊覺橋、奉仕知識馬首宅主賣

天平勝寶六年九月廿九日

用紙十七張 押仙光院印

大般若經卷四百二十五

願文同前、

奉仕知識牧田忌寸玉足賣

河内□□□田上施福院常住也、

卷背有記曰、

延喜十二年權檢非違使高屋梁蔭、依廳宣奉寫、又

有寬和長德萬壽延久等款識、

○紀州高野山藏

大藏經全部

紺紙金字、美福門院皇后所附也、簽題皇后真蹟也、

爲供養料割本國荒川莊附之、故謂之荒川經、

同全部

康和三年辛巳、羽州平原上人募緣所贖寫也、

同全部

石田三成爲亡妣所附也、

高麗本

大日經疏

爲續三寶惠命於三會之出世、廣施一善、利益於一切之衆生、是則守大師之遺誠、偷令遂小臣之心願、謹以開印版矣、

弘安二年己卯四月日

從五位上行秋田城介藤原泰盛

將來目錄二卷

爲酬四恩廣德、興三寶妙道、寫大師御筆、謹開印版矣、

正安四年十一月廿日

高野山愚老沙門慶賢 八十二

釋摩訶衍論十卷

竊窺鑽仰之窓、徒疲書寫之勞、既疎于誦誦之業、因茲且奉守高祖之遺誠、且爲扶末學之稽古、謹開印版、敬報祖德、

建長八年二月日 高野山金剛佛子快賢

○龍光院藏

法華經八卷

弘法大師真蹟、書法絕妙、

十住心論十喻四幅

書畫共大師真蹟也、古雅神品、

金光明最勝王經十卷

紫紙金字、無跋、

同經

細楷精緻、無跋、

大日經全部

明算上人真蹟、有跋、上人傳見元亨釋書、

○遍明院藏

法華經全部一卷

細楷絕妙、大師真蹟也、

○興山寺藏

大藏經全部

紺紙金字、宋國舶來經、藤原秀衡所附也、

大日經

紺紙金字、唐一行禪師真蹟、希世之珍也、

○金剛三昧院藏

寶積經全部

夫寶積經要品者、示供養如來之真理者、空寂自性之本元、寔是修行大乘之直路、證得菩提之通門也、是以新書一軸、奉納高野山金剛三昧院、以爲常住持經、是中迦葉會分始、則余自書之、其次夢窺國師書之、優婆離會分則征夷大將軍書之、抑先年因或人感靈夢、以南無釋迦佛全身舍利之數字、各和歌之首句以詠之、既而成軸矣、爲令彼詠歌之衆結良緣、寫真文於其紙背者也、伏冀三十一字之綺語、契當三藐菩提、二十餘背之歌人、成就二世願樂、兼施餘薰、普及三界、敬白、

康安三年十月八日

從三位左兵衛督兼相摸守源朝臣直義

○如意輪寺藏

因果經一卷

卷中畫說相大師真蹟也、

隨願往生經一卷

大師真蹟也、有傳來書數通、

○泰雲院藏

心經

紺紙金字、嵯峨天皇宸翰、光彩奪目、

○河州高安園光寺藏

大般若經卷第五百二十六

天平二年歲次庚午三月上旬、始寫大般若經一部六
百卷、右京七條二坊黃君滿侶寫奉、

卷第五百十一

天平二年歲次庚午三月上旬、始寫大般若經一部、平
郡卿都善臣足寫、

卷第五百七十三

天平十三年五月二十四日 楠戶禰麻呂願經、

卷第十一 天平十三年七月十八日

奉為四恩寫檀越下村主廣麻呂、廣麻呂傳見續日本紀

卷第五百九十一

天平十六年六月卅日 春日戶比良

○按、續日本紀曰、聖武帝天平八年丙子三月三日
詔、每國造佛像寫大般若經一部、蓋此時物也、寺傳
云、此本南都興福寺舊藏也、

○城州梅尾高山寺藏

佛說彌勒上生經

維天平十年歲次戊寅六月戊戌朔廿九日丙寅、出雲
守從五位下勳十二等石川朝臣年足稽首、和南十方
諸佛、蓋聞法門興聖、表無量以凝尊、真相開靈、
隨緣而應物、故得五根宣化、遙變響於和音、十念
成功、遠登神於補處、年足慈顏永隔、空懷罔極
之哀、諱日俄臨、方積終身之感、庶憑功於妙力、
希樹果於良因、謹以茲辰敬造彌勒菩薩像一鋪、寫
彌勒經十部、蓮臺寶相、含璧月而披光、貝篆靈文、
貫珠星而流影、伏願契道能仁、昇遊正覺、菩提枝
下、開妙法之圓音、兜率天中得上真之勝業、通該

有頂、普被無邊、並泛慈航、同離愛網、

○按、日本史曰、石川年足、大紫蘇我連子曾孫也、
性廉勤好讀書、最習於治體、天平中敍從五位下、
為出雲守、作律令別式二十卷、天平寶字六年薨、
年七十五、子名足、

金剛頂瑜伽經卷第二

上野國緣野郡淨院寺一切經本

掌經佛子 教興 寫經主佛子教興

經師近事 法慧

弘仁六年歲次乙未六月十八日、奉為皇帝皇妃太子
諸皇左右大臣、洪基無動、六親七世、裕德口除、近
霑自身、遠沐他界、一切行者、法眼無上、菩提正
因、

梵網經一卷

天平勝寶九年三月廿五日

知識頭主僧靈春

日置石万呂

沙彌願戒

土師留女

土師白万呂

土師賣万呂

四分律卷第五

高天寺中林院之一切經也、一部五十卷、弘法大師
所筆、末代重寶也、合縫有高天之印、

承平六年七月十五日 五百木丸

一切經律論發題一首

唐伯金寺沙門光藏書、紙背押伯金寺印、

賢聖義問答一卷

嘉應三年正月七日 天台沙門親融

紙背押金剛寶寺印、

華嚴經疏抄卷第一

大宋咸淳第七辛未春中月下七日、於宋朝湖州思溪
法寶禪寺、借得行在南山高麗教寺之祕本寫之畢、

執筆沙門辨智

正應五年九月廿一日夜於湖州法寶禪寺加點了、

求法沙門澤舜

○紫野大德寺藏

大威德陀羅尼經卷第十七

天平勝寶七年六月二十一日

從七位上守大覺直講上毛野君立磨勘本經

覆位興福寺沙門

行禪證

天平勝寶八年六月十八日

散位大初位下三島縣主

岡磨寫

散位大初位下大綱君

廣道初校

右大舍人大初位下田邊史

人道再校

左大舍人無位大隅忌寸

君足參校

僧伽吒經卷第二

天平勝寶七年十月十八日

正八位上大學寮少屬內藏伊美全成校本經

覆位元興寺沙門

慶順證

覆位元興寺沙門

善口讀

天平勝寶八年四月八日

右大舍人正八位下志記縣主

久比磨寫

散位大初位下大綱君

廣道初校

○右榮西禪師要淨坊所舶齋也、又有大藏經、海住山舊藏也、有永萬長承等款識、

○松尾神宮寺藏

大藏經全部

永久中神主秦宿禰親任及賴盛雅遠等所附也、永治元年辛酉十一月二日以延曆寺西塔院報恩藏本一校了、賢智

願以書寫力、上求菩提緣、上中下衆生、總至沙界外、現世身堅固、所願皆成就、後生生淨土、同修普賢行、

○北野天滿宮藏

大藏經全部

應永十九年壬辰三月十七日起筆、

本願主 金剛資 學藏

有阿波法林寺範意、作州滿福寺宥仙、濃州定德寺良榮、伊勢金剛寺祐盛等款識、

○嵯峨清涼寺藏

左大舍人無位大隅忌寸

君足再校

右大舍人大初位下田邊史

人道參校

瑜伽師地論卷第六十

太宰府史生正六位上八戶史石島春日刀自賣奉為慈

父母仕奉願、

延曆四年六月十五日

○北野興聖寺藏

大般若經全部

建曆二年壬申十一月廿八日書寫畢、

執筆超昇寺信西

般若第一教、此經結緣者、雖有重業障必當得解脫、

注般若心經一卷

開寶九年丙子歲正月二日文鑒自書、

三注心經一卷

大唐南陽國師惠忠

大洪芙蓉禪師道楷

惠林慈英禪師懷深

金剛頂經一卷

文安元年甲子極月日 金剛佛子覺增

大毘盧遮那成佛神變加持經供養法卷七

右經王七軸印版、磨師主權僧正十三回之忌辰鏤梓、

置此於東寺西院、冀以此無盡莊嚴之法文、貫彼三

覺圓滿之菩提、續密藏於三會、救羣生於彼岸、

嘉吉元年辛酉六月十五日權律師覺增謹識、

○華頂山智恩院藏

大藏經全部

慶長中東照公所頒賜也、傳曰、毛利長州侯所附、而

周防山口乘福寺舊藏也、元和中台德公有命、新建輪

藏、安傳大士二脇士及四天王塑像、莊嚴壯麗、冠

于都下、

根本薩婆多部律攝卷第四

福州東禪等覺院住持賜紫慧空大師了元謹募、今上

皇帝太皇太后皇太子皇大妃、祝延聖壽、國泰民安、開

鏤大藏經印板一副、總計五百餘函、元豐八年乙丑

歲五月日謹題、

佛說薩鉢多酥哩捺野經一卷

福州開元禪寺住持傳法賜紫惠通大師了一、謹募眾緣、恭為今上皇帝、祝延聖壽、文武官僚資崇祿位圓成、雕造毘盧大藏經板一副、時紹興戊辰閏八月日謹題、

辟支佛因緣論一卷

詳對經弟子黃瑞詳勘經、沙門元興寫都勾當藏主沙門靈肇都勸首住持傳法沙門普明福州東禪經生林銳印造、

○按、福州板藏經、東禪開元二寺主僧募緣開印、起元豐中至乾道中、凡閱九十餘年而竣功、淳熙元年孝宗給內帑錢二萬錢附上天竺、建輪藏殿、賜印福州經一藏、命皇太子書殿榜曰法輪寶藏、

稱讚淨土經五部

中將法如書

阿彌陀經一卷

紺紙金字、慈鎮和上真蹟、書法絕妙、標背有歌、世謂

之蘆手書畫、

出相阿彌陀經一卷

一代聖教、十二部八萬法藏妙肝心、出離生死最要法、彌陀來迎得往生、

應永卅三年十月十三日勸進聖融通那阿敬白、

觀無量壽經一卷

紺紙金字、後白河法皇宸翰、

永祿元戊午七月十日 本誓寺英譽花押

阿彌陀經一卷

紺紙金字後奈良院宸翰

十二門論一卷

元祖大師真蹟也、

彌陀懺法二卷

有至道禪師序、

元國上都大覺寺東州至道禪師、稟聖一印證而歸中華、宏開爐鞴、陶鑄玄徒、元應己未年東福火、南山雲遣其徒芳禪人^{號祖}、裁書招師、師答書曰、故園法窟龍天所護、豈可寂寥於今也、其劫燒之變繫之革、

新修淨土往生傳二卷

大治五年八月十八日書之、

○黑谷金戒光明寺藏

淨土三部經三卷

傳曰、光明皇后真蹟、有弘安五年壬午六月廿九日切句了、淨尊花押、

般若心經一卷

小野道風書

大藏經全部

榮本

稱讚淨土經一卷

中將法如書

○百萬遍知恩寺藏

大藏經全部

榮本

廣疑瑞決集一卷

源智上人真蹟、古雅絕妙、惜乎不完、

圓覺經二卷

大明建文元年歲次己卯正月、江西袁州府仰山太平興國禪師住持比丘如正收贖、此經受持供養、普願法界有情同增福壽、共樂昇平者、

故鼎新之數乎、況老師法力維持、當有能者代勞、

不必煩於尊慮也、至道瑩燭之微、忝分惠日之餘輝於支那數萬里外、使輝輝不昧於日用、則是不辜於老師、遠為曲折覆護而不遺之恩也、亦是至道思慕國師、初傳正法眼藏於東國之大機大用之心日增月長而不退轉故也、今有一坐、具地片瓦覆、頭無非慈蔭所被、而未有不少鹽醬之語、如有則老師代國師發一笑、

延寶傳燈錄載至道和尚傳、然缺此文、故今抄之補闕、

大般若經全部

加茂神宮寺舊藏也、為沙彌政阿彌奉雕、供養親父安陪時資、

嘉祿元年乙酉九月一日

○入信院藏

妙樂戒儀并布薩式一卷

弘長三年正月二日以二尊院湛空上人本寫了、

難遂往生機記一卷

安元二丙申年四月八日

授菩薩戒儀一卷

明應九庚申稔霜月十三日 周譽花押

大原問答一卷

永正元年卯月八日 秀譽花押

○獅子谷法然院藏

大藏經全部

藥本

寶永中、開祖忍澄上人以建仁寺藏高麗本校合之、起

於丙戌終於庚寅五月、可謂勤矣、別有對校錄一百卷、

八吉祥經一卷

吉備朝臣由利、書法遒勁、合縫押元興寺印、古色

可掬、

仁王般若經二卷

宋本

卷首押唐招提寺印、

華嚴經普賢行願品一卷

崇禎七年甲寅閏八月費兆元和南題、

梵網經一卷

應永三十年癸卯秋善月日春夫誌、

父母恩重經一卷

寬永二十年十一月九日良永印施、

選擇本願念佛集二卷

延應板也、卷首有平氏序、書體古雅、亦當時名手所

書也、

○東山禪林寺藏

大般若經全部

源賴朝公所附、

一乘要決三卷

慧心僧都真蹟、標面有證空之字、開山上人為帳中

祕可知也、

決定往生集一卷

宗祖大師真蹟也、筆法秀潤、

唯識論全部

大論全部

共叡山古板也、世謂之義真點、蓋刻本之最古者也、

○檀王法林寺藏

諸經集懺儀二卷

紺紙金銀字、美福門院皇后真蹟、與野山荒川經同

其製、傳云、

龜山帝所頒賜也、

六時禮讚一卷

宗祖大師真蹟

頻婆沙羅王經一卷

光明皇后書、有跋、

父母恩重經一卷

興正菩薩書

尊問愚答記一卷

建治元年乙亥三月十五日、於東華藏寺抄之、留贈後

昆共期生緣、沙門了惠謹錄、

大藏經全部

藥本

○東山東福寺藏

大藏經全部

宋本

福州板也、每卷押三聖寺印、有記曰、

福州管内衆緣就、開元禪寺雕造毘盧大藏經之印板

一副、計五百餘函、恭爲今上皇帝、祝延聖壽、內

外臣僚、同資祿位、都會首、葛龜年、鄭康會結、陶

穀、張嗣、林梅、陳芳、林昭、劉居中、蔡康國、陳

詢、蔡俊臣、劉漸、陳靖、謝忠、前管句本悟見、管

句僧仵證會、前住持淨慧大師法超、當山三殿大王

大聖泗洲、時靖康元年八月日謹題、

○按、北禪遺草、永和三年丁巳日向大慈寺剛中禪

師所附也、禪師爲聖一國師曾孫、以故有此舉云、

元亨釋書三十卷

大日本國延文庚子六月、有旨入毘盧大藏、海藏禪

院寓居比丘單況等、謹募衆緣、恭爲今上皇帝、祝

延聖壽、文武官僚、資崇祿位、國泰民安、命工鏤梓、

與大藏經印板共行、一部計三十卷、時貞治三年甲

辰正月日謹題、

○攝州四天王寺藏

大藏經全部

寬永版

輪藏大猷公所造營也、奉安十六善神、壯麗極美、

法華經一部

南岳大師書云、筆法遒勁、

殘闕經本一葉
壽量品一卷
普門品一卷

上宮太子真蹟
光明皇后真蹟

白紙金字、櫻町院宸翰、

法華經一部

菅公真蹟、細楷精正、

五部大乘經

紺紙金字、未詳筆者、

法華經一部

元三大師書

金剛頂經十卷

慈覺大師真蹟

○播州極樂寺藏

瓦經願文

南瞻部州大日本國播州極樂寺別當大法師禪慧敬
白、祕密教主、常住三世、淨妙法身摩訶毘盧遮那
佛、大恩教主釋迦牟尼如來、極樂化主彌陀善逝、
當來導師彌勒慈尊、金剛界三十七尊、九會曼荼羅
諸尊聖衆、并胎藏界八葉九尊、十三大會塵刹聖衆、
外金剛部護世威德天等、及至佛眼所口恆沙塵口三
寶境界而言、伏惟、生生世世之中、難受者南浮之人

身、在在處處之間、難值者東漸之佛法也、而今我
等雖受人身、慙受愚慵之陋質、雖值佛法、僅值論
正之遺教、然則自行化他、俱有有留難、誠迺悲歎
填胸、淚浮雙眼者也、雖然此時若不修善根者、何
日更可得妙果乎、方今始自釋尊入滅二千一百六十
餘年之比、迄于慈氏下生五十六億七千萬歲之時、
爲施不壞不朽之利益、所修奇異奇妙之善根也、三
業抽誠、六情凝志、精進潔齋、造清淨瓦、奉彫圖寫、
金剛界九會法曼荼羅一幀

胎藏界十三大會法曼荼羅一幀

梵字阿彌陀曼荼羅一幀 梵字法華曼荼羅一幀

寶篋印陀羅尼經一卷 妙法蓮華經一部八卷

阿彌陀經一卷 顯無邊佛土功德經一卷

八名普密陀羅尼經一卷 般若心經一卷

般若理趣經一卷 金剛界禮懺文一卷

文殊師利發願經一卷 三十五佛名禮懺經一卷

五十三佛名經一卷

三十佛十方佛七佛二佛等名號一卷

梵網經十重禁戒并四十八口口口口口一卷

梵字金剛界五佛真言、胎藏界九尊真言、并佛眼一
字大金剛輪、無量壽陀羅尼、并心真言、決定往淨
土真言、釋迦彌勒藥師真言、無垢淨光、寶樓閣、

光明真言、菩提場百千印、兩寶陀羅尼、滅惡趣破
地獄滅罪、隨求、尊勝、法身真言、六觀音真言、

勢至、地藏、龍樹、普賢、文殊、虛空藏、不動、
大威德、孔雀明王、愛染明王、大元明王、金剛藏

王、多聞、吉祥、北斗等真言、各一遍、今年又以
輒奉造立、大日如來三昧耶形、五輪率觀婆四基、

又奉造立四方極樂化主阿彌陀如來像一軀、無佛世
界能化主地藏菩薩像一軀、又奉彫書寫、

金光明經一部四卷 三千佛名經一部三卷

梵網經一部二卷 普賢十願經一卷

藥師經一卷 仁王般若經一部二卷

金剛般若經一卷 金剛壽命經一卷

大般若四十二字、一遍未燒之時、以錐書之、書寫
之後積薪燒之、是皆六七日中如說撰、一兩年間書
寫終功、末法萬年、餘經雖滅、唯願此曼荼羅、佛
菩薩像、顯密經典、諸真言等、久在地中、至于當來星
宿劫、未利物偏增而已、古人有言曰、凡文朽靖而
思之誠哉、斯言彼隋文帝仁壽年中、衡州起塔、掘
地四尺、即得古瓦、其上有萬歲千秋樂未央之文、世
以之謂祥瑞、入以之爲美談矣、我朝皇極天皇御願
河內國常樂寺壇下、被奉埋納瓦小佛像數萬軀、其後
雖及五百餘歲口口不朽者也、然則此曼荼羅佛口口
梵字真言、顯密經典、雖口口口口不朽久在此地、可
施利口口口口、此經典等書寫之間口口口口口依
有夢想、奉埋納于氏寺後峯既了、此寺者則我朝賢
王、前一條院之御願寺、鎮護國家之大伽藍也、曩
祖勘解相公藤有國、并從三位橘德子、同心合力、
殊存忠節、其息參議廣業、三位資業、爲當州刺史之
時、奉爲聖朝安穩、國土豐饒、更擇勝地、所被奉建

立、左有青龍之水、其流潺湲、右有白虎之丘、其勢峻嶮、前有朱雀之池、其涯如半月、後有玄武之山、其峯似三胡、誠乃幽奇勝絕之靈地也、歸敬阿彌陀如來為本尊、勸請八幡大菩薩為鎮守、加以金峯藏王、熊野權現、丹生、高野、春日、北野、日吉、住吉、廣田、南宮等諸大明神、同勸請之、又為鎮守、然則就此勝地、更擇良辰、其注意趣、發願回向而已、方今當座□□□之師匠、大阿闍梨覺□□□□晦跡山林、東寺真言□□□源底、西方淨利之行、久積□□□乎、四時持念之床上、八葉蓮華惟鮮、五相成身之窻中、三妄□□□□勤修祕法、億千座三□□□無疑、讀誦法華四十年、□□□豈又有殘乎、爰為隨喜垂降□為結緣、令啓白而已、方今此處仁勝埋納諸曼荼羅、佛菩薩像、梵字真言、顯密經典、故□如來大全身舍利積聚、如來寶塔一切如來無量俱胝心陀羅尼、密印法要、今在其中、俱胝百千如來之身、亦是百千俱胝如來

全身舍利、聚八萬四千法蘊亦住其中、九十九百千萬俱胝如來頂相亦在其中、如是九十九百千萬俱胝一切如來應正等覺側塞無隙、猶如胡麻重疊赴來、晝夜現身、加持我等、如是一切諸佛如來、無數恆沙、前聚未去、後群重來、須臾推遷、廻轉更赴、譬如細沙在水、強急不得停滯、廻去復來、梵天、帝釋、四大天王、日月五星、南斗北辰、北斗七星、九執曜、十二宮神、二十八宿、十六善神、二十八部、大藥叉將、一切諸仙、藥叉、鬼神、琰魔法王、琰魔后妃、太山府君、五□□神、司命、司祿、冥官、冥衆、總□□□部、護世威德天等、三界□□□□神、十方世界權實大小神祇、不越三昧耶、遂念本誓願、常恆護持不斷、侍衛護法天等、散花恭敬、堅牢地神取蓋護持矣、若久遙見此峯、暫生一念之信心、必得二世之利益、何況運步而參詣、致信而恭敬者乎、如彼寶篋印陀□說□有情能於此處、一香華禮拜供養、無始以來死重罪一時闕滅、生免災

殃、死生佛家、此法曼荼羅、佛菩薩像、梵字真言、顯教密教、諸經文字、互三世而常恆、遍十方而不變、一切諸佛甚深之祕藏、三身如來真實之正體、楞嚴、般若、皆以具足、自行化他悉無闕滅、字字顯三世諸佛、四種法身、句句寫自利利他無邊萬德、是以若有衆生應以佛身得度者、此曼荼羅、佛菩薩像、梵字真言、顯密經典、作相好莊嚴佛法利生、若有衆生應以九法界身得度者、現隨類形聲說法利生、又有衆生無一實菩提心者、放大菩提心、光照屬其身、令發菩提心、若有衆生沈三惡道苦患者、放大慈悲之光、照火□刀之身、令離其重苦、彼刀兵劫之時、制鬪爭之災、難疾疫災之時、授醫王之妙藥、飢饉災之時、雨無盡之飲食、旱魃災之時、降澍□之甘雨、凡周遍法界、施作佛事、常恆利益一切衆生、出離生死、令證菩提、唯願諸曼荼羅、佛菩薩像、梵字真言、顯密經典、始自今生于來世、生生世世、暫無相離、在在處處、施利益、若依惡

業墮地獄、縱入猛火、放清淨光而消猛焰、縱墮寒水、放溫和光而救寒苦、餓鬼飢饉之苦、畜生殘害之悲、修羅鬪爭之□、□衆三熱之苦、人間八苦、天上五衰、□厥三界六道一切衆苦、願□相救□□、無上佛果、無邊萬德、皆依此善根悉得成就矣、抑去年暮秋寫經之時、堂前櫻樹一朝開、如遇春、今茲季夏寫經之時、洞中靈鳥每夜常唱佛法僧、斯處此鳥所未曾聞也、誠也乃動殖之祥瑞、天地之感應者歟、依大聖文殊之護念、遂少僧清淨之宿願而已、此間夢想不能具記、爰佛子禪慧、去康治元年之比、參詣當寺之時、先伐拂莊內桑木三千口本、停止在家所出之綿、致□□□之制已了、思其蠶養之業依為重罪之基也、後殊勵一心之精誠、專營三堂之修理、即奉相誓長日佛供、每夜燈明闕伽口不斷香等了、兼又支配供田所令、始終法華常行兩三昧也、每月朔日、為恆例勤、囑請十口之禪侶、讀誦千卷之心經、即所令勤修般若心經、請一座也、每月三箇

度講讀仁王般若經、所奉令法樂莊嚴八幡大菩薩、丹生大明神、瀧藏權現等也、每月晦日、爲恆例勸、勸誘五十二類、調進隨分供具、所奉令勸修舍利講也、每月六節日、爲天下安穩、所奉令轉讀大般若經也、此外每月勤修講讀十三箇度也、所謂定光、毘沙門、虛空藏、普賢、阿彌陀、觀音、勢至、地藏、文殊、舍那、藥王、釋迦等請也、以光明真言、尊勝陀羅尼、加持之土砂、令散於當寺并國中之尸口墓、所不知幾千萬處、普勸進道心之禪侶、令勸修舍利講、及十三萬座、普勸十方欲滿百萬座、又勸進四十餘人之道俗、令勸修小豆念佛及二百餘石、普勸進世間欲滿百萬石、奉養口之口口所令讀誦阿彌陀經十萬座也、口口口日之溫室三箇處、日數過半、人數口口十萬餘人了、普勸進諸國欲結構千處、令讀誦法華經一千部、奉安置卷數於此法華堂了、凡令讀誦法華經前後並四千部也、普勸進十方欲滿一萬部、奉令書寫一日法華經三箇度、普勸進諸處

欲滿一千部、令出家得度僧十人尼四人、普勸進欲滿三千人而已、口勸進寺中莊內之道俗、令奉獻六萬九千三百八十四前之香華了、又勸進寺僧莊民等、一日之內奉令造立供養石塔八萬四千基了、又囑請有緣禪侶七箇日如法如說、奉令造立供養泥塔十萬基了、又爲奉安置於淨土堂、所奉令造立極樂佛菩薩像五百體也、此外於焉有勸修佛事、所謂如法口、仁王會、并萬燈會、千僧供養、千口者壇彌等也、凡厥昔住本寺久所勤修功德目錄、不遑羅縷、佛子禪慧爲往生極樂、普殖事理之善根、爲願證菩提、廣修顯密之行業、琰魔王之札上注而有餘、天帝釋之鏡中照而無隱者歟、然則現世安穩、息災延命、福智增長、顯密修學、興法利生、廣作佛事、無邊大願、決定成就、臨終正念、預知時至、遇善知識、教稱十念、聖衆現前、乘佛願力、上品上生、極樂往生、見佛聞法、悟無生忍、具六神通、以本願還來此界、再見此處、禮拜此等諸曼荼羅、佛菩薩像、

梵字真言、顯密經典、億宿命智、廣作佛事、利益衆生、乃至值遇慈尊出世、我等從彼極樂淨土、更來斯處、拜見此等、廣作佛事、普利衆生、慈氏以後現在諸佛、至于未來千口出世、我等更來斯處、再見此等、廣作佛事、利益衆生、自他同證、無上菩提、仰願口部界會諸尊聖衆、梵字真言、顯密經典、始自今日結緣之四衆、乃至十方法界之群類、各隨機根口施利益、

追註

又於法華堂前、始修長日法華講也、必於同堂口奉書寫始、每日三行之法華經也、又勸進寺中莊內之道俗男女、令勤念七日七夜百萬遍之念佛、并三日三夜十萬遍之阿彌陀心真言、及于九人、普勸進十方欲滿百萬人矣、
天養元年歲次甲子六月廿四日、於播州極樂寺依大法主禪慧勸進、
普賢十願經一卷

奉書寫已畢、金剛佛子仁勝、願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆共成佛道、
般若理趣經一卷

願以書寫功、往生安樂國、面見彼佛阿彌陀、疾證無上大菩提、筆者沙門永尊、

金光明經四卷

天養元年歲次甲子六月廿日、於播州極樂寺依大法禪慧之勸進、奉書寫畢、
捨身流浪沙門嚴智

○藝州嚴島神社藏

大藏經全部

二藏

有輪藏二、一曰龍宮海藏、一曰轉法輪藏、天文中大願寺道本上人所創建也、蓋收宋本并麗本云、
法華經八卷

法師功德品第十九

長寬二年九月一日

從二位行權中納言平朝臣清盛

分別功德品第十七、左衛門少尉平盛國藥王菩薩本事品第廿三、左衛門少尉平盛信妙莊嚴王本事品第廿七

長寬二年六月二日、左兵衛尉平朝臣重康

阿彌陀經一卷、權中納言平清盛

心經一卷、仁安二年二月廿三日

太政大臣從一位平朝臣清盛書寫之、

願文一通

弟子清盛敬白、夫以蘋蘩風芳、自混芬陀利花之露、潢污水潔、遂歸薩婆若海之波、和光同塵不其然乎、伏惟、安藝國伊都伎島大明神、名載常篇、禮存恆典、一逼據孤洲之嶽嶺、四面臨巨海之渺茫、謂其靈勝、則如雲蓬露葉之在乾坤之外、謂其締構、亦看金殿玉樓之種靄闔之間、凡厥靈驗威神、言語道斷者也、於是弟子本有因緣、專致欽仰、利生揭焉、久保家門之福緣、夢感無誤、早驗子弟之榮華、今生之願望已滿、來世之妙果宜期、相傳云、當社是

觀世音菩薩之化現也、又往年之比有一沙門、相語弟子曰、願菩提心之者、祈請此社、必有發得、自聞斯言、偏以信受歸依、本意蓋在于茲、但事隔經論之說旨、非書紀之文、委巷之語、恐似憑虛、然猶情思諸法之定不定、唯在一心之信不信者歟、故漢主之信臣節也、河上之浪忽結冰、李廣之思父讎也、草中之石暗飲羽、何況百界千如、說而為經、謂之妙法二十八品、顯而為人、謂之觀音、從本垂迹、現而為神、謂之當社、本迹雖異、利益惟同、若授不退金輪之手、菩提心定純熟、若承上品蓮臺之跏、菩提道速圓滿、發心之義豈成疑殆、而今雖為在家之身、已有求道之志、朝暮所營者讚佛乘之業、寤寐所繫者生極樂之望、若是懇祈之所致、宜應之令然歟、是以彌致報賽、欲發淨心、奉書寫妙法蓮華經一部廿八品、無量義、觀普賢、阿彌陀、般若心等經各一卷、便奉納于金銅篋一合、可安置之於寶殿矣、弟子并家督三品武衛將軍、及他子息

等、兼又舍弟將作大匠、能州兩刺史、門人、家僕、

都廬卅二人各分一品一卷、所令盡善盡美也、花敷

蓮現之文、出自吾家之合力、玉軸綵牋之典、成自

一族之同情、蓋為廣修功德、各得利益也、二年之

天、暮秋之候、自參寶前、敬講華偈、始自明年、將

終卅講、以為年事不可失墜、擬粉楡於真如之宮、

編黍稷於醍醐之味、捧此功德奉資當社、鎮護國家

之威、長被百王、成就衆生之誓、彌遍三土、於戲

龍管之凌鯨波不容易、雖忘持重、九卿之詣孤島又

甚稀、庶為相憐、唯願速得無上之道心、必遂順次

之往生、進思無始之罪垢、雖似雲之滿虛空、退觀一

心之本源、猶譬日之照霜露、然則百年之終、十念

具足、超中有遊、西方雖下品不嫌、猶聞法於未敷

蓮華之裏、證中道未晚、先利物於舊栖桑梓之鄉、

能至菩提引導法界、今日之願旨趣如斯、乃至福業

所覃、廻施不限、敬白、

長寬二年九月日弟子從二位行權中納言兼皇大宮權

大夫平朝臣清盛敬白

○筑前宗像神社藏

阿彌陀經碑

○按、田島石經記曰、宋阿育王山僧佛照禪師、所贈平重盛公物也、續風土記曰、隋陳仁稜所書襄陽碑者誤也、碑面有大宋紹熙六年乙卯孟陽月之款識、則為宋人書可知也、

大藏經全部

寫本

每卷有款識、華嚴經卷尾曰、昔釋尊以三七日口之、今弟子以九十日筆之、說法與書雖異、開悟得脫是同、

又曰、斷金結緣、大宮司從五位下宗像朝臣氏國、承元元年十二月十六日書畢、

執筆書寫比丘良祐

又曰、文治元年乙巳二月十九日起筆、至承元三年己巳二月十六日卒業、時年五十一、

○按、鶴林玉露曰、余少年時、於鍾陸邂逅日本國一

僧、名安覺、自言離其國已十年、欲盡記一部藏經乃歸、念誦甚苦、不舍晝夜、每有遺忘則叩頭佛前祈佛陰相、是時已記藏經一半矣、安覺良祐法師之號也、又曰、良祐俗姓色條氏、東福千光國師弟也、

○江州石山寺藏

大藏經全部

寫本

紫式部真蹟也、書法秀潤、傳云、經背書源氏物語、此本無、

同經全部

光明皇后真蹟、有跋如前出、

阿毘曇論全部

求學沙門淳祐書、世謂之香聖經、淳祐阿闍梨傳見延寶高僧傳、

○江州三井寺園城寺藏

大唐國日本國付法血脈圖記一卷

貞觀十六年十一月四日圓珍記、

彌勒經疏三卷

寬平二年閏九月十一日 金忠大德贈施圓珍
毘盧遮那如來卅七尊曼荼羅印信一卷

三聚淨戒一卷

義真 德圓 圓仁 法度 光定 無行

安惠 各真蹟

法華經七卷

鴻山郡戶長李臣起特為嚴侍義方壽倒三松先亡聖善、足躡九蓮、普及自他現在未來獲福無邊之願、寫成銀字蓮經七軸、廣施無窮者、

天曆三年庚午四月日臣起誌、同願比丘正因、

大藏經全部

寫本

願書藏經功德力、世生生聞正法、後醍醐院證、真常、考妣二親成正覺、元弘已後戰亡魂、一切怨親、悉超度、四生六道盡沾恩、天下太平民樂業、文和三年甲午歲正月廿三日
征夷大將軍正二位源朝臣尊氏謹誌、
每卷有此願文、并筆者款識、今隨所見開錄焉、

攝大乘現證三昧大教王經卷十二

奉大檀那鈞命所書也、

淨光明律寺寓住比丘康嚴 住持比丘惠超校

文和三年甲午正月廿三日

發菩提心破諸魔經上卷

極樂律寺寓住圓通書 茲菴本達校

大般若經卷第四百六

卷第五百一十三

大乘不思議神通境界經

正法念處經卷第三

長阿含經卷第三

四分律第五

五分律第十四

金剛香菩薩經

大寶積經第五十

瑜伽論第二十

雜集論第十

寓東山泉涌小比丘祖裔

速成就院寓住比丘惠印

蓮花寺住持比丘寥忠

寓南禪比丘良碩

臨川寺寓居比丘契源

東福寓居比丘良銑

真如寺寄住比丘妙澤

淨妙禪寺寓住真月

安國寓比丘正漸

天龍寺寓居比丘梵陶

法勝寺寓居比丘性睿

俱舍論本頌一卷

毘奈耶雜事第四十

○江州寶光寺藏

大般若經六百卷

正應三年庚寅十一月廿二日為悲母妙阿

○伊勢神宮寺藏

大般若經六百卷

右奉為

天照太神、法樂莊嚴、威光倍增、敬拂瑞垣、所奉供養也、
有願文一通今不載、

文治二年四月廿六日

法橋上人位慶宗

前權律師法橋上人位實憲

權少僧都法眼和尚位辨曉

別當權大僧都法眼和尚位雅寶

大藏經全部

高山寺寓住比丘真海

大覺寺寓住比丘實忍

勸進沙門信等

權律師法橋上人位成寶

法眼和尚位定勝

弘安三年正月西大寺睿尊謁

伊勢太神宮奉納大藏經時感靈夢云備見與正菩薩傳、

大般若經全部

八幡別所安置

同全部

常明寺安置

同全部

天覺寺安置

大藏經全部

延寶六年戊午七月十七日

黃檗鐵眼禪師雕造大藏奉獻一部於

太神宮廣前、今收在山田寂照寺、

瓦經在伊勢度會郡小田外宮舊跡、

承安四年甲午五月廿七日納五部祕經、兩部曼荼羅、

筆者遵西觀道聖堅、瓦工三河國平四郎、

○尾州大須真福寺藏

大藏經全部

宋本福州板也、南禪寺大授庵舊藏、

應永三十年孟春日藤原氏女比丘尼玄璋購得、以爲

考妣冥佑、永施入朝明之福藏、

顯密疏抄類凡六千七百五十卷餘

有目錄十六卷、自大治仁平至慶長元和、諸宗古書

莫不該羅焉、

○相州鎌倉光明寺藏

大乘方等阿彌陀如來根本祕密神呪經

大日本國相州鎌倉縣佐介淨利天照光明蓮花淨寺奉

施入淨土三部大乘經十部之內、

弘治第三曆丁巳七月大吉日

從五位下前左兵衛佐源朝臣賴康花押

大藏經全部

明本

恭茲發心、就相陽鎌倉光明淨寺、建於瑤藏、鎮奉

於大藏經全部、并備續又續總計貳千四百七拾有一

卷、三百四拾五帙焉、願以此功德、祖宗世世真靈離

苦得樂、闔家主臣離災繁榮者矣、

當時寺主五十四世松譽大和尚

寶永第六歲旅己丑林鐘月日

勢州射和富山氏深舉淨源敬白

○鶴岡八幡宮藏

大藏經全部

元本

杭州路餘杭縣白雲宗南山大普寧寺大藏

奉口峨嵋山崇聖寺傳天台宗教比丘師正校勘

初學記一卷

西京寶應寺沙門釋

清覺述

南山大普寧寺嗣孫

道安注

卷首有趙子昂序、

大般若經全部

爲宿願開板畢、正二位源朝臣尊氏、

觀應二年辛卯九月十五日

同經全部

文和二年癸巳九月廿二日 左馬頭源基氏

同經全部

延文二年丁酉十月五日勸進沙門智感

同卷第四百九十三

應永十二年十月日 結城彈正少弼入道禪貴

兵部侍郎源朝臣奉、三寶弟子性祐、

同卷第五百三

應永二十一年正月日 左衛督源持氏

同卷第五百二

關東都元帥幸王丸

法華經八卷

奉納鶴岡八幡宮寺、總奉行前陸奥守憲直、

永享五年癸丑三月廿三日

○鎌倉圓覺寺藏

大般若經全部

足利板

爲宿願開板畢、

觀應三年九月十五日 正二位源朝臣尊氏

同全部

文和二年九月廿二日 左馬頭源基氏

卷第二百一、曰、總奉行人別三百內、大檀那正五位

下行兵部大輔平朝臣氏重

貞治四年乙巳十一月十六日

大雲輪請雨經一卷

宋板

福州開元禪寺住持傳法賜紫慧通大師了一、謹募衆緣、恭爲今上皇帝、祝延聖壽、文武官僚資崇祿位、圓成雕造、毘盧大藏經板一副、時紹興戊辰閏八月、

普現觀經一卷

慈惠大師真跡、紺紙金泥、

舍利講式一卷

世尊寺殿行能卿真蹟、

維摩經二卷

高麗本

○建長寺藏

法華經八卷

日蓮上人真蹟、表紙有畫蓮、共出一筆、

金剛般若經一卷

建長開山大覺禪師蘭溪道隆真蹟、

印方圓二印、其方者曰巨福建長、其圓者曰蘭溪、

古經題跋卷上終

古經題跋卷下

○武州三緣山藏

大藏經全部

宋本

妙法蓮華經卷第七

大宋國兩浙西路安吉州長興縣白鳥鄉、奉三寶弟子因道政施財贖到、法華經板一部、計七卷、捨入思溪圓覺禪院、補填大藏經字號、所集殊利伏用、上報四恩、下資三有、法界衆生、同成佛果、更冀普爲施檀信、福田增益、滋長道芽、無諸魔障者、嘉熙三年二月日弟子因道政意旨

大般涅槃經卷第十八

湖州烏墩鎮清信弟子沈宗吉開此經、資薦亡女十七娘子、總滋妙益經趣、淨邦題記、

同經卷第四十

清信弟子傳尙捨板一百五十片圓就開此經、總滋福

社、廻向四恩、三有法界衆生、謹記、

圓覺經卷第二

本寺大藏經板、伏蒙安撫大資相趙給錢贖此經、兩序及諸經板字損失者、重新刊補、務在流通佛教、利益羣生、淳祐庚戌月圓日、住持釋清穆謹誌、

○按、此本宋安吉州思溪法寶資福禪寺藏板也、我建治元年乙亥江州管山寺傳曉上人所舶賣也、每經、背押管山寺印、

大藏經全部

元本

大般若經卷五百七十

杭州路東山佛地壽聖禪寺開山住持賜紫佛光大師僧懷隱、恭被宸恩、嗣傳宗教、鼎建伽藍、悉蒙佛蔭、深思報稱、特發誠心、抽施衣資、命工刊造大藏尊經壹拾卷、所集良因、仰祝皇帝聖壽萬年、惟冀佛恩、法輪常轉、國泰民安、共樂昇平者、至元七年月日 賜紫佛光大師僧懷隱謹題、大教王經第七

杭州路南山大普寧寺大藏局僧明堅、伏承嘉興路嘉興縣思賢鄉三十三都市涇西張居奉佛女弟子張氏妙善、施財刊開尊經一卷、功德報薦先考張七三、承事先妣太君蕭氏四十七娘子、亡公張二、承事亡婆王氏八娘子、亡男屠八三、將仕亡媳婦張氏四十五娘子、亡孫男屠施有卽、亡孫女壽一娘子、同登淨土、受勝快樂、

至元二十六年八月日 住山釋如賢題、

大乘寶要義論卷第十

杭州路南山大普寧寺大藏經局僧明堅、據本局刊經、小道揚崇寶、意者伏念崇寶宿何片善、獲產人倫、生處中華、叨逢聖教、又念父母生我劬勞、欲報深恩、昊天罔極、由是幸逢刊藏、誠莫大之因緣、謹發孝心、躬刊尊經一卷、所鳩勝利、專用報薦、先祖楊千五、承事先祖妣沈氏九娘子、先考楊千六、承事先妣唐氏七六娘子、同生淨土者、至元二十六年十月日 住山釋如賢題、

淨諸惡趣經上

大藏局比丘明堅、承本寺小道徐明亮思、念幸生中國、獲產人倫、佛法難聞、道場難值、謹捐有限之財、種無窮之福、捨人本局開刊尊經一卷、入于寶藏、永遠不朽、追薦先妣沈氏十九娘、超生淨土、次冀保扶父親徐通壽延長、永無災障、合門家眷、咸逐平安者、

至元二十六年十月日、杭州路南山大普寧寺住持嗣祖比丘如賢謹題、

○按、稽古略曰、至元中帝命高僧、重整大藏、分小乘、再標芳號、徧布天下、此藏蓋其一也、

大藏經全部

高麗本

大乘淨諸惡趣經

乙巳歲高麗國大藏都監奉敕雕造、

新華嚴經論卷第十四

丙午歲分司大藏都監開板、

慧琳音義卷第一百

高麗印成大藏經跋、

臣聞我佛如來初成正覺、迺曰奇哉衆生、具有如來智慧德相、但以妄想執著、而不證得、豈憫其人、人具足於清淨無漏之性、而無明所覆、輪轉六趣、此牟尼出世之本懷而無怪乎、直說喻說而其文至於千萬軸之多者也、雖然法不自弘、由人而弘、則其法之行不行、又在於時君世主之信不信、何爾至於履至尊之位、躬上聖之資、研窮性命理、極乎道德之懿、而又有以洞明三藏妙契真乘、推我佛慈濟之道、思與億兆蒼生、捨邪歸正、同植德本、躋之于仁壽之域、則是乃明君義、辟出於尋常萬萬者之所為、千百年罕遇之盛際也、天順紀元丁丑之冬、上傳旨于桂楊君臣瓚、領中樞院事臣尹師路、議政府左贊成臣申叔舟、判中樞院事臣李仁孫、臣權搢、吏曹判書臣韓明澮、承政院都旨臣曹錫文等、若曰余以否德、承天地祖宗之靈位于臣民之上、幸與卿等而共際會、亦非小種善根、惟佛教之流于震旦、其來

已久、其說之載于文、又莫若藏經之專、幸其刊板具在於海印寺、近歲士民之好善者印成全部、然間被國家賜于日本、存者無幾、予欲印就若干部、分置于名山福地、上為先王先王后暨祖考之靈、以資福吉於冥冥、下為法界含靈以至昆蟲草木之微、幽明共利、普及無際、且凡事始厥為難、今因肇功成至五十部、將遍鎮于我國僧藍之大處、卿等其措置當務之、次第以聞、臣瓚等奔走惟謹、其經書本末巨細悉謀於惠覺尊者臣信眉、判禪宗事臣守眉、禪師臣學悅、隨即啓于上、下承政院、移于各道、分其地之廣狹、以定出紙之多寡、命副知通禮門事臣尹贊宗、簿注臣鄭垠往慶尙道、預為區辨、與判禪宗事臣守眉、海印住持臣竹幹、仍督其務、且諭監司臣李克培監總之、遂用明年春閏二月創役、至其年四月日告訖、於是命臣守溫、跋其後、臣謂諸佛出興唯為一事、王者握符膺籙、以興于世、則亦惟欲救民而已、故佛為三界之師、以導其迷、君為

萬民之主、以濟其生、是雖有世出世之異、其發誓願廣度無量人之志、則佛與王一也、恭惟我上殿下、曩在潛邸、親遭大難、掃除奸兇、天與人歸大命、以集其盛德大業、實我東方未有之聖主也、然即位以來、不自滿暇、切切求理民、安猶恐不安時、和而猶恐不和、且謂自古聖帝明王之治天下國家也、莫不崇三寶、伏大乘以之福國利世、延洪業於無疆、以無忘世尊正法付屬之遺意、於是特成大典、弘揚真化、蓋後之妙慈悲廣大之量、與佛同一機也、或問於臣曰、世之名好學善讀者不過數十卷而止、今三藏之書充於棟宇、而不可極矣、孰能遍觀而盡究其說乎、臣應之曰、夫妙明圓覺之體、徹古今而無所變通、於凡聖而無所異、是蓋無迷無悟無此無彼者也、楞嚴經曰、一人發真歸元、十方世界悉皆消損、是則當我聖上發意之初、即已轉大法輪、而與佛刹微塵衆生、同證於無上菩提之智矣、又豈必人人之目之而後為功德哉、是不可以常情而所能度也、天順

二年六月日嘉善大夫行忠佐衛上護軍臣金守溫拜手稽首謹跋、

朝鮮書

朝鮮國王李瑠奉書 件趙學士書證道歌二部、高峯禪要二部、翻譯名義二部、成道記二部、并土宜小鐘、貴國與敵邦雖阻滄溟、世講隣好、自寡人即位、函遣信使、益致殷勤禮、宜報聘肆於年、前冬拾月遣僉知中樞院事宋處儉大護軍李宗實、齎大藏經一部、法華經二部、金剛經二部、金剛經拾漆家解二部、圓覺經二部、楞嚴經二部、心經二部、地藏經二部、起信論二部、永嘉集二部、證道歌二部、雲板二隻、銅鈸伍部、磬子伍隻、石燈盞伍隻、鞍子一面、諸緣具黑細麻布二拾匹、白細苧布二拾疋、白油錦細二拾匹以下獸皮藥種類凡十二種略之表忱借貴使秀彌前去、不幸海上遇颶風、使船未知漂住何處、副使船則沈沒、唯貴使船得脫泊對馬島、遣其船主與三郎報云、書契與禮物俱失、玆用心惻、聊達事由、儻貴境惟

望矜恤護還、或其遺屍漂胃涯岸、亦令收瘞、且於琉球國地面遍行訪尋、萬一寓泊存活、制還為幸、餘冀為國珍裔、

天順肆年三月二拾捌日

朝鮮國王李瑠

○記脫方

○按、善鄰國寶曰、應永五年諭朝鮮求藏經、十六年又求藏經、二十九年又諭曰、先是需釋氏藏經、皆得如願、今復有不盡之求、聞貴國藏經板非一、正要請一藏板、安之此方、使信心輩任意印施、若能運平等之慈、旨自他之別、則豈非深福源增壽岳之一端耶、又三十一年八月答書云、所需者即大藏之板也、其餘珍貨積如山岳、又何用哉、洪熙元年朝鮮國王答書云、所需大藏經板只是一本、且予祖宗所傳不可從命、由是考之、朝鮮藏經舶來于我土者、多在室町氏之時歟、又閱嘉靖中禮曹姜顯答大內義隆書、因喪亂經書散佚、然則今彼土遺失已久、惜哉、

右三本、慶長中東照公收置於我綠山、謂之三大藏經、實天下無比之寶藏也、

觀無量壽經一卷

紺紙金字、後鳥羽帝宸翰、有鳥丸光廣卿之跋、

阿彌陀經一卷

白紙銀絲欄、後伏見帝宸翰、以國字書、書法秀麗、

經背後深草帝御牘也、

同經一卷

紺紙金字、後陽成帝宸翰、

心經阿彌陀經合卷一軸

紺紙金字、熊野本宮將軍家奉納之一也、

文明十八年丙午四月廿日

淨土三部經一卷

為先祖累代菩提、源家康年三十八歲、

天正六年戊寅正月日

觀無量壽經一卷

今玆庚寅之秋九月十四日、丁先考清揚院三十三回

之忌辰、天子降

綸命、追贈征夷大將軍正一位太政大臣、并遣

詔使、開

敕會法筵、家宣不耐感悅之至、兼又供萬部僧徒、親

自繕寫一部觀無量壽經、以終其冥福矣、真尊靈到

上品蓮臺無疑歟、因拜稽首、書卷末云、寶永七年

庚寅九月十四日正二位內大臣家宣

阿彌陀經一卷

佛言人生在世、父母為親、非父母不生、非母不育、

嗚呼其恩高深於山海、今玆乙酉之冬新營先考清揚

院殿靈廟、盛開法筵、而供僧徒、又手書此一卷、

以薦其冥福、以凝報恩之萬一、伏惟此中言言句句、

放大光明、照羣生迷闇、則其志豈空哉、因薰盟合

爪、謹書、紙尾云、寶永二年十月廿四日從二位權大

納言源家宣

稱讚淨土經一卷

中將法如書

蓋書寫千部之一也、

○止觀室藏

聚本

大藏經全部
嘉永壬子之夏、以京師法然院本校訂之、

○妙定院藏

聚本

大藏經全部
明和中定月僧正所附也、

○西蓮社藏

明本

大藏經全部
延享中雅山上人所附也、

○武州緣山古經堂藏

菩薩處胎經五卷

大統十六年歲次鶉火律在挾鐘八日丙寅、佛弟子陶
件虎卅人等、資光偏懿、體耀乘門、敬崇玄範、淵
敷靈教於陶蘭寺契遵冲業、厥大魏國內一切乘藏、搜
訪盡錄、至二年功訖、洪基創時、福映三千鏡、關惜
沈遐、圖萬葉願、法界四生、無復六塵、依尋珍郛、俱
融覺道、

○大統十六年爲我欽明帝十一年庚午、距今凡一千

三百一十有二年也、日本書紀曰、欽明帝十三年冬

十月百濟聖明王獻釋迦佛金銅像一軀、幡蓋若干、經

論若干卷、是爲我朝佛法東漸之權輿矣、由是考之、

此經或爲當時之物亦未可知也、按、星書云、古之支

干只用書日、不以紀年、紀用歲陽歲陰名、故溫公通

鑑紀年以攝提格闕逢之名、蓋有存古之義、今此跋

亦其格也、又按、佩文齋書畫譜曰、東魏大覺寺碑韓

毅隸書、蓋今楷字也、庾肩吾曰、自唐以前皆謂楷字

爲隸、此經書法頗帶隸、足以觀六朝之餘風也、陶件

虎未詳其傳、

大樓炭經卷第三

咸亨四年章武郡公蘇慶節、爲父郡國公敬造一切經、

○咸亨四年爲我天武帝白鳳二年癸酉、距今凡一千

一百九十二年也、細楷精絕、壓倒柳褚、按、舊唐書

曰、蘇定方以功遷左騎衛大將軍、封郡國公、又封子

慶節爲武邑縣公、定方前後滅三國、皆生擒其王、賞

賜珍寶不可勝計、仍拜慶節爲尙輦奉御、古云忠臣
之家必有孝子、慶節之謂也歟、

妙色王因緣經一卷

大周長安三年歲次癸卯十月己未朔四日壬戌、三藏

沙門義淨奉制於長安西明寺、新譯并綴文正字、

五句章句經一卷

比丘曇處供養

七佛名號所生功德經一卷

僧命琳書

十地經論卷第三

支許敬造

○王弼州曰、凡唐藏經卷尾皆有諸公名姓、此諸本

亦其類也、東觀餘論云、正觀永徽間褚河南書盛行、

阿惟越致經二卷

卷之首尾共押大官寺印、印文古雅、

○按、大官寺、原名百濟寺、天武帝白鳳十二年移

高市郡、改曰大官大寺、和銅三年又移平城、時道

慈僧正獻唐西明寺圖、天平中聖武帝標準此圖以修

營之時、又改名大安寺、續日本紀云、白鳳二年三月

始寫一切經、是爲我朝寫經之權輿焉、今此亦其一

歟、

優婆夷淨行法門經卷上

○經背合縫押中臣寺印、印文古篆、寺在大和宇智

郡、一曰法光寺、藤原氏功德院也、俗曰藤原寺、

此經書法峭拔、爲鎌足公眞蹟不可疑也、余嘗觀鎌倉

鶴岡神祠藏華嚴經一卷、白紙金字、筆法傳曰鎌足

公眞蹟、今與此經對照之、字體不類、紀以待勘、

金剛般若波羅密經一卷

○此經比他卷有古色、書法最遒勁、經背合縫押內

藏印、按、古語拾遺云、長谷朝倉朝更立大藏、令蘇我

麻智宿禰檢校三藏、寶藏、內藏、大藏、秦氏出納其物、東西文

氏勘錄其簿、是以漢氏賜姓爲內藏、令秦漢二氏爲

內藏大藏、主鑰藏部之緣也、

頻婆沙羅王詣佛供養經一卷

維天平十二年歲次庚辰三月十五日、正三位藤原夫人、奉爲亡考贈左大臣府君及見在內親郡主、發願敬寫一切經律論各一部、莊嚴已訖、設齋敬讀、藉此勝緣、伏惟、尊府君道濟迷津、神遊淨國、見在郡主、心神朗慧、福祚無疆、伏願聖朝萬壽、國土清寧、百辟盡忠、兆人安樂、及檀主藤原夫人、常遇善緣、必成勝果、俱出塵勞、同登彼岸、

超日明三昧經卷上

維天平十五年歲次癸未五月十一日、佛弟子藤原三女稽首、和南十方諸佛諸大菩薩諸賢聖衆、弟子孝誠多爽、怙恃夙傾、四節有遞踐之期、千載無重承之望、仰託慈悲、庶展哀感、奉爲二親魂路、敬寫一切經一部、願以茲寫經功德、仰資二親尊靈歸依淨域、曳影於觀史之宮、遊戲覺林、昇魂於摩尼之殿、次願七世父母、六親眷屬、契會真如、馳紫輿於極樂、薰修慧日、沐甘露於德池、通該有頂、普被無邊、並出塵區、俱登彼岸、

○右光明皇后願文、一一紀其由、日本史曰、寫藏經二篇誤也、以余考之、有金字一篇墨字三篇、然則僅四五年間寫藏經四部也、何其神速也、當時諸利願文多出於皇后之手云、亦女中之丈夫哉、

大剛頂瑜伽經卷第一

天平勝寶三年十一月十一日兩日間於大智寺奉尊旨寫竟、

勝鬘師子吼經一卷

茨田安麿、七世父母現在父母六親眷屬、一切無邊法界衆生誓願仕奉、

顯無邊佛土功德經一卷

東大寺良辨大僧正眞蹟、卷尾有千卷書寫之一字、筆力勁健、

大通方廣經卷下

天平三年十一月十六日、下寸主人通勢卿麻呂造奉、○此本藏外經也、武周刊定僞經目錄有此經目、蓋別本歟、按、日本靈異記修方廣懺者不少、蓋懺悔者四事

五念之一、而截三毒之良藥也、今閱此經、以懺法爲主、然則莫有害於義、

金剛頂瑜伽中略出念誦經四卷

神護景雲二年歲次戊申五月十三日、願文如阿難四事經、

佛說時非時經一卷

天平十二年五月一日、記願文如大愛道比丘尼經、

大悲經卷第一

河內民首古刀自 光明菩薩

夕河民首多氣万呂 鳥取連倭鳴古

三野連大成

卷第二

款識同前、

善教經一卷

弘道廣顯三昧經一卷

○右二卷、標背共押法塔院印、按、法塔院在大和西大寺、續日本紀曰、神護景雲元年三月壬子、高野天皇幸西大寺法塔院、令文士賦曲水、賜五位已上及文

士祿、

師子素駄婆王斷肉經一卷

○卷首尾押圓覺寺印、按、三代實錄曰、元慶五年十二月四日戊寅、清和院奉爲先太上天皇、於圓覺寺設周忌御齋會、供養一切經、太上天皇在祚之日所書寫也、王公朱紫傾都會集、此經卽其一也、

是法非法經一卷

卷首押談義屋印、蓋春日神祠舊藏也、

大意經一卷

承曆三年尋點之、沙門良喜、

施燈功德經一卷

藥師寺範源 大乘方廣總持經一卷

分別善惡所起經一卷

雜寶藏經卷第一

奮迅王問經卷上 信力入印經卷第三

奮迅王問經卷上

右五卷共有法隆寺一切經印、 毘尼摩得勒伽二卷 天平寶字六年五月十六日寫奉、

寫主僧光覺 頭僧戒藏

憂婆塞薩光 憂婆夷戒光

憂婆夷平善 橘戶君麿

橘戶若島古 橘戶人古

春部古田古 平群人成

橘戶鳥守 川原毘登真刀自古

川原毘登真主古

瑜伽師地論卷第八

天平七年乙亥八月十四日寫了、

書寫師慈氏弟子三宅人成本名

今受名慈氏弟子慈靈 檀越慈氏弟子慈性

卷第九 款識同前、

卷第四十四

寶龜十一年庚申四月廿五日

願主大宅月足 秦子夜目刀自古

卷第五十

延曆六年丁卯三月卅日書寫 沙彌戒道

卷第五十二

天平七年乙亥八月十四日寫了、

書寫師慈氏弟子慈照本名建部木万呂

檀越慈氏弟子慈姓本名三神智万呂

卷第五十五

天平七年八月日寫了、

書寫師慈氏弟子慈泰本名建部古町

卷第五十五 卷第五十七 卷第五十八 卷第六十

右四卷款識同前、

卷第六十三

天平七年八月日

書寫師慈氏弟子慈勸本名荒城臣多都乎

卷第六十六

天平七年八月日

書寫師慈氏弟子慈通本名難波部首益人

卷第六十八 卷第六十九

天平七年八月日 書寫師慈氏弟子慈勢

卷第九十二

天平七年八月日

書寫師慈氏弟子優婆塞慈法本名大石圭寸豐國

卷第九十二 卷第九十三 卷第九十四

卷第九十五 卷第九十六 右五卷款識同前、

卷第九十七

天正七年八月日

書寫師慈氏弟子優婆塞慈信本名赤染平麻呂

卷第九十九 款識同前、

卷第一百

卷尾有譯場列位二十有一人名員、支那諸本所未見也、

天長十年癸丑七月十八日 願主佛師妙廣

轉識論一卷 標背押元興寺印、

顯宗論卷第一至卷第十 標背押立五輪塔印

卷三十四卷 第三十五

二卷共押法隆寺一切經印、

十二因緣論一卷 標背押傳法院印、

十地經論卷第一 標背合縫押唐昉印、

○按、唐院玄昉之信印也、元亨釋書曰、玄昉僧正靈龜二年奉敕入唐、留唐凡二十年、聖武帝天平七年歸朝、以舶來經論疏章五千餘卷及佛像等、獻尚書省、此本亦其一也、

寶行王正論一卷 大乘起信論一卷

二卷共卷首押五輪塔印、

菩薩地持論十卷

贈從一位右大臣兼行皇太子傳中衛大將藤原朝臣督願、

延曆十六年六月十一日

○按、日本史曰、延曆十六年六月、藤原繼繩薨、蓋值其小祥忌所書也、和州法隆寺有起塔因緣經一卷、款識相同、

法華經玄贊四卷

彈正臺少疏從八位上勳十二等片縣連僧麻呂、以神

龜五年歲次戊辰九月廿六日己未永逝、眷撫憐闕定省益緩、妻奴辨踊地極天倫情深重報、乃為慈父祇圖寫藥師彌勒菩薩各一鋪、七注法華經七、疏、音訓、卷、淨飯王經、一摩訶摩耶經、卷、佛頂經、一卷、并濕丹柱發起墓院、用盡酸劑之誠焉、

天平三年八月朔丁丑八日甲申寫竟、

竊以法海顯邃不說船楫、爰以度矣、彼岸峻嶮不攀杖梯、豈敢登哉、是以後胤臺史生倉橋部造麻呂、秋豪發願為恩姊寶咩并老母齊袍、天平三年乙未五月朔戊申廿二日庚午、住於煥宅敬造奉行、仰羨因茲小端功德、勇從無始積罪、明鏡流輝、幽冥微妙、哀愍攝受、

卷第十

天永元年歲次庚寅九月五日

從法輪房得業御手傳領覺賢、

八月十八日 講師西濟寺別當春穩大德

嘉多院沙門仁詮 傳燈大師勝桓

菩薩念佛三昧經卷第三

延曆十七年四月十三日

本願主粟野寺檀越沙彌尼延命

後繼奉仕僧定來 伊福部連福人

僧勒群 經師長谷部連益繼

大毘婆沙論卷第一百一十六

天平寶字六年歲次壬寅四月八日

願主僧光覺師 大庭由布足寫

最勝王經料簡略集一卷

天平寶字五年四月廿一日僧忠懷之本、

華嚴入會剛目章一卷

天平神護元年四月廿二日、東大寺與顯此書寫者、重內證不久當成眞佛子、廻此功德施法界、皆願當得寂靜樂、

○右卷背書唐玄奘法師表啓一十四篇、與全唐文暨

弘明集所載類有異同、

新華嚴經善友名錄一卷

華嚴要義問答二卷

卷首押東大寺印、

延曆十八己卯正月八日書寫 近事行福

華嚴雜孔目章卷第三

保延六年九月十六日書了 花嚴宗僧景

十二門論義記一卷

文治三年八月廿九日 以東南院本書了、

八十華嚴經音義私記二卷

○卷尾有僧定昭之本五字、定昭南都一乘院開祖也、

其傳備見高僧傳、此音義與惠苑本有異同、往往附和

訓、頗古言也、書法岩拔、與常絕異、全嘗觀石山寺藏

玉篇筆法相類、

唯識論述記二卷

延曆五年十一月七日始講唯識論、並基師

卷第五

康平四年六月二日申時點了 興福寺住僧□□

右二卷共有法隆寺印、

大阿彌陀經二卷

宋本

施入法華寺 時顯

時顯事歷具出金澤文庫考、

首楞嚴義疏注經十二卷

師直熟思、今生儼尤不可勝計、矧是曠劫罪障、何以消除、因茲謹開此眞詮之板、以拔積業之根、所冀上報四恩、下資三有、同出妄想昏域、共入楞嚴覺場、

曆應二祀季春中澣 武藏守高師直敬誌

○武州綠山猶龍窟藏

大般若經全部

和州相樂郡海住山寺舊藏也、

卷第廿五

建長七年八月日

卷第三十二

正平七壬辰年二月日 本座一和尚賢尊

卷第四十

正平壬辰年二月日 大願主本座一和尚

卷第二百九十一

建長七年八月日修補、正平七年壬辰二月上旬中山

瀧寺伊豫法橋賢尊

卷第三百八十

正嘉二年戊午九月廿六日辰時寫了、佛子隆尊、奉安置山田大宮金峯山御寶前、願主物部成俊、般若第一教、此經法緣者、雖有重業障、必定得解脫、

摩訶般若波羅密經三十卷

大和國山邊郡下深河莊社頭御經

文安二乙丑歲三月十七日 勸緣釋永圭謹誌

大方廣佛華嚴經六十卷 款識同前、

大方等大集經三十卷

佛本行集經六十卷

仁平元年六月廿日、願以書寫功、往生極樂界、一見

一聞者、同證大菩提、

觀佛三昧經十卷

保延六年閏五月廿二日、依此經書寫功德力、次生決定生極樂、不經一宿花開敷、見佛聞法悟無生、普賢行願悉圓滿、自他同證無上道、成佛以後遍法界、利

益羣生導極樂、

發覺淨土經卷上

保延六年庚申五月十一日 勸進沙門靜嚴

卷下

保延六年五月於祇陀林寺書

郁迦羅越問菩薩行經一卷

金峯山寺一切經之內勸進沙門靜嚴

○按、祖傳翼讚曰、山門無官仁季直弟也、大原問答

會中設難、蓋此人也、

大愛道般泥洹經一卷

金峯山寺一切經之內、爲過去大中臣氏、滅罪生善所

書也、

大中臣知盛

優婆夷墮舍迦經一卷

承安五年乙未二月十六日敬奉書寫 佛子融信

摩訶衍寶嚴經一卷

天養元年六月卅日

彌勒菩薩所問本願經一卷

法鏡經一卷

於延曆寺東塔院十方院護摩堂書寫畢、

觀無量壽經一卷

校合倭漢數本、勘定釋義意趣、文字之有無、次第之上下、并點畫闕行等、取捨是非、若有難辨者、就多本用之、所以恐錯謬於卒爾其功歷年月、願愚迷於寸心、定以朋友談、因爲弘通證本、勸重刊版印矣、願以此功德平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、

建保二年^{太歲甲戌}二月初八日畢、以部筆功大蒙師誨敬

寫卷字比丘明信

奉請根本、即是圓行將來正本請出由緣記新寫與於根本文不審由、復無請本

不能校合、空積歲月、無勘定期、所以明信發願、致請機教相感、當今正時披殘部文、擬校合本及類五會終準經旨、遂勘定功、列版印本、於是同志兩三三談、一會加功、成願證談所定、記錄歷然、順理應文補缺夷剩、或來論章成其文義、或引韻篇匡字音訓乃至字畫、倭點假名次第讀談楷定證印、寬喜二年四月三日

康治元年十月八日未時書寫 大法師仁義

佛臨涅槃記法住經一卷

承安五年歲次乙未二月七日書了 佛了祐惠

普門品經一卷

嘉承二年丁亥十二月二日 勸進沙門良勝書

普賢修行念誦儀軌一卷

青龍寺山林院一切經

八師經一卷

僧祐圓

採花違王上佛受決經一卷 執筆觀信

一切智光明仙人慈心因緣不食肉經一卷 筆師觀信

得無垢女經一卷

爲過去悲母成佛得道書寫之 平宗正

根本薩婆多部律攝十卷

正嘉二年歲次戊午仲呂晦日書寫了 執筆口實

成唯識寶生論二卷

承安四年甲午六月十九日書寫了、我依書寫善上生

都奉天親託彌勒前開悟甚深法僧寬春

西終總結首尾、五月三月廿七日故首而三月小四倭漢之勘

定、先達古積其功、魯魚之錯謬、末學今有何疑、仍捧

彼證本、重開此板印者也、抑此印本者切取兩書生讀

之字畫、綴三部大經、觀經、阿彌陀經之文典但於大經者、其慇懃之志

趣不遑具記矣、仁治二年辛丑九月四日所終功也、釋子

仙才、貞永之初壬辰之歲、依遺約置此版刊、殊期一

周擬終功績、乃至平等施一切矣、二月三日立筆、十

月五日寫竟、釋企與、去弘安年中行圓上人承救願之

旨、被開一切經之印版、而正安第二之曆林鐘下旬之

天不終大功、遂歸空寂、今年依迎第三廻之忌辰、知真

為謝彼恩德、三部之妙典、五部之要義、抽懸棘開印

板、是偏所備彼追賚也、雖弘一部於穢界之雲、期再

會於淨刹之月而已、願以此功德、平等施一切、同發

菩提心、往生安樂國、

正安四年壬寅六月廿一日 沙門知真

阿彌陀經一卷 嘉禎二年丙申七月十六日始之、同歲八月十七日畢、

願主安那定觀

阿彌陀經一卷

相當樂生上人一百箇日之忌辰、翻彼遺札摺寫此經、

以此因緣入一佛土耳、

元亨二年八月晦日 何阿

○按、樂生上人南都一乘院之貫主也、弘安八年創建

念佛院、為退隱之地、自雕造肖像請向阿上人點眼

焉、略傳見祖傳翼讚卷第五念佛院條下、歸命本願

抄曰、北白河邊有同法友、蓋指此人也、

往生要集六卷

元永四年四月八日刻雕畢、願主大法師實眼、勵微力

於自心、拋財寶於佛界、迄功于一百枚、但此摸者先

年之比有聖人勸進十方刻雕之、於此所不慮之外逢

失火燒失畢、仍以自力刻之、偏是為四恩七世無緣法

界成佛得道也、

安樂集二卷 斯集一部、就現行本開彫刻印、唯為通淨教沾蒼生

也、但虎唐之謬、魚魯難、詳正本流傳後昆、那定庶使

乃至一聞之類、同結九品之緣而已、

寬元三年乙巳仲秋日 願主比丘往成

彼往成所雕刻之板、涼燠推移、字點盡消、爰悟阿數

嘆、摺寫之云、絕強抽弘通之懇志之間、續前願主之

蹤、開斯印板之文、願酬上下一部勸進之功、將成貴

賤諸人引導之誠而已、

弘安三年庚辰四月日 佛子悟阿

羣疑論七卷 建長二年庚戌季夏日 願主比丘往成

觀經疏四卷 行儀分五卷

般舟讚卷尾曰、日中結讚初句依御室經藏唐本加之、

沙門知真、佛陀寺安置之、

選擇集二卷 延應第一之曆始洗第六之天、校根源正本、直展轉錯

謬、即寫印字用合流布矣、

○按、筑前貝原氏、嘗以建曆板選擇集為皇國刻本

之權輿焉、以余考之、延曆寺有法華經稱傳教板者、

次又有往生要集共刊本也、先建曆既行于世、則貝原

氏之說恐誤、

和語燈錄七卷 和字語燈錄全部、了惠上人所撰集刊行也、予以建武

五年仲春與去冬自所校正漢字語燈錄草本、同藏武

州金澤稱名寺文庫者也、

淨土略頌一卷 勸進專心追善志、刻雕二藏頌文字、欲弘真宗聖教故

企斯板、在淨教寺、

文明十九年丁未月 勸化比丘行譽筆

淨土略名目圖一卷

夫名目圖者、去永正著雍執徐雖鏤梓、遭世亂離灰燼

焉、爰先師肇譽上人觸三十三回之忌辰、而為報恩攸

重刊已矣、遺弟比丘洛陽東山知恩第廿七世主翁燈

譽八十一載書、于時天文二十一年壬子南呂望白、

三部經音義二卷

天正十八歲次庚寅舊春上辭

和州之住侶鎮西汲流野僧珠光草錄

當麻曼陀羅疏四十八卷

元龜二辛未年四月十五日 黃蓮社玄譽

念佛安心大要抄一卷

應永三十癸卯年正月廿五日

印本右筆天台隆堯 刻彫檀主法印良俊

順次往生講式一卷

文治二年六月日 信玄書

三外往生傳一卷

正嘉二年七月十七日已刻法華山寺乘忍寫

○武州東叡山藏

元本覆刻

大藏經全部

奉再與佛說一切經藏、

今上皇帝玉體安穩、東照權現倍增威光、

征夷大將軍左大臣源家光公武運長久、

四海泰平、國家豐饒、佛法紹隆、利益無窮、

筆畢、

三部都法關梨前僧正承澄

廣弘明集卷第十一 出藏經中

嘉議大夫耽羅軍民萬戶府達魯華赤高麗國匡靖大夫

都僉議評理上護軍朴景亮、自揆非才、幸塵有位、藉

庇佛天之巨海、涵恩聖澤之陽春、愧居天地之間、莫

效涓埃之報、謹捐淨財、印造聖典全藏、奉安于神孝

寺、永充供養、流通教法、所集鴻因端、為祝延皇帝聖

壽萬萬歲、皇太后齋年、潘王國王壽齡延永、福祿增

崇、仍顯考恆居祿位、在生則安世緣於順境、終身則

超善會之樂邦、願與舉世吉人同證菩提、彼岸無人無

我、悉潛心獅座之真詮、有相有情、共拭目龍華妙會

者、

皇慶三年三月日謹誌、

○武州金澤稱名寺藏

大般若經全部

宋本也、每卷押金澤稱名寺印、又有寫本大般若經、

日本武州江戶東叡山山門三院執行探題前毘沙門堂

門跡大僧正天海願主

寬永十四丁丑曆十二月十七日

林氏幸宿花溪居士刊行、

○按、諸經論往往有跋、蓋寬永丁丑至慶安戊子、凡

閱十有二年而竣功、可謂盛矣、

普門品一卷

右此經者、傳教大師御筆以令開板之、

願主御留守總政所坐禪院權大僧都昌源

明應五年丙辰六月日

法華經三大部

天台教觀典、適異摸寫功、使後賢鑽仰、令來者弘通、

三聖垂迹砌、神德陪尊崇、百王鎮護嶺、人法彌紹隆、

過現恩所類、緇素結緣衆、悉離煩惱城、俱遊真如宮、

願主權大僧都承詮

弘安第五之曆首夏上旬候、鎮守三世無碍之密義、雖

處四曼不離之界會感、六十卷之印板、染七十八之禿

共押此印、

○按、鎌倉志曰、北條越後守平顯時創建文庫於稱名

寺境中、儲藏和漢書籍、儒書押墨印、佛書朱印、顯時

父子事歷備見東鑑、上杉安房守憲實再興文庫云、舊

藏零本往往流傳于世、世謂之金澤本、

瓦經

在稱名寺境中、土人往往掘得之于土中云、

○武州淺草正行寺藏

安樂集卷上

寬喜三年三月八日書寫了、同十五日加點畢、親戀上

人眞蹟云、

○武州礪川傳通院藏

大藏經全部

緣山大僧正豐譽麗海大和尚寄附、年月未詳、

大智度論卷第五

宋本

經背有海龍王寺印、慶長中東照公為傳通院殿附宋

本大藏經、明曆中羅災灰燼焉、今僅存此本與大法藏

之扁額耳、

○清淨心院藏

大藏經全部

槧本

文化中至誠心院僧正鳳譽鸞洲上人寄附、

○武州岩槻淨國寺藏

大藏經全部

槧本

元文二年丁巳三月恢譽瑩派上人所附也、

大藏一覽集十一卷

寬永九年壬申正月深譽傳察上人有記曰、東照公所

頒賜每卷押印、印大二寸餘、印文曰源家康弘忠恕、

朱文煥爛光采奪目、蓋東照公在駿河之日、製銅字活

板、揚出貞觀政要及此本類、以恢復三教云、

大般若經卷第十一

天平十三年七月十八日 下村主麿廣

同經卷第二十

建久元年八月吉日

同經卷第四十五

永和第五己亥二月

同經卷第一百

卷首押金澤文庫印、

同經卷第四百三十

弘和三年癸亥三月日

○武州比企慈光寺藏

大般若經全部

無災殃而不消、無福樂而不成者、般若之金言、真空

之妙典、被稱諸佛之父母、賢聖之師範也、所以至誠

奉寫大般若經一部六百卷、三世大覺十方賢聖、咸共

證明、我現當之勝願、心定成就、

貞觀十三年歲次辛卯三月三日己酉 檀越前上野國

權大目從六位下安倍朝臣小水麿

法華經全部

文永七年十一月廿日緒紳公卿及諸名緇合作也、

○下總生實大嚴寺藏

稱讚淨土經一卷

中將法如書

安樂集私記二卷

記主禪師真蹟、書法秀麗、

頌義見聞八卷

金剛寶戒章一卷

大原問答一卷

天正中所謄寫、有虎角上人跋、

○上州足利學校藏

大般若經全部

貞治二年四月日

物初謄語

斷際語錄

北圃全集

寂室語錄

無學語錄

右活版也、世曰足利本、

○按、鎌倉大草子曰、足利學校淳和帝天長八年八月

五日大內記參議小野篁奉敕建焉、作承和六年非也、貞治中上

杉安房守憲實再興之、今尙藏宋板四書、每卷有憲實

等款識、

○上州新田大光院藏

大藏經全部

槧本

大藏一覽集十一卷

○武州西久保大養寺藏

注楞伽經卷第一

聖武帝宸翰、

優婆塞戒經卷第六

天平寶字五年十二月七日 願主僧光覺頭優婆夷智

高智戒

念佛三昧經卷第三

延曆十七年四月十三日 本願主栗野寺檀越沙彌尼

延命 伊福部連福人

後繼奉仕僧定來 僧勒群

經師長谷部連益繼

大般若經卷第三十九

仁治元年庚子九月廿二日金剛佛子兼信 執筆兼尊
唯識三十頌一卷

後伏見帝宸翰、

臨終行儀一卷

圓光大師真蹟、卷尾有建久元年十月成咩款識、及寬
永三年十一月靈巖上人跋、安政己未秋模刻、

○信州淺間宮藏

大般若經六百卷

永仁二年甲午十月七日酉時書畢、一筆一部之內、施
入信州淺間宮供養讀誦故也、

大勸進唐僧圓空敬書

○常州鹿島神宮寺藏

大藏經全部

奉渡唐本一切經內、

建長七年乙卯十一月九日於鹿島社遂供養、

常州笠間長門守從五位上行藤原朝臣時朝

○按、東鑑曰、有從五位下長門守兼左衛門少尉藤原

朝臣持朝食邑笠間地、因地爲氏、仕鎌倉都亮師、持

朝子曰長朝、長朝子曰時朝、時朝善倭歌、嘉禎中任

從五位下左衛門尉、建長中任長門守、文永二年二月

九日卒、年六十二、一切經供養歌見新千載倭歌集、

大般若經全部

古板也、卷尾往往有開板信元印、未詳其傳、

○野州新里村山王社藏

大般若經六百卷

應永五年戊寅二月廿一日至十年三月廿二日卒功、

佛子宗圓願主

○按、宗圓粟田關白之孫、兼房子也、居宇都宮爲社
僧、號天台座主、天永二年十月十八日卒、年七十九、

○野州宇都宮英巖寺藏

大般若經全部

貞治二年四月日 足利板也、

○野州尾羽寺藏

大般若經全部

大檀越保義郎趙安國一刀雕經一部六百卷

茗溪朱梓刊并書、

○按、經背押上野尾羽寺印、我罔祖嘗閱此藏經、

○野州日光山藏

大藏經全部

宋本也、寬永中黑田長政侯所納云、蓋筑前宗像宮舊
藏也、○麗藏ニシテ宋本ニアラズ、

○奥州平泉中尊寺藏

大藏經全部

奉納金銀泥一切經一部

奉安置等身金色文殊師利尊像一軀

右經卷者、金書銀字、狹一行而交光、紺紙玉軸、○合カ金衆
寶而成卷、漆蓮華以安部帙、琢螺鈿以鏤題目、文殊

像者憑三世覺母之名、爲一切經藏之主、廻惠眼以照
見、運智力以護千部法華經、千口持經者、

右弟子運志多年、書寫之僧侶同音一日轉讀之、一口
充一部、舌盡千部、聚蚊之響尙成雷、千僧之聲定達天、

五百三十口題名僧、

右揚口列十軸之題名、盡五千餘卷之部帙、安手捧持

開經無煩、以前善根旨趣、偏奉爲鎮護國家也、所以
何也、弟子者東夷之遠首也、生逢聖代之無征戰、長屬

明時之多仁恩、蠻陬夷落爲之少事、虜陣戎庭爲之不
虞、當于斯時、弟子荷資祖考之餘裝、謬居俘囚之上

頭、出羽陸奥之土俗、如從風草、肅慎把婁之海變、類
向日葵、垂拱寧息三十餘年、然間時享歲貢之勤、職

業無異、羽毛齒革之贊、參期無違、因茲幹憐頻降、遠
優奉國之節、天恩無改、已過杖鄉之齡、雖知運命之

在天、爭忘忠貞之報國、憶其報謝不如修善、是以調
貢職之羨餘、拋財幣之消露、占吉土而建堂塔、冶真

金而顯佛經、經藏、鐘鏤、大門、大垣、依高築山、就窪
穿池、龍虎協宜、卽是四神具足之地也、蠻夷歸善、豈

非諸佛摩頂之場乎、又設萬燈會、供十方尊、薰修定
遍法界、素意盡成悉地、捧其全分奉祈禪定法皇蓬萊

殿上日月之影、鎮運功德林中霧露之氣長齊、金輪聖

王玉展無動、

太上天皇寶算無涯、國母仙院麻姑比齡、林虛桂陽松子侔影、三公九卿武職武官五畿七道萬姓兆民皆樂治世、各誇長生、爲御願寺長祈國家、區區之誠、天高聽卑、綸特依請、供養遂思、寶曆三年青陽三月曜宿相應、支干皆吉、延囑一千五百餘口僧、讚揚八萬十二、一切經金銀和光、照弟子之中誠、佛經合力、添法皇之上壽、弟子生涯久浴恩德之海、後身必詣安養之鄉、乃至鐵圍沙界、胎卵濕化、善根所覃、勝利無量、敬白、
天治三年三月廿四日

弟子正六位上藤原朝臣清衡敬白

大藏經全部

宋本

藤原秀衡所附也、東鑑曰、文治五年九月十七日供養宋本一切經、內外莊嚴、數字樓閣、不遑注進者是也、

古經題跋下終

附錄

○城州紫野大德寺藏

華嚴經卷第一

大宋開寶九年丙子奉敕雕造、太子與國八年奉敕印、
○按、稽古略曰、宋太宗開寶四年敕雕佛經印一藏計一十三萬板、是爲大藏印造之權輿也、東大寺齋然乞賜印本大藏經見佛祖統記及扶桑略紀、蓋此本即其一也、

○武州綠山古經堂藏

大毘婆娑論卷第廿一

○卷尾押傳法僧印一、開元經印一、按、佛祖統記曰、太宗與國八年詔福州開元寺譯經院賜名、傳法於西徧建印經院、此印即是也、

○京師智積院藏

金剛經一卷

寶祐元年七月十三日張卽之奉爲顯妣楚國夫人韓氏五九娘子冥忌、以天台教僧宗印所校本親書此經、施僧看轉、以資冥福、卽之謹題、時年六十八歲、

明年歲在甲寅結制日以授天童長老西巖禪師、

法華經七卷

淳祐四年六月張卽之書、比丘道殊募緣鏤板、刻工畢事、寶祐三年謹題、

妙法蓮華經入東土最早、世人奉之甚嚴、余浙以東至不敢舉其名、非齋戒不誦、家以鎮宅有禱、求輒響應、卿先達張樗寮卽之者、南渡中祕閣學士也、端雅清高以書法冠當時、常栖息於翠山禪寺、爲之書金剛法華二經而鐫之、今翠山火、金剛亦不存、獨法華在汪氏所、然漫漶甚矣、曩樗寮寫金剛爲摠劬勞之感、僕亦年運往矣、情豈殊哉、是用竭深心奉祕典、上報生成大恩、又冀一切含識、總成正覺、且令後世知有樗寮也、遂購而補苴之、廣流施焉、
萬曆戊子中秋日

誥卦通議大夫太子賓客吏部左侍郎兼翰林院侍讀學士慕間居士沈仁信識、時年八十有六、

○按、墨林快事曰、四月有宋刻張卽之妙法蓮華經一卷、其本今不識爲何材中、雖有蛙孔字皆堅緻如石、似有物訶禁之者、歷世靈顯不可一二舉、余官四明得廿餘卷、往歲佛屋災、像經皆灰、余驚痛不已、火後撥燎燼乃得二三卷完者、周緣焦糜、字幸無損、豈此地天龍未習瓊寶、既取諸有餘而又不忍盡耶、乃爲裝褙成帖、以存數百年之遺、樗寮昔人斥爲惡札、今詳其筆意、亦非有心爲怪、惟象其胸懷元與俗情相違、逆不知有勾圓之可喜、峭挺之可駭耳目、開天以來千奇萬異、日新不已、何獨字法不得任情哉、又按、宋史曰、張卽之字溫夫、歷陽人、特授直祕閣、以能書聞天下、金人亦寶其翰墨、

○和州奈良念佛寺藏

阿彌陀經一卷

比丘聰古、特爲慈親、寫此阿彌陀經一部、以延福壽

於三寶光中、吉祥如意者、

至正元年五月日謹誌、

○武州射谷小山林堂藏

妙沙經一卷

大明萬曆辛丑年三月吉日、當今皇帝謹發誠心書寫
金字佛說妙沙經十二卷、以此功德、專祈天下谷寧、
雨暘時若、懺愆解厄、永壽消災、

○越州柏崎極樂寺藏

大藏經全部

藥本

十住斷結經一卷

聖武帝宸翰、書法絕倫、

○武州淺草正行寺藏

大般若經卷第三百六十七

建仁元年辛酉白露月下旬、於奧州安達御莊相應寺、

執筆僧永慶、

○野州宇都宮清巖寺藏

大般若經一卷

有法隆寺行信大德跋、如前出、
顯無邊佛土功德經一卷

款曰、奉寫千卷僧正良辨、安政己未摹刻、

○武州綠山古經堂藏

普門品經一卷

大明萬曆甲辰年十二月吉日、皇貴妃鄭謹發誠心、沐
手親書觀世音菩薩普門品經一卷、恭祝今上聖主祈
願萬壽、洪福永享、康泰安裕吉祥、

消災吉祥陀羅尼經一卷

大明福王、謹發願誠心、印造佛說熾盛光如來消災陀
羅尼經一藏計五千四十八卷、以此功德竭力、祈祝皇
父、聖壽增延、聖體萬安、洪福天齋、國祚永久、皇母
皇貴妃孃孃懿躬康健、福壽延長、凡向府第清寧、一
切時中消災、吉祥如意、

○宋五臺山大華嚴寺返牒

大宋國河東道代州五臺山大華嚴寺真容菩薩院文殊

聖容殿、當殿今月廿八日有

大日本國延曆寺阿闍梨大雲寺主傳燈大法師位大宋

國賜紫僧成尋、費到

大日本國

皇太后宮降來

先帝御書經卷、

妙法蓮華經一部八卷

無量義經一卷

觀普賢經一卷

阿彌陀經一卷

般若心經一卷

右前件經依教領得於文殊師利菩薩真容面前、如法
安置、永充供養、取集福利、廻向

大日本國

先皇帝伏願覺心超悟、通明佛性之源、寶界安居、速
紹法王之位、

皇太后伏願長芳凝德、贊寶曆於千齡、永著坤儀、茂
瑤圖於億世、然後普願國清君壽、俗富民康、台衡贊
堯舜之風、藩屏曜唐虞之化、法輪永茂、鳳曆延鴻、虔
禱文殊、冀垂照鑒、謹祝、大宋國熙寧五年十一月日

五臺山真容院知菩薩殿講經律論沙門省岳等廻向、

五臺山真容院知大經藏沙門

溫著

同院表白兼講主沙門

溫琦

同院知錢帛庫講經律論賜紫沙門

省古溫道

同院知客講經律論臨壇閣梨沙門

省認溫淮

同院知御書寶庫大閣講經律論沙門

溫明省諸

同院知大師大閣賜紫沙門

省廣

同院知前殿講經律論賜紫沙門

順潛

同院堂維那講經律論承侍

省斯

同院尉典座講經律論賜紫沙門

省挑

同院都維那講經律論臨壇賜紫沙門

省順

五臺山前十寺副僧正兼真容院供養主同勾當僧

延口

正司公事講經律論臨壇首座妙齊大師賜紫沙門

彖

五臺山十寺副僧正兼真容院供養主同勾當僧

順行

○武州池上本門寺藏

法華經八卷一軸

日蓮上人真蹟、細楷精正、

註法華經四卷

同上、

法華經卷第四

傳教大師真蹟、

同八卷

紺紙金字、書法絕妙、傳云菅公真蹟、

大藏經全部

槧本

法華經八卷

紺紙銀字跋云、古云、人身難得、佛法難聞、弟子朴瑣妻趙氏等、得預人倫、又聞大法、慶幸何極、然但聞其旨、亦是障感使然、今若不更結好因、將來難辨勝果、是以夫婦並發大願、而未果初心、但曉夕思忖而已、佛天幸助使集檀財、罄我所貯、謹備藍紙金泥銀、邀請善書、八介自從己丑歲四月十七日為始下手、至今五月二十五日四旬之間、周本八十卷、法華八卷、倩寫畢功、莊嚴悉備、以此良因、普皆祝願皇圖益固、國主益遐齡、次祈助楊施主尙書安社忠、僧統元、尙書

古經題跋附錄終

至正九年五月日誌

功德主 檢校軍器監朴瑣 妻推火郡夫人趙氏

續古經題跋序

余嘗著古經題跋一卷、以為考證之一助、次復巡回諸縣、搜索縉紳公卿暨諸寺諸社司藏本、獲閱古經數百卷、其中屬千歲以上紀歲月者及若干卷、一々登錄之、以備不忘矣、蓋古經可貴、匪翅校訂今本之紕繆、至其書法自有隋唐之風格、可壓倒明清諸家之法帖矣、第憾無款識者、其書式日支一體、彼此殆難辨析、故不謾加批評焉、然而如京都東山泉涌寺藏嵯峨天皇宸翰法華經、備後尾道西國寺藏菅公真蹟金光明最勝王經、真絕無僅有之寶笈、不可以不錄載焉、竟目曰續古經題跋、時明治十六年九月念七日也、

古經堂松翁識

續古經題跋

○大和奈良正倉院藏

梵網經一卷 白麻紙

聖武天皇宸翰、

東大寺四至一卷

同敕書、

太上天皇御書雜書一卷白麻紙

天平三年九月八日寫了、中有釋僧亮詩、蓋亮晉人也、

東大寺僧綱解

天平勝寶元年當寺封戶敕施入御起請文、

東大寺中阿彌陀別院願文一卷

延曆十七年八月廿六日 從五位下文室真人長谷男

宮守

酒人內親王施入帳一卷

弘仁九年三月廿七日 二品酒人內親王

附善珠書

謹啓奉請書事

世親菩薩造十地論一部并彼疏一部、又花嚴傳一部五卷、又靈辨師造花嚴論初帙十卷、

右件書、今忽在檢校事、伏乞垂慈、欲並急事、若事了者火急返上、不敢緩遲、必使探求、欲奉請二日之間、仍注狀、

勝寶五年九月四日 善珠

道鏡書

牒寺司所

大般若經三帙第一第三第六十帙

右件經、上山寺僧瑞瓊等可合奉讀故牒、

五月廿二日 法師道鏡

謹啓合書生二人十市正月、他田豐足、

右人等、僅堪寫經、未預選定之例、此必有可助之由、自非至恩、何預此望、請垂大恩光、欲願寫生、無任仰望之至、輕卒不次、死罪頓首、

正月廿日 土師名道狀

謹上 貴門 三綱牒一卷

藥師寺三綱牒造東寺司務所

奉請四分律疏一部廿卷、首法師撰、

右依檢校經論、件疏今可見實請照此狀、早速奉請、仍錄事狀、以牒、

天平勝寶三年八月十三日 都維那永仁

上座乘岡 寺主願照

敕書二通

天平勝寶五年正月十五日

天平寶字二年八月一日

牒造東大寺司 合大乘經并小乘經二千八百十六卷

以前、依善光尼師、天平勝寶七歲八月廿一日宣請留如件、

檢受左大舍人 大隅君足

遠江員外大目從六位下池原君栗守

八十花嚴經私記 寫生咲万呂

天平廿年三月廿八日 檢酒主

水精軸

瑪瑙軸

安房石軸

梨軸

棗軸

朱頂軸

綺 緒

銀墨

鏡圓鏡六面 筆菟毛 鏡方鏡六面

右先日奉寫三部大經、表紙及軸且隨造了、進送至乞檢領、但花嚴經軸者今續令造、謹狀、

天平勝寶七歲五月廿二日

次官大藏伊美吉萬里 主典葛井連根道

附義之書法八卷目錄返納文 黃紙白紙或三十行或四十行

延曆三年三月廿九日 主典正六位上大野我孫

少判官正六位上下道臣

天平六年五月一日 大屬正八位下勳十二等內藏忌寸老人

大夫從四位下兼催造監五等小野朝臣牛養

造佛所作物帳中卷案

雜物收納

天平十五年七月四日

十五年七月廿四日反上已上疏料首主

七月廿日受研入口料疏 圓座八枚反上七枚 机十前

口月四口受研十口 坏六口 下經十箇 手巾一長四尺

寫疏所解 申請布施事

合奉寫集論并疏等一百七十三卷

用紙五千五百五十一枚

二千七百八十六枚麤紙

二千七百六十五枚疏紙

裝潢紙五千三百八十八枚

校紙一萬三百七十五枚

應給布施錢卅八貫五十四文

卅三貫二百八十五文經師料

十三貫九百卅文麤紙料 以五錢充一紙

十九貫三百五十五文疏紙料 以七錢充一紙

二貫六百九十四文裝潢料 以一錢充二紙

二貫七十五文校生料 以一錢充五紙

經師卅五人

達沙牛廿 寫紙三百卅枚 一百五十四枚麤 一百七十六枚疏 錢二千二文

難萬君 寫紙一百九十枚八十疏 錢一千二百七十文
裝潢四人

秦犬 造紙二千九百廿六枚 錢一千四百六十三文
校生九人

石村熊鷹 校紙六百卅枚 錢一百廿六文
以前起八月一日盡十二月十六日、寫紙等料物所請
如前、以解、

天平十六年十二月十八日 辛國人成
寫官一切經所解 申告朔事

合請物紙一百七十四張一百卅張數紙并式下邊管數料
卅四張櫃子間藥料

筆墨直錢一千七百文 筆十七墨十七料便光經師等

筆卅箇

墨廿九廷

紙刀子四柄既充
裝潢、

堺筆十一箇便充
裝潢、

布三丈一丈手巾二條料
二丈筆拭卅條料

辛櫃五合

机卅六前廿六前從藥師寺參、廿六前充堂、
十前從官來、十前充寫疏所、

宮卅八合

由加二口一口經師息所

杓二柄

從裝潢所進上紙六千九百張

奉寫經二百六十三卷四月寫九十二卷、五月寫五十卷、
六月寫六十一卷、七月寫六十卷、

用紙五千三百六十六張四月一千八百卅八張、六月一
千四百張、五月一千一百十七張、

七月一千四
百七張、

應殘紙一千五百卅四張充經師八百卅七張
見殘六百九十七張

校紙三千四百五十六張

經生丸部石敷寫經廿四卷 用紙四百八十二張

右賴小僧寫經廿卷 用紙二百九十六張

大島高人寫經九卷 用紙二百二張

漢淨鷹寫經六卷 用紙一百卅八張

大石廣鷹寫經八卷 用紙一百五十八張

山部花寫經八卷 用紙一百六十一張

佐伯淨足寫經二卷 用紙卅六張

坂合部文鷹寫經四卷

吳原生人寫經五卷

建部廣足寫經九卷

檜前家鷹寫經一卷

阿刀息人寫經九卷

雀部島足寫經一卷

茨田久治鷹寫經七卷
脫

丈部子虫寫經十卷

志紀久比鷹寫經八卷

葛野安鷹寫經六卷

角惠鷹寫經十五卷

許知蟻石寫經六卷

春日五百世寫經七卷

民毛鷹寫經二卷

阿閉惡人寫經三卷

委文公鷹寫經十二卷

上來金太寫經一卷

用紙八十張

用紙九十張

用紙一百八十張

用紙廿三張

用紙二百八十張

用紙廿三張

用紙一百五十二張

用紙一百九十五張

用紙一百七十六張

用紙一百廿張

用紙三百一十張

用紙一百廿七張

用紙一百卅九張

用紙卅二張

用紙六十二張

用紙二百卅一十張

用紙廿張

新家針魚寫經七卷

鬼室小東人寫經五卷

依納國方寫經八卷

余廣足寫經六卷

面德鏡寫經六卷

穴人三田鷹寫經七卷

忍海廣次寫經

忍海新次寫經

大原首鷹寫經

河內淨成寫經

難鷹寫經

三島百鳥寫經

日置核人寫經

九部島守寫經

古手鷹寫經二卷

校生川原人成

王國益

用紙一百卅二張

用紙一百三張

用紙一百六十二張

用紙一百廿張

用紙一百廿一十張

用紙一百廿張

用紙一百六十三張

用紙一百卅七張

用紙一百廿九張

用紙八十三張

用紙一百六十五張

用紙卅一十張

用紙卅二張

用紙卅二張

用紙卅張

校紙二百張

校紙一百一十張

田邊當成 校紙五百張
 田邊道主 校紙六百卅一張
 尾張小土 校紙六百七十八張
 君子真吉 校紙一千十三張
 村主五百國 校紙一百六十一張
 辛國人成 校紙一百六十二張

以前七月以往行事顯注如前解、
 七月廿九日 王國益
 辛國人成

寫一切經所解 申請布施事
 奉寫花嚴經八十卷、用紙壹仟玖佰陸拾張
 合應給布伍拾玖端貳丈伍尺

布肆拾玖端經師料 以卅張充布一端
 布參端參丈陸尺生料 以廿五枚充布一尺
 布伍端貳丈參尺裝潢料 以四百枚充布一端
 布壹端陸尺題師料 以七十卷充布一端

經師達沙牛甘 寫紙 布

漢清麿 寫紙七十六枚 布一端三丈六尺
 山邊千足 寫紙百九枚 布二端二丈九尺
 志紀咋麿 寫紙九十五枚 布二端一丈五尺
 阿閉廣人 古手麿 史部大立
 大鳥高人 角惠麿 爪工家麿
 大鳥祖足 鬼室石次 陽胡弟益
 高市老人 秦姓乙安 坂上武麿
 錦部公麿 余乙虫
 錦部大名 既母建麿

校生下道主 校紙一千九百六十枚布一端三丈八尺
 石寸熊鷹 校紙一千九百六十枚布一端三丈八尺
 裝潢五祖公麿 造紙三千二百冊枚破百十八枚不申六十枚
空六十二枚表紙冊枚
 正用一千九百六十枚 布五端二丈三尺

題師忍海廣次 題八十卷 布一端六尺
 合經師益人廿四人充官淨衣十三人
既充廿三人充般若淨衣 疏師十人一充官淨衣
九人既充
 校生十二人二人充官淨衣
十人既充 案主二人一充官而既破
一人充般若淨衣
 裝潢六人五人充官淨衣、但一人既破

今見請淨衣五十九具廿六經師 九疏師 十具校生
二具裝潢 二具案主
 合請疊半七枚見七十三枚又古十九
枚失四枚知河刀息人 今請卅六枚
 又請櫃五合且後經料 筆六十七箇卅後經料 七疏料
 墨六十七廷法如筆 鹿毛筆十箇 黃藥六十連
 薪五十束已上二物
般若料 砥一面通用
充了即充秦小廣
 更請校生四人

右物等所請如前謹解、十八年正月卅日

歷名
 以天平十八年五月廿日午時從飛鳥寺借奉請經疏等

合百五十一卷帙十七枚并著占 无帙三卷
納辛櫃一合 市綱二條長
 涅槃經疏一部十卷 違法師 解深密經疏一部十卷 圓剛師
 大般若籍目一卷逆證集 瑜伽論抄一部卅六卷 景法師
 瑜伽論抄記一部廿五卷 眞空師 佛地經論疏一部六卷 靖邁師
 唯識論述記一部十卷 基法師 唯識論義燈一部七卷 惠沼師
 唯識論集一部十四卷 百法論玄讚一卷基師撰
 俱舍論疏一部十五卷 法寶師 俱舍記一部十五卷未寫了
釋光師撰

觀所緣々論一卷

天平十八年五月廿日自一切經所奉請使舍人漢淨麿
 飛鳥寺都維那真興知充
 檢受 志 斐 万 呂
 布薩文一白紙、无
緒軸
 禪要註一白紙、无
緒軸
 雜集論十六白紙、无軸
已上經所納
 四宗論一副澄
槃論
 往生禮讚一白紙
 讚釋迦彌勒二聖因果行一白 本有今无謁一白
 法華經疏二部卅卅 慧藏師撰
白紙、无軸 并藏經疏十靖邁師撰
白紙、无軸
 大品經疏五白紙、无軸
懷法師撰 天靖間經疏一白紙、无
軸文備師
 略說口經疏一白 俱舍論疏廿白紙、无軸少々
破、神泰師疏
 唯識論疏十白紙、无軸
基法師 集論疏十三白紙、无軸
靈攝師
 攝大乘論疏十一白紙、无軸
神廓師 又五百白紙
 智度論疏五白紙、无軸
備法師 觀所緣々論疏二神郭
師
 又述本記一白紙、无軸 成業論疏一白

顯揚論抄一即白紙
 六抄六即宣津師撰
 二障義一即白紙
 大乘五法章一即
 十二緣起義一即白
 雜設難章一即白
 芥十章一即白
 道品章一即白
 大乘三性義章一即白
 大乘章一即軸
 大乘集論疏二即實大我十論註疏二即也
 无垢稱經疏六即基師

雜羯磨抄一即白紙
 花嚴抄五即白少
 大乘四善根章一即白紙
 中有章一即白
 六現觀章一即白
 末那四或章一即白
 五種衆生義一即白
 法華音義二即白
 五果章一即內有十四義四緣義
 涅槃註疏冊即廿即吉藏師

阿閉葦人墨寫四百枚筆寫二百枚
 阿曇廣万呂忍海新次充
 既母武万呂墨寫四百

右能善墨寫四百枚筆寫二百枚
 達沙牛養筆寫二百枚
 錦部公万呂
 角惠万呂充萬鬼多智
 既母百万呂
 已上六人各墨一船 十二人各筆一箇
 天平十八年六月廿四日 爪工家万呂

寫藥師經合廿一卷 用紙二百七十九張
 山邊千足一卷五色紙錢百冊文 角惠万呂二卷用五色紙錢七十五文
 勝廣崎一卷用十五錢七十五文 大鳥祖足二卷用廿錢百冊文
 九部島守二卷用廿錢百冊文 難万君二卷用廿錢百冊文
 山背野中 坂上武万呂二卷十二錢六
 高市老人一卷用十錢六十五文 大石廣万呂
 忍坂成万呂 達沙牛甘
 漢淨万呂二卷用廿錢百冊文 馬道足
 爪工家万呂一卷用十錢空文 裝潢能登忍人造紙百九十九張充錢百冊九文
 題師達沙牛甘題廿一卷三錢六十 原白万呂一校二百七十九張錢五十五文

校生荒田井馬甘一校二百七十九張錢七十五文
 天平十八年六月廿九日

寫疏所解 申請布施事
 合奉寫八敬六念并四分式本等冊一卷
 用紙二百七十六張

經師廿三人
 柞井馬甘 寫紙廿四張 錢百六十八文
 爪工家万呂 寫紙七十二張 錢五百四十四文
 馬道足 寫紙六張 錢卅二文
 余馬甘 寫紙卅一張 錢二百八十七文
 校生二人
 秦家主 一校紙二百七十六張 錢五十五文
 原白万呂 二校紙二百七十六張 錢五十五文
 裝潢一人
 玉屋公万呂 造紙二百七十六張 錢百卅八文
 題師大鳥高人 題書卅一卷 錢百廿三文
 十八年六月廿九日 志斐

高市老人 寫紙十三張 錢六十文
 大石廣万呂 寫紙十三張 錢六十五文
 忍坂成万呂 寫紙十三張 錢六十五文
 達沙牛甘 寫紙十三張 錢六十五文
 漢淨万呂 寫紙廿六張 錢百卅文
 馬道足 寫紙十三張 錢六十五文
 爪公家万呂 寫紙十三張 錢六十五文
 校生二人
 荒田井馬甘 一校紙二百七十九張 錢五十五文
 原白万呂 二校紙二百七十九張 錢五十五文
 裝潢一人
 能登忍人 造紙二百七十九張 錢百卅九文
 題師一人
 達沙牛甘 題書廿一卷
 以前依今年五月十九日宣奉寫經并布施等顯注如件
 謹解、
 十八年七月一日

寫經所解 申請理趣經布施事

合奉寫理趣經一百卷

用紙一千八百九十張一千八百張見用、冊枚空五十張表紙

校紙三千六百張校二度

裝潢紙一千八百九十張先一切經料紙便用、仍其代紙作料布可不充

戀賜布施布五十五端

冊五瑞經師料以一端充卅張

三端二丈五尺校生料以一端充一千張

四端三丈一尺裝潢料以一端充四百張

一端二丈八尺題料以七寸充一卷

經師吳原生人 寫紙百六十二張 布四端二尺一寸

阿曇廣万呂 寫紙百廿六張 布三端六尺三寸

馬道足 寫紙七十二張 布一端三丈三寸六分

神門諸上 寫紙百廿六張 布三端六尺三寸

史戶足人 寫紙九十張 布二端一丈五寸

忍坂成万呂 寫紙卅六張 布三丈七尺八寸

黃公万呂 寫紙卅六張 布三丈七尺八寸

坂上遠万呂 寫紙百廿六張 布三端六尺三寸

陽胡乙益 寫紙百廿六張 布三端六尺三寸

難万呂 寫紙百卅四張 布三端二丈五尺三寸

鬼室石次 寫紙百八張 布二端二丈九尺四寸

錦部豐成 寫紙五十四張 布一端一丈四尺七寸

山部花 寫紙十八張 布一丈八尺九寸

題師忍海廣次 題注一百卷 布一端二丈八尺

裝潢能登忍人 造紙一千八百張 布四端三丈一尺

校生大原安人 校紙一千八百張 布一端三丈三寸六分

荒田井鳥甘 校紙一千八百張 布一端三丈三寸六分

粟田船守五十四枚

以前依潤九月六日宣奉寫理趣經之料布施顯注所請

如前、謹解、 天平十八年十月十二日 阿刀酒主

伊口卿

志斐磨

寫後經所解 申請布施事

合奉寫一切經壹仟壹佰漆拾肆卷

用紙壹萬壹仟參拾張三百九十一注 壹萬九千九百九十一注 壹萬七百卅八卷力

校紙壹萬玖仟張並二校

裝潢紙壹萬肆佰張

都合應給絕壹佰陸拾貳匹

絕壹佰參拾玖匹參丈經師料 以紙八十充絕一匹

絕玖匹參丈校生料 以紙二千充絕一匹

絕壹拾參匹裝潢料 以紙八百張充絕一匹

經師貳拾漆人

吳原生人 寫紙八十張 絕一匹

大石廣万呂 寫紙二百張 絕二匹三丈

春日五百世 寫紙五百廿張 絕六匹三丈

阿曇廣万呂 寫紙四百八十張 絕六匹注者以絕一尺紙一枚充

達沙牛養 寫紙五百六十張 絕七匹

忍海新次 寫紙百廿張 絕一匹三丈

忍海廣次

右能善

山邊千足

馬道足

角惠万呂

王廣万呂

高市老人

已智蟻羽

山部花

忍坂成万呂

柞井馬養

古手万呂

阿閉葦人 寫紙三百張三百卅 注百廿 絕五匹注以六十張充絕一匹

錦部公万呂 寫紙七百張七百九 注三百廿一 絕十二匹注以六十張充絕一匹

意原人万呂

既母白万呂

錦部大名

丈部子虫

安人三田万呂

万昆多智
校生陸人
高長智鷹 校紙二千張 純一匹
秦家主 校紙五千張 純二匹三丈
大伴葦万呂 校紙一千張 純三丈
文麻呂 校紙四千張 純二匹
原白万呂 校紙四千張 純二匹
荒田井午甘 校紙三千張 純一匹三丈

裝潢肆人
秦秋庭 造紙四千八百張 純六匹
治田石万呂 造紙一千六百張 純二匹
玉屋公万呂 造紙一千六百張 純二匹
伊福部厚鷹 造紙二千四百張 純三匹

右起天平十九年四月一日盡六月廿九日、
奉寫經并經師裝潢校生等給物目錄顯請如件、以謹解、
天平十九年七月一日 爪工家万呂 伊福部男依

校生刑部金綱 校紙一千九十九枚 錢二百廿文
村山首鷹 校紙七百五十九張 錢百五十二文
大弓削若万呂 校紙千六百卅二張 錢三百廿三文
裝潢玉祖公万呂 造紙四千卅五張 錢二貫七十三文
六人部身万呂 造紙八百張 錢四百文
子部多夜須寫跡用紙數
明三階佛法下卷用紙卅八枚
雜集論跡用紙九十四枚 合卅卅二枚
天平十九年十二月三日

十九年十二月五日上七十五卷
俱舍論疏十五卽 唯識論疏十卷 唯識義燈七卷
肇論一卷 法華遊意二卽 瑜伽抄卅六卽
瑜伽記七卽 最勝王經疏二部一部五卽一部八卽花嚴經疏第二卷
寫跡所解 申請筆墨事
合筆伍箇 墨伍廷
大弓削若万呂 寫紙四張二百十張花 百九十張疏 秦右礪寫紙
阿倍鷹雜請 已上四人各筆一墨一 茨田 秦家主

大伴荒万呂 已上一人墨一廷

天平廿年六月廿二日 他田水主

阿刀

寫跡所解 申請筆事

合筆一箇 余馬甘寫紙百七十張並花嚴

天平廿年二月十四日 他田水主

玉祖公万呂 受他田水主

天平廿年三月十七日

名僧傳卅卷上帙十卷用百六十六張 空二破二 中帙十卷用百六十四張 空二破二

下帙十卷用百卅六張 空二破二 四分律疏十卷用百廿九張 空二破一

法華經吉藏師疏十二卷

天平勝寶元年七月廿四日宛

案 寫後經所解 申請布施事

合奉寫經參佰捌卷

用紙陸仟壹佰漆拾張三百卅張注 五千八百卅張

校紙壹萬捌仟張並校二度

裝潢紙貳仟肆佰張

管應給布施純玖拾匹三丈

純七十八匹三文書生料以純一匹充紙八十張 注以純一匹充紙六十張

純九匹校生料 以純一匹充紙一千張

純三匹裝潢料 以純一匹充八百張

書生廿三人

吳原生人 寫紙三百廿張 純四匹

達沙牛甘 寫紙 純

史戶足人 寫紙 純

山邊諸公 寫紙 純

錦部公万呂 寫紙四百九十一張八十六張注 四百五張 純六匹三丈

錦部大名 寫紙 純

忍海廣次 寫紙 純

古能善 寫紙四百卅五張百六張注 三百卅九張 純六匹

馬道足 寫紙

山部花 惹原人万呂

物部足人 既母百万呂

角惠万呂	岡屋石足	純一匹三丈
爪工家万呂	大原口次	純一匹
常世馬人	史屎屋万呂	純二匹
高市老人	万昆多智	純二匹
丈部千虫	伊吉馬甘	純一匹三丈
校生七人		
鴨田主	校紙三千張	純一匹三丈
葛井五百繼	校紙二千張	純一匹
荒田井午甘	校紙四千張	純二匹
原白万呂	校紙四千張	純二匹
君子島守	校紙三千張	純一匹三丈
秦家主	校紙一千張	純三丈
高橋乙万呂	校紙一千張	純三丈
裝潢四人		
秦秋庭	造紙八百張	純一匹
治田石万呂	造紙四百張	純三丈
伊福部厚万呂	造紙一千二百張	純一匹三丈

丈部會禰万呂 造紙四百張 純三丈
 以前起天平十九年十二月廿九日盡廿年三月卅日、
 奉寫書并布施物等注顯所請如前、謹解、
 天平廿年四月一日 伊福部男依

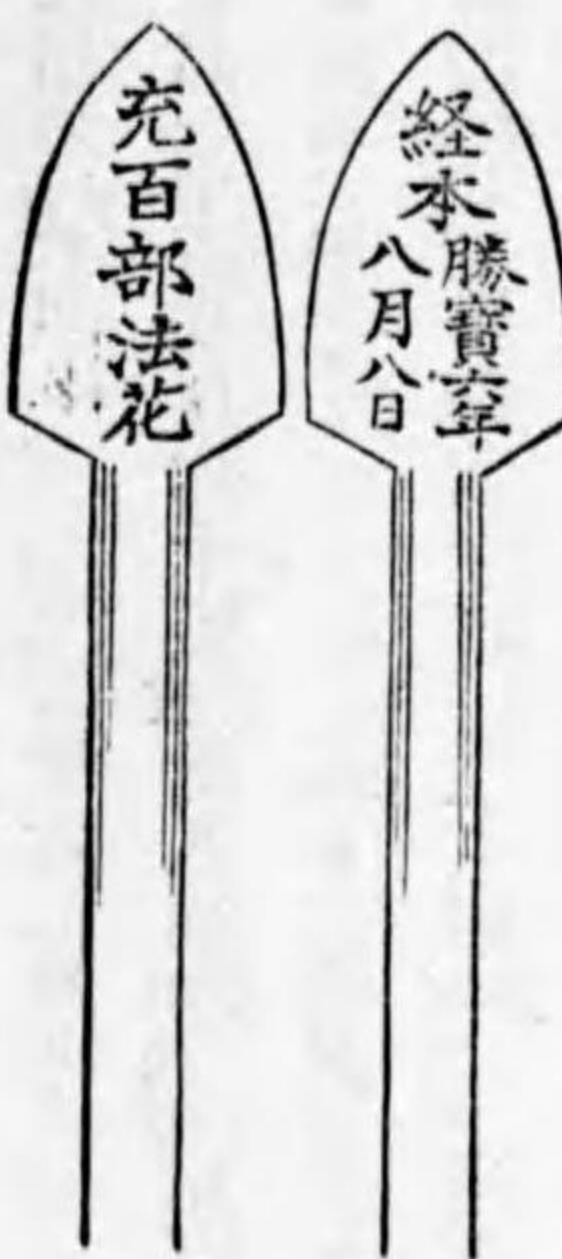
題師一人
 三島宗万呂 題書三千四百十九卷
 布卅四端漆尺玖寸捌分
 以前起天平十九年十月一日盡今年十二月十四日、
 奉寫後一切經一部既訖、仍所殘布施物注顯所請如
 前、以解、
 天平廿年六月十三日 爪工家麻呂
 常世馬人
 伊福部男依

藥師經料紙充
 道守豐足 十四 賀陽田主 十四

他田水主 十四 村國益人 十四
 鳴筆 十四 大鳥春人 十四
 山部針間万呂 十四
 右依造寺次官佐伯宿禰天感元年五月卅日宣
 如奉寫、 知史生志斐他田水主

藥師經料自內裏充奉色紙百六張之中七張表料
 九十八張公用 一張破 七張表料四法用
 諸殘一丈五尺

天感元年潤五月十二日 他田水主



法華經壹佰部八百卷 梵網經同
 一部曰佐膳 卅月日用百六十張 二部大宅立用百六十張
 三部建初廣用百六十張 四部山部針間万呂

五部大部羊 用百六十張 六部銘部大魚
 七部矢集張 用百六十張 八部他田豐足
 九部秦太 用百六十張^{破一} 十部伊蘇志內万呂
 十一部阿倍万 用百六十張^{破二} 十二部岡大津
 十三部大鳥春 用百六十張 十四部勝廣前
 十五部三島岡万呂 十六部小長谷 用百六十張^{破二}
 十七部大宅眞 用百六十張 十八部史部子 用百六十張
 十九部古東人 用百六十張^{破二} 廿部岡屋石 用百六十張
 廿一部湯坐伊 用百六十張 廿二部道守公 用百六十張^{破二}
 廿三部万昆万 用百六十張 廿四部三島白 用百六十張^{破一}
 廿五部鬼室小東人 廿六部万昆 用百六十張^{破二}
 廿七部万昆 用百六十張^{上廿} 廿八部島田大 用百六十張
 廿九部大原首 用百六十張 卅部宰金福用百六十張
 卅一部高市老 用百六十張 卅二部同
 卅三部田上島 用百六十張 卅四部張兄用百六十張
 卅五部忍坂成万呂 卅六部若後部 用百六十張
 卅七部坂合廣 用百六十張 卅八部國石虫用百六十張

卅九部凡根万呂 卅部科野虫丸
 卅一部 辛淨万 用百六十張 卅二部 阿明廣 用百六十張 破
 卅三部 忍海廣 用百六十張 卅四部 爪工家 用百六十張 破
 卅五部 布理秋田 卅六部 辛尼人
 卅七部 夫老万 用百六十張 破 卅八部 山代野 用百六十張
 卅九部 葛木豐足 五十部 韓種万呂
 五十一部 大宅童 用百六十張 五十二部 阿閉豐 用百六十張 破
 五十三部 村國益 用百六十張 五十四部 秦倉主 用百六十張
 五十五部 古家淨 用百六十張 五十六部 美努野 用百六十張
 五十七部 丈部法善 五十八部 尾張國 用百六十張
 五十九部 坂本東 用百六十張 六十部 山守馬 用百六十張
 六十一部 日置校人 六十二部 爪原神通
 六十三部 高東方 用百六十張 六十四部 文君万呂
 六十五部 余已出 用百六十張 六十六部 梁前昨 用百六十張
 六十七部 万昆石足 六十八部 秦小君
 六十九部 物部足 用百六十張 七十部 土師鷹羽
 七十一部 村衣安万呂 七十二部 鬼室石次建口

七十三部 錦部人 用百六十張 七十四部 三島石 用百六十張
 七十五部 金法孝 七十六部 新家御動物口
 七十七部 井門牛甘 七十八部 巨勢万 用百六十張
 七十九部 中江諸立 八十部 穗積虫 用百六十張
 八十一部 金目足 八十二部 高向宮 用百六十張
 八十三部 末津島万呂 八十四部 衣積廣波
 八十五部 阿刀足 用百六十張 八十六部 辛尼人
 八十七部 秦廣万呂 八十八部 田部國守
 八十九部 難万君 九十部 大和濱 用百六十張
 九十一部 出雲菱万呂 九十二部 將軍水通
 九十三部 大友真高 九十四部 忍海新 用百六十張
 九十五部 高市友足 九十六部 山邊諸 用百六十張
 九十七部 九十八部
 九十九部 百部
 造東大寺司 牒興福寺三綱務所
 合經貳佰參拾卷

帙貳拾壹枚

十九枚綵帙

十七枚 繡之中十二枚 緋綾裏、錦緣、組帶、
 五枚 緋通裏、錦緣、紫帶、
 二枚 織、並緋通裏、錦
 二枚 蠶供、並黃通裏、錦緣一枚
 牙籤漆枚

具多樹下思惟十二因緣經一卷 緣起聖道經一卷
 稻芋經一卷 了本生死經一卷

已上九十六卷紫微中臺御願經、
 首楞嚴三昧經三卷 黃紙及表朱頂
 賢劫經十三卷 黃紙及表朱頂

已上一百卅四卷圖書寮經者、經并帙大唐者、
 以前依長官佐伯宿禰天平勝寶七歲四月廿日宣令奉
 請興福寺、付膳大岡、妙正僧、
 天平勝寶七歲四月廿一日 吳原生人
 長官佐伯宿禰今毛人

錢納帳

六月

十三日請錢壹拾貫文 右雜用料自法所請、

案主上馬養味酒廣成

少鎮大法師實忠 別當大法師

法師奉榮

七月

三日請新錢壹拾貫文 右雜用料自政所請、

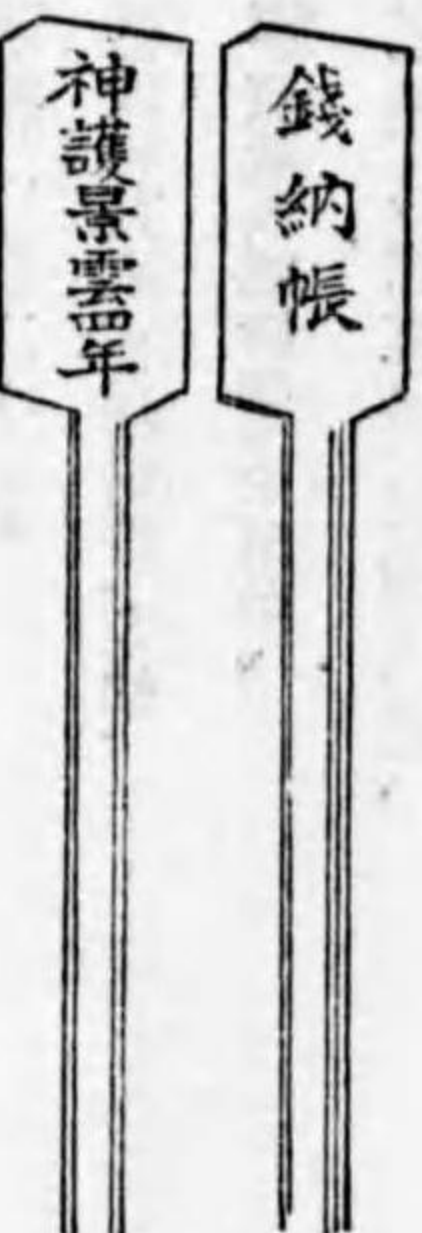
案主上馬養味酒廣成

少鎮大法師實忠 別當大法師圓智

法師奉榮

廿九日納新錢參貫 右雜用料自政所請

案主上馬養味酒廣成



神護景雲四年

少鎮大法師實忠 別當大法師

法師奉榮

寶龜三年正月

廿一日請黃紙伍萬貳仟玖佰伍拾張三萬二千五百張打繼

納辛櫃壹拾合六合塗漆、四合白木、

右奉寫四部一切經料且請納如件、

案主上馬養

大判官美努連

廿五日納凡紙三百張

右經紙一萬二千張端繼料 以一張著冊張、

案主上馬養

別當大判官美努連

二月

四日納黃紙玖佰肆拾陸張請政所、

案主上

別當大判官美努連

五日納凡紙八百張

右端經料且所請如件、

案主上馬養

別當大判官美努連

伊吉寺三綱牒敕有寫一切經所

合奉請經八卷注金剛般若經一卷、父母恩重經一卷、

文殊師利涅槃經一卷、注維摩詰經第一卷、

新述調定四分戒本一卷、土門禪經一卷、

右所請先日經合九卷、不到請注維摩詰經第一卷

自餘如數仍注具狀、即付使民長磨返抄、如前以牒、

天平十九年十一月七日

藏唯那僧順備

寺主僧嚴曜

○山階寺

金剛般若經一百二十卷

五十卷波和良紙、黃縹綺帶、梨軸、

七十卷黃紙及縹綺帶、朱頂軸、

上件之經具如來數收納已畢、

今注此狀以附使還、故牒、

天平寶字二年八月十九日 大都維那僧守護

上座法師永興

寺主法師追豐

法隆寺三綱牒上 造東大寺司政所

奉請觀世音菩薩僧壹鋪佛臺壹具

右依所遺牒有奉請已訖錄、仍事狀附廻使舍人下

道吉備返抄如件、謹以牒上、

天平寶字二年九月一日 小寺主行穩

上座法師嚴混 都維那平僕

寺主僧

藥師寺三綱 牒造東大寺司務所

奉請稱讚淨土經事三卷

右件經勘收要切願察此趣、急應返送、今錄狀付倉人、

淨成、以牒、

天平寶字四年十二月三日 都維那僧永仁

上座蓮勝

寺主穎教

以同日依員令奉請、

主典安都宿禰

案主他田水主

造圓堂所牒 造東大寺司

請畫機二具長一丈、廣五尺、 備張麻繩

右依仁部卿宣所請如件、故牒、

天平寶字七年十二月廿日 正七位下行鼓吹大令史賀陽臣元人

外從五位下行右郎貴佐葛井連根主

依請判許 判官黃三井根道

造東寺司牒 元興寺曉仁大德房下

奉請對法論抄一部十三卷基法師撰

牒今依 令旨可寫件疏、此求他所都無所得、承聞在

大德房中、仍差舍人少初位上他田水主充使令向、乞

察事趣、須臾之間分付此使事尤切要、勿在隱惜、今

以狀牒、

天平勝寶三年三月廿五日 主典正八位下紀朝臣池玉

判官正六位下上毛野君真人

玄蕃頭正五位下市原王

○京都東山知恩院藏

大般若經卷第三百八十三 一卷

養老五年歲次辛酉後缺

瑜伽師地論卷第廿六、一卷

天平二年歲次庚午九月、和泉監大鳥郡日下部郷石
津連大足書寫、

大檀越優婆塞練信從七位下大領勳十二等日下部首

麻呂總知識七百九人男二百七十六人、女四百三十三人、

附寫經所紙筆授受日記每紙捺寫所丸印及經所、勒印方印或捺經所丸印、

○民長麻呂受寫經合五卷

摩訶迦葉度貧母經一卷五張

度諸佛境界智光嚴經一卷廿張

佛說佛大僧大經一卷九張

順權方便經二卷 一卷十七張 一卷十七張

受紙八十張 見用紙六十八張 返上十張 破二張

合六十八枚、充三百四十文、

天平十四年三月廿七日 讀川原 勘人成

○石川宮衣解印二申上帙事

受紙百六十五張 正用紙百五十四張印

大智度論七帙七卷第四廿五廿六廿七廿八廿九三十廿七

返上九張 破二枚

寶龜三年四月廿六日 勘韓國 形見印

○戶合貴解 受寫一切經事

合十一卷 受紙百十枚 現用百十枚文八枚

方等泥涅經上下二卷上卷廿八枚下卷廿五枚 寶頭盧王說法經一卷用九枚

解節經一卷用十二枚

諸童子經一卷用五枚文

恆水經一卷用五枚文

顯无边佛土經一卷用三

天平十四年三月廿九日 讀川原 勘人成

兩月合貳佰拾玖枚十二枚文 充千六十二文、

自四月一日至廿九日寫一切經合六十八卷十卷外寫最勝王經

紙見用一千三百三十九枚

○吳原生人 寫經三卷 用紙八十四枚文一

阿闍王經下卷卅四枚 上卷卅一枚 雜呪集第十卷十九枚

受紙八十四枚 四月十日

○大坂廣川 申請筆事

大般若經第九帙十卷一十八二十七三十七四十七五十七六十七七十七八十七九十八 印

總寫經百七十二張 ○寶龜五年八月廿四日印

○大坂廣川 申請筆事

大般若經四十八帙九卷一十九二十八三十八四十八五十八六十七 印

總寫紙百六十四張 ○寶龜五年十月十六日

十八日下筆一箇充他田建足、

廿日下筆一箇充中室淨人、案主上馬養

廿五日下午筆二管充陽候穩足、田部國守

廿六日下午筆毛筆印二管充致小足案主上印大坂廣川印

廿八日下午筆一管充若倭部谷日案主上

經文四行 丹比連廣國 貢奉姓乙安

同二行 秦人成

同二行 形部諸國

同二行 狛枚人

同二行 多治比真人諸國

同二行 三村部友足

同二行 大倭毛人

同二行 金月足

同四行 六人部田人

同四行 中臣部人万呂

同五行 日置佐禰比等

同二行 錦部行廣繼

右試檢書體

念林老人初用百六十五張 空三 上廿一日

秦姓乙安五用百六十七張 破一 上廿二日以上三帙受忍人

古能善五用百六十七張 破三 上廿三日

錦部公万呂二用百七十一張 破一 上廿四日以上三帙受忍人

爪工家万呂五用百六十七張 破一 上廿四日

山邊千足初用百六十五張 空二 上廿四日

倭藥田万呂二用百七十一張 上廿四日

度津小竹志二用百七十一張破一 上廿五日
山田蘭万呂^五用百六十七張 上廿五日
志化唯万呂八用百八十四張破一 上廿五日 以上六帙
受奉秋庭
安子石勝二用

廿日充墨 秦真藤 掃部人万呂 茨城 吳原
川原人成 下道主 粟田船守 村山首万呂 若倭益國
調皆万呂 大伴葦万呂 三尾東人 忍海木代
大伴大野 田邊博多 大甘木積万呂 常世馬人 各記
卷數
九部水通 縣犬甘尾張万呂 大宅廣成 小治田
毘盧遮那釋卷第三

此義釋一本、於傳教阿闍梨所故請得、大中九年十一
月日、日本國沙門圓珍受金剛號智惠之記、

○京都經王護國寺藏

大佛頂陀羅尼一卷

此陀羅尼者、渡海巡禮聖沙門盛、在大宋國之時、於
東京右街太平興國寺翻經院譯經三藏賜紫令遵阿闍
梨房傳得之、

雍熙三年乙酉二月朔八日記、

宋李昭道畫大涅槃像一幅

印圖一卷

大唐咸通五年歲次甲申孟夏月中旬有八天水郡趙琛
錄記、請納、

延喜元年八月五日

唐憲宗皇帝所賜山水圖屏風

真言付法藏書一卷

弘仁十二年九月六日書、

入唐求法目錄一卷

大同元年七月廿二日 入唐學法沙門空海

十喻詩跋一卷

天長肆年參月壹日書之、

與傳教大師消息一卷

九月十三日一葉 同九日一葉 同五日一葉

止觀座主前 押延曆
寺印 當關白殿下秀次公以興山上人爲

御所望、消息四枚之內一枚進上畢、天正廿^壬四月

九日、

○京都泉涌寺藏

法華經八卷

嗟峨天皇宸翰、

律攝教授至日慕學處第廿二 一卷

上野國綠野郡淨洗寺一切經本掌經佛子教奧

弘仁六年六月十八日、寫經佛子教奧、經師匠事法

慧、奉爲皇帝皇妃太子諸皇左右大臣、洪基無動、六

親七世浴德有餘、近露自身、遠洽池界、

無垢淨光大陀羅尼經一卷

殖栗鄉秦禪賣御爲四恩奉寫了、

天應元年十二月六日 秦忌寸氏連

○華頂王宮藏

彌勒成佛經一卷

維天平二年歲次庚午八月癸未朔辛卯、奉爲從三位
行左大辨石川卿、敬寫彌勒經一十部、當願必得往生
觀史多天、奉事慈氏聽聞正法、登臨覺路、遂契菩提、

傳云、此卷吉備公真蹟、頗有唐人風格、石川卿傳

見大日本史、

摩訶摩耶經一卷

光明皇后筆

卷首捺當摩寺印、

○京都粟田青蓮院藏

貝葉梵文二葉

傳教大師將來、

付法牒一卷

順曉阿闍梨真蹟、卷首捺延曆寺印、又捺梵字印、

哭澄上人詩一軸

嗟峨天皇宸翰、弘仁十三年十月十七日

使圖書助從六位下藤原朝臣常永

理趣分私記一卷

仁和三年歲在丁未 安然書、

○紀伊高野山金剛峯寺藏

雙誓指歸二卷

此書、是弘法大師所作也、初名雙誓指歸、後改名三

教指歸、此本乃大師真筆也、然草本故與世傳本少異耳、貞和丙戌大覺寺二品親王寬尊授衣之時給之、祕在西芳精舍、不得輒出他處矣、

沙門疎石印

嵯峨天龍寺夢窓國師印也

○大和阿部寺藏

大般若波羅密多經卷第五百八十一 一卷 卷首捺阿部山印畫文殊像

天平十三年歲次辛巳三月八日發願

左京八條二坊高史千島高史稿、

○尾張大須真福寺藏

瑠玉集二卷

天平十九年歲在丁亥三月寫、

寫天平十九年歲在丁亥秋七月

附文館詞林食貨志第四一卷、捺式部印、唐人書、

○繁野有道藏 尾張人

象事分阿毘曇卷十一卷

天平寶字六年十月八日

願主僧光覺

光身菩薩

恩重父日置造古麻呂 親母秦忌寸廣刀自

○田中教忠藏 京師人

蘇悉地經一卷

天應二年正月二日

梵網經心地戒品一卷

延喜三年三月七日再校了、

聖寶印

妙法蓮華經卷第八 一卷

天平勝寶四年歲次壬辰孟秋七月廿二日丙寅之夜、

爲除案原忌寸比良久之病、館內諸人大發誓願、奉寫

法華經八卷、

○山田永年藏 京師人

大般若波羅密多經第一百一十一卷

奉爲大師故僧正大和尙、敬寫大般若經一部六百卷、

意者天四時改變、八節推移、俄頃須臾、一周已度、且

俗禮有限、不敢因違、每想提獎之教、則頓絕無期念

愍育之、言則更何恃怙、今縱粉身碎骨、以酬恩德無

邊、整方罄用私財、依憑般若、故今繕寫奉翊幽靈、因此勝

因果成妙果、

天平十九年歲次丁亥十一月癸酉朔八日庚辰大唐

弟子僧善意記、

○田中光顯藏 東京

大唐內典錄卷第十 一卷

原夫一乘發軔、馳庶苑之微言、六宗分鑠、振龍宮之

祕冊、由是摩騰入漢導其源、羅什遊晉研其奧、自茲

以降、歸仰寔繁、可謂覺迷之逸軌、拯溺之慧筏者也、

弟子國醫師從八位上六人部東人、幸逢聖代、預忝

微官、寸祿之餘、弗及尊親、是以發弘誓願、奉爲四

恩率知識等、敬寫一切經律論焉、伏願藉斯至善莊

嚴、國家淳化出於三五之先、聖壽超於萬億之外、次

願背世尊靈、并怡神淨域、享福香臺、末願合門眷屬

及知識等、龍天衛護、萬善慶集、廣暨含識、同霑此

願、俱出九居、早成佛果、

天平勝寶七歲歲次乙未七月廿三日

用紙參拾貳張

寫左京捌條貳坊三尾淨磨

一校丹生郡秦島主

二校國大寺僧闍光

裝潢匠左京八條四坊直代東人

大法炬陀羅尼經卷第九 一卷

維天平寶字五年歲次辛丑九月十七日 願主僧光覺

奉爲皇帝后

頭延光菩薩 美賀取東人 賀利部君酒宅古

田中朝臣古磨 田中朝臣定島 內臣阿古女

田中朝臣家磨 廣幡君大名 廣幡君息島

廣幡君家主女

○中村宇兵衛藏 京師人

金光明最勝王經疏第四 一卷

貞觀元年十二月十八日 東大寺僧濟雄書、

○西村兼文藏 京師人

內證佛法相承血脈譜 一卷

佛法血脈一家所承略如上、列將來法孫、依例加名、庶

示法有在也、

大日本國弘仁十年歲次己亥十二月朔乙巳五日己酉
撰定上、

前入唐受法沙門 最澄脈

前入唐受法沙門 義真證脈

一乘佛子 真忠筆受

一乘佛子 顯然書

○叡山松禪院藏

佛說雙觀無量壽經上卷

朕以萬機之暇、披覽典籍、令身延命、安民存業者、經史之中、釋教最上、由是仰憑三寶、歸依一乘、敬寫一切經、卷軸已訖、讀之者以至誠心、上為國家、下及生類、乞索百年、祈禱萬福、聞之者無量劫間、不墮惡趣、遠離此網、俱登彼岸、

天平六年歲在甲戌始寫、

○叡山延曆寺

華嚴經一卷

白紙金字、慈惠大師書、

○近江石山寺藏

聖无動尊大威德儀軌一卷 石山寺一切經六字
捺印、中興淨社筆

卷背左傳杜註、唐人書、

金剛界次第同筆一卷

卷背史記卷第九十七酈生陸賈列傳第卅七、同

胎藏界次第同筆一卷

卷背漢書高祖本紀、同

如意輪陀羅尼經一卷

卷背願野王玉篇第廿七、同、系部
至案部

大智度論百卷

○陸軍省從五位軍醫監石黑忠惠藏

十地經論卷第五

天統三年七月十五日、趙父敬造一切經、俱養願法界衆生、速斷生死苦、證大涅槃樂、

北齊天統、即陳文帝天嘉六年也、正為我欽明帝廿六年、先是帝遣大伴狹手彥、率兵數萬伐高麗破之、獲

儒釋方書佛像樂器等以歸 見大日本史、蓋此時物也歟、

法集經卷第六

有光明皇后跋、

宿曜經三卷

同前、

○陸軍少將從四位勳二等田中光顯藏

大般若經卷第廿五

有和銅五年跋、卷末紙背書長峯寺三字、

任真陀羅尼經卷下

有大官寺印、

無言童子經二卷

有光明皇后跋、

大般若經卷第十二

天平十三年歲次辛巳七月十八日奉為四恩寫

檀越下村主廣麻呂

金光明經卷第四

聖武天皇宸翰、

瑜伽師地論卷第五十三

維天平寶字六年歲次壬寅四月八日

願主僧光覺師 巫部刀美古

大唐衆經錄卷第十

余以從心之年、強加直筆、舒通經教、庶幾無沒、幸冀後賢挈其遠、致使法寶流、被津潤惟遠、豈不好邪、龍朔四年春正月於西明寺出之、

中論卷第四

奉寫微妙真空教 為開自他佛知見

生々親見无量壽 世々安坐金剛臺

貞觀十一年七月十九日寫、信州伊縣法興寺東院清

涼高樓閣畢、

○宮內省御藏

阿毘達磨大毘婆沙論卷第一百六十四

咸亨二年五月二日 經生臣李正言寫

沙門道秀校

判官通直郎守祕書郎臣劉齊禮

使朝議大夫祕書少監兼檢校光祿少卿臣崔行功

右毘婆沙論卷第一百六十四、唐咸亨二年經生李正言所寫、我天平年中所書寫經卷尤多矣、其佳者而魚養所書為最、其書似傳此法者、而金石粹編及佩文齋書譜並無李正言、今可據此經以補其缺、書譜引金石志、有釋道秀者、而以為建中中人、則固拒此道秀劉齊禮崔行功並列、崔則見文藝傳及書譜、劉則不見、古經之從南都出者太多、其註寫手及所為所施人名者往々有如此、卷備具者所未曾見、是又於古經為最、

嘉永癸丑清和月 貫名苞題、

孝經一卷 太常博士賀知章書、

○三條大相國公藏

華嚴經卷第六十五

紫紙金字、菅公書、

稱讚淨土經一卷

中將法如書、

○神宮司藏

玉篇卷第廿二從山部至九部凡十四部

延喜四年正月十五日收為典藥頭宅書、押印、

○久邇宮御藏

過去現在因果經一卷殘缺

高野大師書繡像與蓮臺寺本相同、蓋第二卷殘缺也、

○京都蓮臺寺藏

過去現在因果經一卷 弘法大師筆

上畫悉陀太子游藝講武所、下書經文、人物皆袖窄衣

冠、與法隆寺聖德太子古像同、真為古畫之冠矣、

有承應三年五月廿一日跋、蓮臺寺尊寧志、

「頭書、高野山如意輪寺醍醐院各藏一卷云、」

○梅尾高山寺藏

玉篇卷第廿七

糸部至纒字、凡二百六十九字、

傳云、唐僧光藏書、

近江石山寺藏經字至紋字、凡七十七字、

右二卷合為第廿七之全卷、首尾具備、

○元老院議官町田久成藏

中論卷第二

天平勝寶二年十二月下旬寫竟、僧妙提

金剛經一卷

元趙子昂書、跋文載在附錄、

○福岡縣下江藤正澄藏

大灌頂神呪經一卷

天平三年八月九日次氏三室 捺法隆寺印、

稱讚淨土經一卷

中將法如

選擇本願念佛集古版二卷

大般若經

藥師寺舊藏

法華玄贊

法隆寺舊藏

法華經

同

○福井崇蘭館藏

不退轉法輪經一卷

朝野魚養書、卷尾捺藥師寺印、

玉篇一卷從言部至

魚山勝林院舊藏、卷背書金剛界私記、卷尾有治安元

年八月十八日岩泉御本寫之畢、康平六年七月廿日

於平等院奉寫佛子快辨之款、

○狩谷按齋藏

大般若波羅密多經卷第五百一十一

天平二歲庚午三月上旬始寫大般若經一部、

右平群卿都菩臣足島

檀越解信平群郡在大和、

瑜伽師地論卷第十七

維天平十二年歲次庚辰三月十五日、正三位藤原夫

人、奉為亡考贈左大臣府君、及見在內親郡主發願、

敬寫一切經律論各一部、莊嚴已訖、設齋敬讚、藉此

勝緣、伏惟尊府君道濟迷途、神遊淨國、見在郡主心

神朗慧、福祚無疆、伏願聖朝萬壽、國土清平、百辟盡

忠、兆人安樂、及檀主藤原夫人、常遇善緣、必成勝

果、俱出塵勞、同登彼岸、

藤原夫人未詳其履歷、天平九年二月戊午敍正三位、寶字四年正月辛卯薨、贈正一位、見續日本紀、亡考贈大臣府君指房前公、

增壹阿鈴經卷第廿二

內史裝書匠少切位上長江巨多古志磨裝、

用穀紙卅三張

天平寶字二年三月廿七日覆位藥師寺沙門善牢甚

覆位元興寺沙門善覺對讀

天平寶字三年三月四日

散位大初位上三島縣主岡磨寫、

左大舍人少初位上大隅忌寸君足初校

坤宮舍人少初位上秦忌寸忍國再校

散位從八位下大納言公廣道參校

覆位僧位也、續日本紀曰、天平寶字九年四月辛巳、

僧綱及京內僧尼復位施物有差、坤宮皇后宮也、

華嚴八會剛目章一卷

天平神護元年四月廿二日、東大寺僧興顯此書寫者、

重內終不久、當成真佛子、廻此功德施法界、皆取當得寂靜樂、

報恩經卷第七

報恩經一部

書寫法師惠行

右以長門國司日身山守家刀自三首、

那為父母敬寫奉如件、

天平勝寶四年正月上旬

須賴王經一卷

贈從一位右大臣兼行皇太子傅中衛大將藤原朝臣

誓願延曆十六年六月十一日

繼繩公、修續日本紀總裁也、日本後紀曰、延曆十五

年七月乙巳右大臣正二位兼行皇太子傅中衛大將藤

原繼繩薨、繼繩右大臣從一位豐成之第二子也、十一

月壬辰賜故右大臣贈從一位、今此經為其小祥忌追

福所寫也、蓋續繼繩公之遺志也、

○宮內省出仕植松有經藏

根本說一切有部略毘奈耶雜事攝頌一卷

大唐景龍四年歲次庚戌四月壬午朔十日○五カ日丙申

三藏法師大德義淨宣釋梵本并綴文正字

翻經沙門吐火羅大德達磨秣磨證梵義

翻經沙門中天竺國大德拔努證梵義

翻經沙門罽賓國大德達磨難陀證梵文

翻經沙門潞州大雲寺大德慧沼證義

翻經沙門洛州崇先寺大德律師道琳證義

翻經沙門福壽寺主大德利明證義

翻經沙門洛州太平寺大德律師道恪證義

翻經沙門大薦福寺大德勝莊證義

翻經沙門相州禪河寺大德玄傘證義筆受

翻經沙門大薦福寺大德律師智積證義正字

翻經沙門西涼州伯塔寺大德慧積讀梵本

翻經波羅門東天竺國左毛衛翊府中郎將員

外置同正員臣瞿金剛證譯

翻經波羅門東天竺國大首領臣伊舍羅證梵本

翻經婆羅門左領軍衛中郎將迦濕彌羅國王子臣阿順證譯

翻經婆羅門東天竺國左執直臣中書省臣度頗具讀梵本

翻經婆羅門龍播國大達官准五品臣李輪羅證譯

金紫光祿大夫守尚書左僕射同中書門下三品上柱國

史舒國公臣韋洎源等及修文館學士三十三人同監

判官朝散大夫行著作佐郎臣劉令桓

金紫光祿大夫行祕書監檢校殿中監兼知內外閑廐隴

右三使上柱國嗣號王臣邕

○町田久成藏

金剛般若波羅密經一卷

至大四年歲在辛亥二月廿七日奉

佛弟子翰林侍讀學士中順大夫知制誥同修國史趙孟

頰手書金剛般若波羅密經、奉施本師中峯和上、轉讀

薦導、亡男趙由亮離一切苦、早證菩提、伏惟

三寶證知、孟頰謹題、

依有靈夢事賀茂鄉社寶前奉安置之者也、

永和三年丁巳歲十一月十五日、轉法輪藏寺住廷用文珪謹誌、

夫般若者名也、其體謂何、如金也、如剛也、謂金者何、萬鍛莫能渝其質也、謂剛者何、萬物莫敢嬰其鋒也、是經揭自性之淵源、廓佛心之蘊奧、昔解口尊者雨淚橫流、歎未之所聞也、深挑見刺而四相昌容其有也、猶浚靈源而三際皆不可得也、較其功則雅一念信心、使百千億劫以身布施、而不能方其萬分之一耳、而況書寫受持讀誦、及為人說、又何佛事之不臻福慧之不具也哉、茲承翰林侍讀學士趙公爲長子七一舍人年十六歲遽爾云亡、乃手書是經、遠自燕都寄來、求脫子於既迷、導神於必悟者矣、予於是焚香披閱過百遍、其筆力謹嚴端莊粹美、雖須菩提引千二百五十比丘、會世尊於給孤園、以諸花香圍繞、供養之盛殆未足比也、因卷而收之、付十山幻住庵、永遠流傳、或問功歸何所、乃說偈以答之、

金剛般若圓極、圓如大虛空舍法界、世尊住此而演說、善現持此而啓請、翰林執此而大書、我亦伏此而披閱、舍人承此而化生、幻住憑此而傳授、自他依此

而見聞、功德由此而滿足、黑者非墨白非紙、語言名相悉皆離、是名般若光明幢、不動舌根、普回向塵刹、轉不退輪、如是利益難思議、時至大四年歲在辛亥中夏幻住沙門明本拜手謹題、

○東京博物館藏

新撰字鏡卷第十二

求法苾芻、年暨七十餘三、以思惟製作、此字鏡之根本、一字爲師終身爲師之由、明吾本朝所置也、豈矧哉瞻覽此字鏡、有心者、譬如棄瓦之愚忽獲明珠、暗夜之客偶逢慧燭、如是自照察耳、抑所思慮者、從玉篇之內、擇出字體之作、依有疑至于三本並視出、而尙有所疑、伏乞、有心者、彌增加直調之、必永代流布明鏡、如今內外文書之中所被用之字限者、皆明直糺及著倭漢讀音訓也、不被並著等口々之字、本草引魚鳥蟲等部之中字、輒非可尋知之由、製作玉篇賢者、不著四聲之辨、有所闕、亦復无所極、書字而尋持數種字書、及私記等之文、拾加字々之外、尙彌在不可

極盡後之達者、所漏缺字者增不見加而已、譬如假細雨之類、隨江湖而交於四海、飛輕塵之屬、順強風而騰於妙高矣、所云者賞世之中、髓、餽、醃、醃、耐、澁、濟、鱧、鮒、荆、蕘、大略也如是等語字書之中曾、无有也、以知耳、

新撰字鏡卷第十二

天治元年甲辰五月十日書寫了、

右新撰字鏡、中古久湮晦矣、其顯于近世者、誰不珍重之、而其書僅一卷而已、其序曰、昌泰年中、改張乃成十二卷也、由之觀之、其顯現者蓋抄出本而非原本也、予蚤歲得天治元年之古寫本第二第四之兩卷、其不爲全部也、遺憾甚矣、爾後搜之索之三十餘年、于茲至嘉永甲寅、會有攝人某得之、而非古寫本、同有天治元年書寫之跋言、而缺予所得之兩卷、若夫第十一之卷素斯之無也、當時蓋得天治本私所副寫者也、其原本及十一之卷、其散佚不可得而知也、故某就予乞補其兩卷、予欣其同志、何得不許之、予亦將以彼本

補予缺也、交易而寫之、互以爲全本矣、嗟呼天憫年來之深志而賜與者也歟、非人力也、大幸哉大幸也、自今以往更得見原本及十一之卷、則死且不朽矣、書以爲跋、

安政二年乙卯十有二月 中臣朝臣遂胤

再書新撰字鏡後

乙卯年、予以攝人所得古寫本、與予所舊藏相照、得互補其缺、深以爲幸、但恨攝人所得者非天治本、而猶缺第十一卷、以爲字內已絕、不可得復見、何意丙辰年攝人又得其原本者、與予所藏者正相同、而併第十一卷皆有、於是此書初全、得復天治之舊觀、嗚呼亦奇矣、前日之所爲幸自今而視之、則未足以爲大幸、而今日之所爲幸者、則足以爲真大幸、因再書以志喜、

安政四年丁巳二月

大審院判事從五位青木信寅藏

華嚴經一卷

紫紙金字、菅公書、

同一卷

紺紙銀字、菅公書、

諸尊儀軌三卷

聖寶僧正書、捺僧正印、

仁王般若經二卷

弘法大師書、

文選零本二卷

橘逸成書、

○正六位勳三等松本正足藏

大般若經二卷

法隆寺行信大德書、

寶網經一卷

聖武天皇宸翰、

佛說妙吉祥最勝根本大教經三卷

卷尾有譯場列位十九名、大宋淳化五年十月日進、

佛說信解智力經一卷

卷尾有譯場列位十八名、大宋咸平元年七月日進、

舍利弗阿毘曇卷第十二

奉為聖朝恆延福壽、敬寫一切經論及律莊嚴既了、

和銅三年庚戌五月十日

大法炬陀羅尼經卷第六

維天平寶字五年歲次辛丑九月十七日願主僧光覺奉

為皇帝后、

頭演勝菩薩

神前倉人稻虫女

文神前倉人大島

神前倉人刀自

私部守刀自

化勝菩薩

私部稻麻呂

私部黑奈倍

私部米刀自

私部飯虫

神前倉人秋虫

神前倉人多比波々

神前倉人田次

相知刀自

置始連祖父

三宅土古

池上掠人淨濱古

池上掠人大成

田部乙人

高田部安古

彌勒菩薩所問經論卷第三

天平寶字六年十月七日

願主僧光覺

光笠菩薩

客人君益下古

父僧道風師

母奈志乃部君白益古

蒼木忌小牛

上小野

客人君智山

客人君阿古万呂

○大和奈良興福院藏

彌陀經一卷

紺地金字、

小野道風

稱讚淨土經一卷

中將法如

往生講私記一卷

伏見帝宸翰

○同長谷寺

長谷寺緣起一卷

菅公

○讚岐萩原地藏院藏

急就章

高野大師真跡急就章、余以王毛本校、多與碑本合、而自是一本如叢屢作臘屢、瘵癢作癩瘵、瘵痔作痔

瘵、又如四民康寧咸來集、諸本多一服字分二句、然邑立悒集一為一章、每句七字為是、似非誤脫類是也、其漢強作晉強、不侵作不便、豆甘勳僕並倒、蓋是誤、又如餅作餅、作杵、行揃下加一榻从夕、牘从牛、牘从禾、行為何邑為急及墨孺梓贏錐筴薰雛牝牡鴉統後之類、雖草字多、體恐是失筆致、訛似不可通、且其不以章草亦可怪、卷舊五色縑作片段、所以散亡喪大半也、世人願見名跡、猶胡買逢寶之難、不徒寶之難獲、不知者逢寶失之、及其價一定始知貴之、遺跡之所以散亡亦多類、是大師遺墨比他為易逢、余所目如左寺藏與天台大師書及此帖其尤者也、余嘗歷觀神龜寶龜間經師所寫及官府文書、想見當時傳々相承、目慣心喻其方自然存、而魚養其尤者、傳云大師舊學魚養書、當信然、適觀咸亨二年經生李正言寫毘婆沙論、知魚養取法蓋在此、益信其有淵源、古書之不可不寓目也、而古人所謂古書有日亡無日增、可不誠乎、即茲帖上右之意也、粟國貫名苞識、

○華頂山福壽院藏

妙法蓮華經卷第一 一卷

朝野魚養書、大和招提寺塔頭藏松院舊藏也、寶曆阿
闍梨裝潢之、

心經一卷

弘法大師書、卷尾題云、誦此經破十惡五逆九十五種
邪道、若欲供養十方諸佛、報十方諸佛恩、當誦觀世
音般若百遍千遍、无問晝夜常誦此經、

因明四種相違疏一卷

弘法大師書、章草飄逸、世所罕觀也、卷背晉書有桓
伊毛寶等列傳、爲唐人書、不可容疑、與石山寺
藏本相同、

註維摩經問疾品第五 一卷

日本紀云、齊明帝二年內大臣鎌子病、帝大憂苦、時
百濟法明尼者來奏曰、維摩經依問病說試讀之、禱、嘉
納之、果驗、興福寺維摩會始于此、此卷書體古雅、紙
質黃硬、蓋爲當時物不可知也、

稱讚淨土經一卷

中將法如書、所謂書寫千卷之一也、又有一卷、寄附
五條本覺寺、

中阿含經卷第十五

善光

天平寶字元年潤八月廿八日、式部位子少初伍下上

毛野君大河勘本經、

沙門行禪證

覆位興福寺

天平寶字三年九月廿九日

文部書生大初位上高赤麻呂寫

坤宮舍人少初位上秦忌寸

忍國初校

左大舍人少初位上大隅忌寸

君足再校

散位從八位下大納君

廣道參校

裝書匠散位少初位上秦忌寸

東人裝

用穀紙廿六張

同大品柔輦經卷第十六

善光

天平寶字元年九月十五日、式部位子少初位下上毛

野君大河勘本經、

覆位興福寺沙門

行禪證

天平寶字三年十月十五日

散位少初位下岡曰佐大津寫

左大舍人少初位上大隅忌寸

君足初校

散位從八位下大納君

廣道再校

坤宮舍人散位少初位上秦忌寸

忍國參校

裝書匠散位少初位上秦忌寸

東人裝

心經祕鍵一卷

弘法大師書、粟田文庫舊藏也、跋云、于時弘仁九年春
天下大疫、爰帝皇自染黃金於筆端、握紺紙於爪掌、
奉書寫般若心經一卷、予範講讀之、撰綴經旨之宗、
禾吐結願詞、蘇生族才途夜變而日光赫々、是非愚身
戒德、金輪御信力所爲也、但詣神舍輩奉誦此祕鍵、
昔予陪鷲峯說法之筵、親聞斯深文、豈不達其義而
已、入唐沙門空海上表、承和元年仲春之月於東大寺
眞言院開演、

裨婆沙論卷第十

卷首捺仁和寺一切經內之印、

文殊師利根本儀軌經卷第一

卷首捺高山寺印、卷尾連署譯場列位十七名、

長讀大藏經賜紫沙門臣善祘證義

講因明論維摩經賜紫沙門臣可瓊證義

長讀大藏經賜紫沙門臣法雲證義

講維摩經百法論賜紫沙門臣惠超證義

應制慧通大師賜紫沙門臣智遜證義

講因明唯識百法論維摩經法要大師紫沙門臣眞顯證義

講維摩經法財大師賜紫沙門臣道眞證義

講百法論明信大師賜紫沙門臣守巒證義

左街講經首座智照大師賜紫沙門臣惠溫證義

梵學傳大教賜紫沙門臣令遵筆授

梵學傳大教通梵大師賜紫沙門臣清沼筆授

講維摩經上生經百法論賜紫沙門臣惠達綴文

四天譯經三藏朝散大夫施護證梵文

試鴻臚少卿傳朝散大夫法天證梵義

試鴻臚少卿傳朝散大夫法天證梵義

殿直銀青光祿大夫檢校戶部尚書張美

常侍兼御史大夫上騎都尉監譯經臣王文壽

朝奉大夫行尚書禮部郎中柱國賜紫金魚袋臣張泊潤文

勝鬘經一卷

文永三年丙寅四月日彫之 菩提寺比丘證圓

此星點自往古有之處及破損、此度加修覆畢、

享保七壬寅三月廿八日夜 大膳法師□□

按、遠古登點之正以此本爲冠、蓋東大寺點也、證圓

律師傳見本朝高僧傳、

高麗大藏目錄三卷

三十七函入一千四百十八冊

成化廿三年九月十九日請渡之、

○京岩崎友次郎藏

華嚴經卷第卅九

弘法大師御筆、醍醐遍知院之藏經也、動亂之時處々

散在、不慮感得之、紙數十九枚、

灌頂梵天神策經

勝寶四年辰左京八條一坊民伊美吉若麻呂、財首三

氣女、右二人爲父母願、

正治三年具注曆 背面書孔雀經音義、
山王院大師將來目錄

殘缺蟲喰、

无垢優婆夷問經零本

吉備公筆云、

續古經題跋終

譯場列位序

淵明云、今我不述、後生何聞哉、猗歎古人立言而去、以垂世任教以覺後來、而後來往々不善會心、注則望文生義別出異說、刻則鹵莽滅裂脫文誤字、如大雄氏之三藏要文、不煩翻譯之人曷由而知、是以卷端必有列位、如譯語筆受潤色檢校者必詳書之、所以昭明其由來斯不虛、作鄭重謹敬之意也、乃後來造經、但存譯者一人、而其餘皆悉刊去、曷爲哉曷爲哉飲水不知源、亦謬妄之一端也、是以閱經必求古本、而古本難得、惟在篤志專壹者得見耳、日本定上人、愛古無並、儒釋兼通、往來於國中諸刹、徧訪藏經、凡唐宋以來所存寫刻之本、有譯地列名異於近本者、彙而錄之、又攷諸史冊以證其人、美哉勤矣、得成此盈寸之書、以償東西奔走數千里之勞、傳於世間、令若隱若顯之梵筵、展觀如覩、以益好學深思之人、所謂今我不述、後生何聞者、正其時乎、

中華尊古自牧居士金邠文

主客說
詩堂

江楓
火

序

禮記曰、五方之民、言語不通、嗜欲不同、達其志通其欲、東方曰寄、南方曰象、西方曰狄鞮、北方曰譯、蓋設掌理之職、以各司其事也、我佛經有譯也、防於漢明帝時、晉宋至六朝愈熾、及唐宋大備矣、代有其人、翻譯梵語、明析義理、訂正文字、無有紕謬、所謂通五方之言語者也、漢明之時有蔡愔、秦景桓靈之時有孟福張蓮孟祥吳有支亮張昱、晉宋之間有聶承遠父子褚叔度謝靈運竺法首陳士倫孫伯虎虞世雅、符秦有祕書郎趙正及道安敏智佛念惠嵩安公法和、皆天下有名博士也、至姚秦之時、鳩摩羅什入關、奉詔於西明閣及逍遙園、譯出衆經、時使沙門僧習僧遷法欽道流道恆道標僧叡僧肇等八百餘人、讐校舊經舛訛、又大將軍常山公顯左將軍安

城侯嵩、請什於長安大寺、續譯新經凡三百餘卷、於是釋道生入關請決、廬山惠遠投書諮疑義、釋惠叡常隨什傳寫經論、此時有天竺三藏弗若多羅曇摩流支卑摩羅叉弗陀耶舍佛跋跋陀羅等、參稽梵漢詮定、文旨蓋羣賢之集會、莫盛于此時也、李唐則有玄奘義淨、趙宋則有法天施護天息災等、或取未至經、或補已行之遺、內外設官、緇素分職、王公操觚、縉紳潤文、使微言不墜、取信千載也、然而間有偷佛經之名、別構異端者、故武周之時、淘汰衆經削社之、至元之時復刊定真偽異同、焚毀諸路偽造藏經、禁斷之旨甚嚴矣、我佛經揚輝于古今、輔教于萬世者若此、可不謂盛哉、若夫譯場清規已有八科十位之約、所謂主譯者、筆受者、度語者、證梵文者、證梵義者、證禪義者、潤文者、證譯義者、梵唄者、校勘者是也、唐宋譯場咸准此式、譯經圖記、開云釋教錄、粗載其事蹟、近古有朱晦庵者曰、佛經皆中國文士所撰集、吁談何容易乎、昔人既辨駁之明矣、余嘗搜索五藏名山古經暨江府綠山三大藏經、檢出唐宋以還軼于彼

而存于我諸本若干卷、其中往往有譯場列位之名員連署諸經卷尾、皆與古式符合、今本所未見也、於是乎余以為古經皆有款識、後人厭繁而省之耳、因今為世之懷疑團者、抄錄之以證翻譯之不安也、若使朱晦庵觀之、不知以為何如也、

文久三年癸亥夏六月

竺徹定書于佛眼山並帶蓮花閣、

譯場列位

佛眼山竺徹定輯

○和州法隆寺藏

大般若經卷第三百四十八

龍朔元年十月二十日、於玉華寺玉華殿上三藏法師玄奘奉詔譯、

- 大慈恩寺沙門欽筆受
- 玉華寺沙門基筆受
- 玉華寺沙門光筆受
- 大慈恩寺沙門慧朗筆受
- 西明寺沙門嘉尚筆受
- 大慈恩寺沙門道測筆受
- 弘福寺沙門神皎筆受
- 大慈恩寺沙門窺筆受
- 大慈恩寺沙門玄則綴文

- 大慈恩寺沙門神昉綴文
- 大慈恩寺沙門靖邁綴文
- 大慈恩寺沙門智通證義
- 西明寺沙門神泰證義
- 西明寺沙門慧景證義
- 大慈恩寺沙門慧貴證義
- 專當寫經判官司禮主事陳德詮
- 檢校寫經使司禮大夫臣崔元譽

太子少傅弘文館學士監修國史高陽郡開國公臣許敬宗潤色監閱

○按、大唐內典錄曰、顯慶四年譯誤也、貞元錄曰、顯慶五年正月一日起手、至龍朔三年十月二十日功畢、與今本合、蓋貞觀永徽間、我朝道照智通等從奘公傳法、故當時所舶致之經本、猶存于今日、不亦法門至幸乎、今此經亦其一也、河內園光寺亦藏大般若經、款識全同、蓋古本每卷有款識、厭煩後人省之耳、舊唐書曰、玄奘貞觀十九年歸至京師、太宗見之大悅、與之談論、於是詔將梵本六百五十七部於弘福寺翻

譯、仍敕右僕射房玄齡、太子左庶子許敬宗、廣召碩學沙門五十餘人相助整比、高宗東宮爲文德太后追福造慈恩寺及翻經院、顯慶元年高宗又令左僕射干志寧侍中許敬宗、中書令來滲、李義府、杜正倫、黃門侍郎薛元超等、共潤色玄奘所定之經、國子博士范義碩、太子洗馬郭瑜、弘文館學士高若思等助加翻譯、凡成七十五部、奏上之後以京城人衆競來禮謁、玄奘乃奏請遂靜翻譯、敕乃移於宜君山故玉華宮、六年卒、時年五十六、唐高僧傳備載譯場列位、併參可以見當時之盛典矣、

又曰、許敬宗、字延族、杭州新城人、高宗朝拜中書令太子少師同東西臺三品、咸亨元年致仕、仍加特進、三年薨、年八十一、貞觀已來朝廷所修五代史及晉書、東殿新書、西域圖志、文館詞林、姓氏錄、新禮、皆知其事、前後賞賚不可勝記、玄奘三藏以下諸師傳備見高僧傳、今不復贅焉、下皆做之、

○武州緣山古經堂藏

瑜伽師地論卷一百

大唐貞觀二十二年五月十五日、於長安弘福寺翻經院三藏法師奉詔譯、

- 弘福寺沙門知仁筆受
- 弘福寺沙門靈雋筆受
- 大總持寺沙門道觀筆受
- 法臺寺沙門道原筆受
- 清禪寺沙門明覺筆受
- 大總持寺沙門辨機證文
- 簡州福衆寺沙門靖邁證文
- 蒲州普寂寺沙門行友證文
- 普光寺沙門道智證文
- 汴州真諦寺沙門玄忠證文
- 弘福寺沙門明潛證文
- 大總持寺沙門玄應證文
- 弘福寺沙門玄謨證文
- 弘福寺沙門文備證文

蒲州栖巖寺沙門神泰證文

廓州法講寺沙門道深證文

寶昌寺沙門法祥證文

羅漢寺沙門慧貴證文

寶隆寺沙門明琰證文

大總持寺沙門道洪證文

銀青光祿大夫行太子左庶子高陽縣開國公男臣許敬宗監閱

大唐內常侍輕車都尉菩薩戒弟子觀自在敬寫西域新翻經論願畢、此餘生道心不退、庶以流通未聞之所、竊以佛日西沈、正法云謝、慧流東漸、象教方傳、希世之符、奧義宣於貝葉、非常之寶玉、至隨登於龍宮、挹其沖源截暴暴河、而遐逝口其玄闡、出朽宅而長驅、玄奘法師釋門之龍象、振且之鷲鷲、逾葱嶺而勵學、賡梵文而旋止、殺青甫就永事、流通上方、生涯多幸、預聞正法、植田或爽、稟質不全今罄茲、寸祿繕斯與旨、片言隻字具經心目、親蒙口決、庶無乖舛、以斯福祉、奉福太宗文皇帝、即御皇帝王公卿士六姻親族、凡

厥黎庶及跋行啄息、平等薰修、乘此勝基、方升正覺、

○按、大唐內典錄曰、貞觀二十年譯、貞元錄曰、貞觀十二年五月十五日至二十年五月十五日畢功、今併考之、此本廿十二謬歟、又按、全唐文許敬宗瑜伽論序曰、貞觀十九年奉敕、於宏福寺召諸名僧二十一人、學通內外者、共譯持來三藏梵本、至二十一年五月十五日、肇譯瑜伽師地論梵本四萬頌、頌三十二言、凡有五分清明十七地義、三藏元奘敬執梵文譯爲唐語、宏福寺沙門靈會、雋知、開和仁、會昌寺沙門宏度、瑤臺寺沙門道卓、大總持寺沙門道觀、清禪寺沙門明覺承義筆受、宏福寺沙門宏譽證文、大總持寺沙門宏應正字、大總持寺沙門道宏、實際寺沙門明玉、寶昌寺沙門法祥、羅漢寺沙門慧貴、宏福寺沙門文備、蒲州栖巖寺沙門神泰、廓州法講寺沙門道深、詳證大義、本地分中五識身、相應地、意地、有尋有伺地、無尋唯伺地、無尋無伺地凡十卷、普光寺沙門道智受旨綴文、三摩四多地、非三摩四多地、有心地、無心地、聞所成

地、思所成地、修所成地凡十卷、蒲州普救寺沙門行友受旨綴文、聲聞地、初瑜伽種性地盡第二瑜伽處凡九卷、元法寺沙門元隨受旨綴文、聲聞地、第三瑜伽處盡獨覺地凡五卷、汴州真諦寺沙門元忠受旨綴文、菩薩地、有餘依地、無餘依地凡十六卷、簡州福衆寺沙門靖邁受旨綴文、攝異門分攝擇分凡三十卷、大總持寺沙門辨機受旨綴文、攝異門分攝擇分凡四卷、普光寺沙門處衡受旨綴文、攝事分十六卷、宏福寺沙門明濬受旨綴文、銀青光祿大夫行太子左庶子高陽縣開國男臣許敬宗奉詔監閱、二十二年五月十五日絕筆、總成一卷、由此考之、貞觀十九年至二十二年五月十五日竣功、故或曰十九年、或曰二十年、各隨其時耳、貞元錄曰十二年誤也、此序中玄應作宏應、玄謨作宏謨、知仁作和仁、道原作道卓、法臺作瑤臺、普寂作普救皆誤也、宜以今本爲正也、但玄作元、弘作宏、共避諱也、

佛說造塔延命功德經一卷

屬賓國三藏沙門般若奉詔譯
中天竺三藏牟尼室利證梵語
西明寺大德賜紫沙門圓照筆受
章敬寺大德沙門鑿虛潤文

佛說拔除罪障呪王經一卷

大唐景龍四年歲次庚戌四月壬午朔十五日丙申、三藏法師義淨譯梵本并綴文正字、

佛說善夜經一卷

大周長安三年歲次癸卯十月己未朔四日壬戌、三藏法師義淨奉制、於長安西明寺新譯并綴文正字、

佛說妙色王因緣經一卷

款識同前、

佛說聖法印經一卷

元康四年十二月二十五日、月支菩薩沙門曇法護於涌泉演出此經、弟子竺法首筆受、合此深法普流十方大乘常光、

○和州西大寺藏

金光明最勝王經卷第十

大周長安三年歲次癸卯十月己未朔四日壬戌、三藏法師義淨奉制、於長安西明寺新譯并綴文正字、

- 翻經沙門婆羅門三藏寶思惟證梵義
- 翻經沙門婆羅門尸利未多讀梵文
- 翻經沙門七寶臺寺上座法寶證義
- 翻經沙門荊州玉泉寺加景證義
- 翻經沙門大福光寺法明證義
- 翻經沙門崇光寺神英證義
- 翻經沙門大興善寺伏禮證義
- 翻經沙門大福光寺上座波崙筆受
- 翻經沙門清禪寺主德感證義
- 翻經沙門大周西寺仁亮證義
- 翻經沙門大總持寺上座大儀證義
- 翻經沙門大周西寺法藏證義
- 翻經沙門佛授記寺都維那惠表筆受
- 翻經沙門大福光寺勝莊證義

翻經沙門大福光寺都維那慈訓證義
請翻經沙門天宮寺明曉
大學助教許觀監護繕寫進內
右列位名員支那諸本所不載也、今幸獲之足、以補譯經圖記暨釋教目錄之缺遺、頃日余觀黑田侯藏本、列位全同、

○武州緣山經閣高麗藏

般若燈論釋十五卷

貞觀四年六月於勝光寺、中印度三藏波羅頗迦羅密

多羅奉詔譯、玄謨譯語

沙門僧伽譯語

三藏同學囉多律師證譯

沙門法琳執筆

沙門惠明執筆

沙門惠隨執筆

沙門惠淨執筆

沙門慧乘證義

沙門法常證義
 沙門惠朗證義
 沙門曇藏證義
 沙門智解證義
 沙門智首證義
 沙門僧辨證義
 沙門僧珍證義
 沙門僧道岳證義
 沙門靈佳證義
 沙門文順證義
 上桂國公房玄齡參助詮定
 散騎常侍太子詹事杜正倫詮定
 禮部尙書趙郡王李孝恭詮定
 光祿大夫太府卿蘭陵男蕭瑋總知監護
 ○按、舊唐書曰、房喬字玄齡、齊州臨淄人、幼聰敏、博覽經史、工草隸、薨年七十、杜正倫、相州洹水人、善屬文、深明釋典、有集十卷行

於代、
 孝恭王、襄武王琛之弟也、高祖刻京師、拜左光祿大夫、尋爲山南道招討大使、聲名甚盛、賜實封一千二百戶、貞觀初遷禮部尙書、以功封河間郡王、太宗甚加親待、十四年暴薨、年五十、太宗素服舉哀、哭之甚慟、贈司空、揚州都督陪葬獻陵、諡曰元、配享高祖廟、
 大菩薩藏經二十卷
 貞觀十九年五月二日於西京弘福寺翻經院譯三藏玄
 葬、
 弘福寺沙門靈潤證義
 沙門文備證義
 羅漢寺沙門惠貴證義
 實際寺沙門明琰證義
 寶昌寺沙門法祥證義
 靜法寺沙門普賢證義
 法海寺沙門神昉證義

廓州法講寺沙門道深證義
 汴州演覺寺沙門玄忠證義
 蒲州普救寺沙門神泰證義
 絳州振響寺沙門敬明證義
 普光寺沙門栖玄綴文
 弘福寺沙門明濬綴文
 會昌寺沙門辨機綴文
 終南山豐德寺沙門道宣綴文
 簡州福聚寺沙門靖邁綴文
 蒲州普救寺沙門行支綴文
 栖巖寺沙門道卓綴文
 別州照仁寺沙門惠立綴文
 洛州天宮寺沙門玄則綴文
 大總持寺沙門玄應正字
 大興善寺沙門玄謨證梵文
 大乘理趣六波羅密經十卷
 貞元四年六月八日屬賓國三藏般若於西明寺奉詔譯

梵文、
 翰林院待詔光宅寺沙門利言譯梵文
 西明寺沙門圓照筆受
 資聖寺沙門道液潤文
 西明寺沙門良秀潤文
 莊巖寺沙門圓照潤文
 慈恩寺沙門應真證義
 體泉寺沙門超悟證義
 光宅寺沙門道旨證義
 西明寺沙門警空證義
 街西功德使兼勾當右神策軍使營幕使元從興元
 元從鎮軍大將軍行右監
 門衛將軍知內侍省事上王希遷奉綸旨
 柱國大原縣開國伯
 大方廣佛華嚴經八十卷
 證聖元年三月十四日、於東都大內大遍空寺譯于闐
 國三藏實叉難陀、
 天后自運佛毫首題名品

南印度沙門菩提流志宣梵文
 沙門義淨宣梵文
 沙門復禮綴文
 沙門法藏綴文
 大乘入楞伽經七卷
 久視元年五月五日、於東都三陽宮于闐國三藏實叉難陀奉詔譯、

沙門波崙筆受
 沙門玄範筆受
 沙門復禮綴文
 沙門法寶證義
 沙門弘景證義
 太子中書舍人賈膺福監護
 浴像功德經等二十部八十八卷
 景龍四年四月、於薦福寺翻經院三藏義淨奉詔譯、
 吐火羅沙門達磨未磨證梵義
 中印度沙門狀努證梵義

尉賓沙門達磨難陀證梵義
 東印度首領伊舍羅證梵義
 慧積居士讀梵本
 中印度李釋迦讀梵本
 直中書度頗多讀梵本
 沙門文網證義
 沙門慧沼證義
 沙門利貞證義
 沙門勝莊證義
 沙門愛同證義
 沙門恩恆證義
 沙門玄傘筆受
 沙門智積筆受
 東印度瞿曇金剛迦溼彌羅國王子阿順等證譯
 修文館大學士特進趙國公李嵩次文潤色
 兵部尚書道遙公韋嗣立次文潤色
 中書侍郎趙彥昭次文潤色

吏部侍郎盧藏用次文潤色
 兵部侍郎張說次文潤色
 中書舍人李又蘇題潤色
 左僕射舒國公韋臣源監譯
 右僕射許國公蘇瓌監譯
 祕書大監嗣號王邕監護
 ○按、舊唐書曰、李嶠趙州贊皇人、爲兒童時、夢有神人、遺之雙筆、自是漸有學業、弱冠舉進士、累轉監察御史、爲盧州別駕而卒、有文集五十卷、
 張說字道濟、河東人、弱冠應詔舉對策乙第、授太子校書、累轉右補闕預修三教珠英、遷右史內供奉、擢拜鳳閣舍人、薨年六十四、
 蘇頲字廷碩、瓌之子、幼敏悟、一覽至千言、神龍中遷給事中修文館學士中書舍人、明皇愛其文、
 根本說一切有部尼陀那卷第一
 大唐景龍四年歲次庚戌四月壬午朔十五日丙申、三藏法師大德沙門義淨宣譯梵本并綴文正字、

翻經沙門吐火羅大德達摩秣唐證梵義
 翻經沙門中天竺國大德校努證梵義
 翻經沙門尉賓國大德達摩難陀證梵義
 翻經沙門涪州大雲寺大德慧沼證義
 翻經沙門洛州崇光寺大德律師道琳證義
 翻經沙門福壽寺主大德利明證義
 翻經沙門洛州太平寺大德律師道恪證義
 翻經沙門大薦福寺大德勝莊證義
 翻經沙門相州禪河寺大德玄傘證義筆受
 翻經沙門大薦福寺大德律師智積證義正字
 翻經沙門德州大雲寺主慧傘證義
 翻經沙門西涼州白塔寺大德慧積讀梵本
 翻經婆羅門右驍衛翊府中郎將外置宿衛臣李釋迦讀梵本
 翻經婆羅門東天竺國左屯翊府中郎將外置同正員臣瞿金剛證譯
 翻經婆羅門東天竺國大首領伊舍羅證梵本
 翻經婆羅門東天竺國執戟直中書省臣度頗具讀梵本
 翻經婆羅門龍播國大達官准三品臣李輪羅證譯